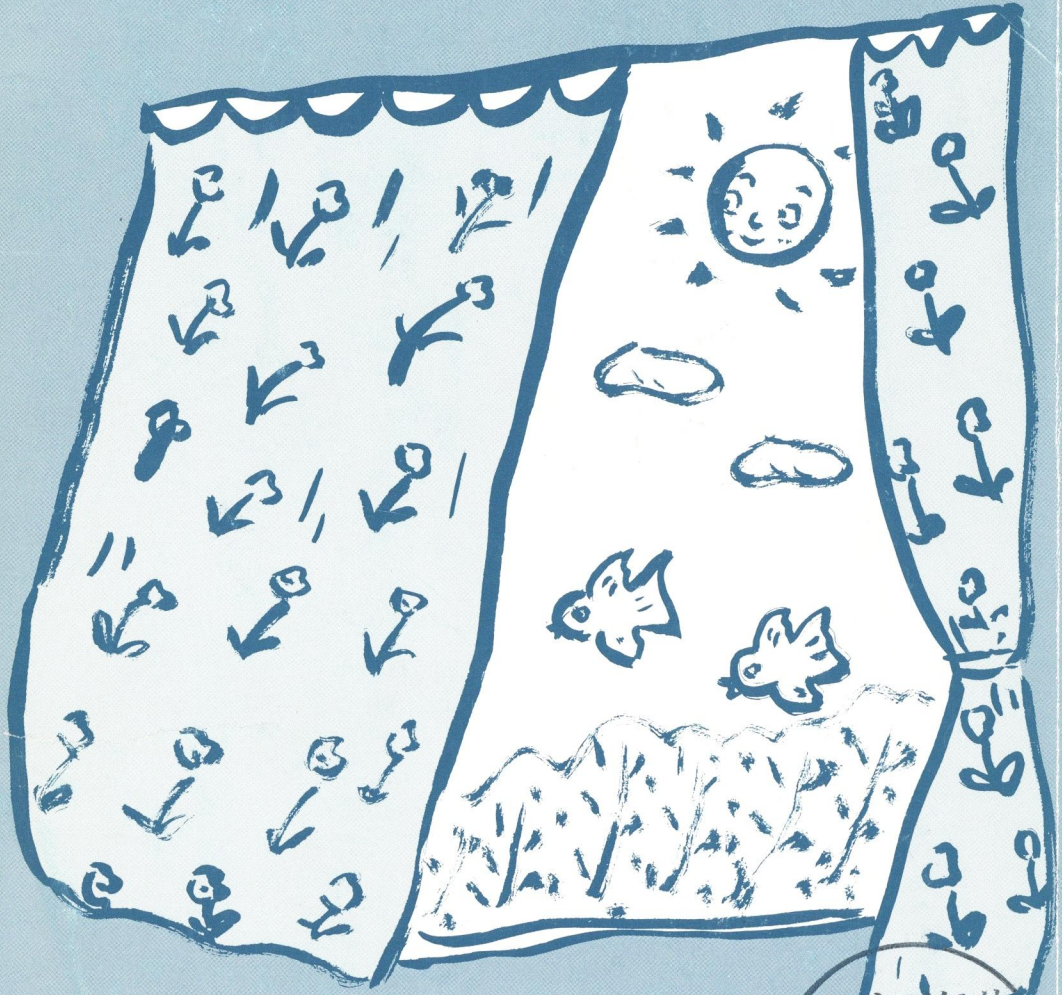


自立した女と男を  
人間らしい生活を  
差別のない社会を  
育み 創り出す

# We

ウイ

## 新しい家庭科



4  
1990

特集 '90年代、学校を変えよう

1  
逐次刊行中  
平 2年, 3, 24  
国立婦人教育院  
婦人教育情報

季節のうた

仙田敬子



千の手に  
五体ゆだねむ  
花おぼろ

'90年代、学校を変えよう

特集

●インタビュー 最首 悟さん (インタビュアー・半田たつ子)	2
一影を日向に、日の当たっていたものを影に。教育はその転換を図る要一	
●父母の教育権と学校参加—90年代の課題— ・今橋盛勝	10
●「人間ってすごいね、先生」 ・久津見宣子	14
●思春期ってステキだね先生 ・尾木直樹	18
●悩み、迷える場を学校は用意して ・金森土岐	22
●高校に救いがあるとしたら ・KK	26
●高校入試における男女差別を考える ・武田恭子	36
発 ●授業が私を変えていく ・小野慶子	38
言 ●学校と向き会う ・川上啓子	40
●家庭科は学校を変える ・星名 綾	42

新しい家庭科を創るために

(小学校) 柳田社会科との結合を ・小田富英	44
(中学校) 楽しい授業を求めて—米の学習—・特手ナツ	49
(高等学校) 授業にならない授業の中から・蔵本佳子	54

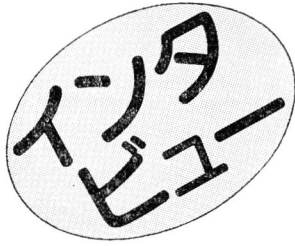
家庭科ってときめくね ・よしだあきひろ	30
生徒と教師のやりとり ・山本謙吉	33

連載

荒野のバラ／花のカリキュラム	田中裕一	60
家族と家庭科／高校教科書「家族」の問題点	酒井はるみ	64
大学生たちと歩く／教室の私語と向きあって(1)	小沢牧子	66
男性学への契機—魔男の宅急便／愛と苛立ちの朝	諸橋泰樹	68
私の朝鮮史／黄真伊	岡百合子	70
食べもの文化史／雑穀といも	石川尚子	71
KNOW HOW共学家庭科／赤穂高校へ転勤して	湯沢静江	72
広がる運動、広がる人の輪／		
筑面忠魂碑遠慮訴訟を支援する会(1)	中村英之	73
波／男女必修の家庭科が学校を変える	半田たつ子	74

〇ひと 仙田敬子さん 35

- アンケート '90年代の学校は? 59 ●読者アンケート結果 76 ●わたくしからあなたに 77  
 ●Weの読者会だより 78 ●Weになんでも言おうなんでも聞こう 80 ●イキイキぐるうぶ 81  
 ●Weの会通信 82 ●泉 83 ●十字路 84 ●アンテナ 86 ●編集後記 88



# 最首 悟 さん

・インタビューー 半田たつ子

影を日向に、日の当たっていたものを影に。  
教育は  
その転換を図る要<sup>かなめ</sup>

一生懸命もがけばもがくほど、人を深みに落としこむ学校。まるで泥沼のような学校を変えるには？ 考えあぐんでいる時、最首さんの次の文に出会った。

「子どもを信じる心があって、そして子どもはまず楽しまなければいけないという人生観があって、その上で、それゆえに、教育という営為は子どもを抑圧する手段になったり、子どもを襲う凶器になり得るといふ大人側の自戒・自制が絶えず働く…」

東京に初雪が降った翌日、東大駒場キャンパスに最首さんをお訪ねする。広大なグラウンドには雪だるま、ごみ焼却器の上にはすすぼけた三毛猫、なんとも心和む風景――

かつて全共闘にその人ありとうたわれた闘士は、柔和な哲学者のように語られた。



## ■プロフィール

- 1936 福島県に生まれる
- 1943 国民学校入学。ぜんそくのため9年かかって戦後の新制小学校を卒業
- 1967 東京大学理学系大学院博士課程を中退
- 1968 東大全学共闘会議助手共闘に参加
- 1977 第一次不知火海総合学術調査団に参加
- 1981年から第二次調査団調査団長
- 『障害児を普通学校へ・全国連絡会』世話人著書に『生あるものは皆この海に染まり』（新曜社）。『明日もまた今日のごとく』（どうぶつ社）がある

——'80年代に学校は、その矛盾が極まって、いまさら小手先の「改善」では修復不可能のところまで来てしまったと思うんです。最首さんのお書きになったものは、これまでも読ませていただいていたのですけれど、『生あるものは皆この海に染まり』は、ずしんと心に響きました。そして『明日もまた今日のごとく』を読んで、『90年代、学校を変えよう』をテーマに掲げたこの号では、どうしてもインタビューを願いました。

うかがいたかったことの一つは、「学校というものの持つ『場の力』」について書いていらっしやることです。一番下のお子さんで「ダウン症らしい」星子さんが、学校に行って、校庭や廊下を歩くだけ、給食を食べて帰ってくる。それだけなのに、確かに学校が星子さんにある働きかけをしていることを認める。それを最首さんは、「場の力」と呼んでいらっしやいました。「学校というものの持つ『場の力』」って何だろう？ ということです。

もう一つは、最首さんが「理性主義でも物質主義でもなく、精神主義でもない道を、仮に『人間的自然主義』』という言葉に依拠して、切り開いていきたいと思えます」と書いていらっしやる、その「人間的自然主義」について詳しくお話をうかがいたいと思っています。この二つに、人間・教育・学校をベースシクなどところから考える手がかりがあると思っ

ているからです。

## 私と学校・教育

最首 私は病弱だったために、今から思うとかなり滑稽なところもあるのですが、小学校を出るのに九年かかったんです。三年遅れますと、まあ友達もそんなにできません。中学・高校とそれを引きずっていくことになりました。小学校の時、体験できなかった運動会とか修学旅行というものは、非常にキラキラと輝いているんですが、そのほかに学校という独自の場、磁気というものについては、自分の体験としてはない。学校という場で、先生が教えるということ抜きにしてたら、果たしてオレは育たなかったのかといえ、そんなことはなかった。

世代的にも、昭和二十年に私は国民学校三年生ですけれど、二十年の春から夏、そして八月十五日を過ぎてから翌二十一年も、授業らしい授業は全くないわけです。

——そうでしたね。

最首 私は福島県の喜多方にいましたけれど、よく覚えているのは、山の中に入って、実にきれいな緑がウワツと出てくる中で、ふきを探ったりしていたということばかりですね。教師はこの間、教え込むという意味での教育に値する教育はしていないと思うんです。

少し上の世代になると「英語力が全くない」ということになる。私は、その上に病気で学校に行つた日数が少ないというところもありますが、私たちの世代がダメかといえば、そんなことはないと思うんですね。

学校の持つ決定的な意義って何だろう？ ということは、星子が生まれる前から持っていた疑問でした。つれあいのほうは、瀬戸内の小さな島で、小・中学校と全く同じクラスメートが持ち上がっていく、そういう教育を受けて、ほとんど休まずに学校に通う。そして学校というものは行くもんだというのを当たり前に行っているんです。もつともちよつと追及すると、家にいると働かされるといふ答が出てきますが。

星子の上の三人の子供も、不思議なことに学校にだけは行くんです。星子のことがありますから、フツツの家…フツツの家というのは、最早ちよつとおかしいのだけれど…のように、御飯を作ってやるとか、送り出してやるとかはできない。

けれども子供たちは、一人でなんとかして、とにかく学校に行くんです。私が「不思議だ、不思議だ」と言うと、つれあいのほうは「不思議がるのがおかしいのであって、学校というものは、行くもんだ」と言う。(笑い)

私には、学校に休まずに行くことを不思議がる気持ちがあるということ、それと国民学校三年間の思い出は、狭義の教

育に関するかぎり、魅力がなかった。それはその後もそうだといいこと、があります。あの当時の「臣民教育」「小国民教育」、そういう教育を徹底的にやらなきゃ、国を愛する心を育てられない、っていうのなら、そんな国はダメなんですね。

——その通りですね。

**最首** 私の父親は準戦死のように死んで、残された子供六人と母親ががんばる…これは凄じい戦後だったわけで、その意味でも「日の丸」「君が代」には恨みがあるわけですが。そんな学校の気が残存しているんなら、学校はいやだなあといい気持ちがあるんですね。公教育という営為にポジティブになれない。実際には、公教育がナシヨナリズムをうえつける反面、子供の保護とか、権利の拡大の役割もはたした。その意見はよくわかるんだけど、その通りだとはなかなか思えなかつたんです。

このことで「障害児を普通学校へ・全国連絡会」の世話人会で対立したことがあります。「普通学校へ」という時は、よき公教育をうけなきゃ子供はきちんと育たない、と考えているわけです。「いや、僕はそんな気持ちになれない」と言うのと、「あんたはおかしい」と言われる。オレはひとりぼっちでやってきたからそう思うのかなあ…って考えていたんです。



## 星子と学校

**最首** ところが、星子は学校に行きたがるんです。これには、びっくりしましたね。学校に行くと、付添い介助の方がついて、初めは歩くだけででしたね。音楽の時間も体操の時間も、基本的にはマンツーマンです。

クラスの人数が四、五人なんですが、友達が実によく星子の世話をしてくれるんです。先生は自分のこともできないのに、人の世話をするなって叱るんですが、皆が競って世話しようとする。特にさつちゃんという気性の激しいダウン症の子が、先生の代行みたいにして、「ちゃんと座っていなければいけない」なんてことを教えるんです。

驚くべきことは、星子は帽子も手袋も靴下もダメなんです。が、学校では赤白帽をちゃんとかぶっているんです。これには驚いて、学校というところは、イヤイヤながら必要悪みたいにみなしているんだが、親にはできないことが、先生がなにかするとできちゃうのかって思いましたね。星子が机に向かつて座っていることがあるっていうのも驚異でした。その当時は、しつこくっていうものは、他人がしたほうが身につくってことかな、と思ったりもしたのですが……。

去年から給食を食べ始めましたね。母親が食べさせなければならぬので、学校側はあまりいい顔しなかったのです。

が、他の子のこともありますし……。ところが、星子は実によく食べるようになったのです。もっとも、物を噛むということをしないので、全部丸のみですが……。

## 子供たちと親和力

**最首** これはどういうことなのだろう、と考えてしまいました。星子は両目の水晶体を取る手術をして、結果がよくなかったために、目が見えません。片方の目は、光はちよつと見えるんじゃないかと思うんですが、像は結びません。だから給食の時の、ざわざわがやがやどころではない大騒ぎの様子や、食器のふれあう賑やかな音を、耳で聞いているだけで、給食の光景を見ているのではありません。しかし、家で母親が食べさせているのとは全く違うふんいきのなかで、食事のレパートリーが急速に増え、星子が一番食べるようになってしまったんです。

さつちゃんは御飯しか食べないとか、しいたげがあると食べない子とか、大騒ぎをしながら食べているふんいきを、星子は感じて、そういうなかで星子が食べるようになったとしかいいようがないんです。

赤白帽の場合は、まだ先生がいろいろ教えたと言える。机に向かつて座っているということも、先生を通じての教育の力というものはあるかもしれない。しかし、給食の場合は、

先生はかかわっていないのです。これは、子供たち相互の関係—アフィニティ、親和力というものではないかと思っただです。

学校で先生の力は無視できないにしても、ほとんどは、子供たちがいての、複数の子供たちが相互に関係しあつての学校だろうという気がするのです。それがあつての初等・中等教育だろうと思うのです。星子がそれを分らせてくれたという気がしています。

—それなのに、子供たちの親和力が壊されてしまつていたら、学校は悲惨ですね。

**最首** 学校に子供たちがいて、相互に関係しあつて、そういう力が学校を作っていることを、教師はどれだけ実感しているのか、非常に過少評価されているのではないか、と思うのですね。

### 戦後教育のまちがい

**最首** 私は昭和十八年に国民学校に入り、戦後、小学校五年の時に三年休んでしまい、小学校を卒業するのが昭和二十七年です。だから小国民教育の時代、文部省の力がなくなつて、先生がどうしたらいいか分からなくなつてしまつた時代、文部省が力をとりもどしていく時代という三つを体験しました。

戦後の教育を顧みる時「自分の頭で考えよ」と言いながら考えさせない。集団に従属させておいて、口先だけで自由を言うダブルバインド（相反二重拘束）が浮き上がってくると思います。このことへの反発が、自由への希求といひながらその実、勝手主義でしかなかった。物事をきちんと見詰めることによつて、残すべきことは残し、変えるべきことは変える。このとき、日本の歴史・風土は無視できないし、〈神〉と人と自然との関係について、より深い省察が行われるだろうと思うのです。

—なぜ勝手主義になつてしまつたのでしょうか。

**最首** 私ごとですが、八代將軍徳川吉宗の末期に、最首左衛門という人がいて、強訴の首謀者として、打ち首になつていく。その人の小さな隠し神社がある。日本人には、そういう人を〈神〉にまつる心情があり、これをムゲに否定することはできないと思うんですね。

西欧近代のスタートを考えると、例えばデカルトによれば絶対神がいて、人間は神の作った秩序を明らかにしていく使命を与えられている。人間が努力をして、一步一步世界の秩序を明晰にしていくように運命づけられている。その先端を行く人々は、より神の意を体したエリートです。新しいことを求めずに日を送るのが大衆で、下に位置付けられる。この西欧的な考え方と、庶民も〈神〉にまつられ得る日本人の心



情とは違います。

西欧的な「個人」がこの世に姿を現したのは、神とも自然とも截然と切れた存在としてであったことを把握すべきです。私たちは「神」とも自然とも境界がはつきりしていません。私たちが「個人」になかなかない。それを忘れて、日本人のまま「個人」をふりまわすのは「勝手主義」といいたいのです。

## be born

**最首** 星子をみると「個人」でないことははっきりしているようです。それは星子の責任ではありません。ダウン症児や脳性まひ児について、生理的に親に責任があると言ってもムリです。子供は全くの受身で生まれてくる。be bornです。そして能動は一切ないところに、無限の自由があるのではないでしょうか。

ところが、生まれた次の瞬間、国籍・人種・親の地位、性・姓名まで決まってしまう。不条理としかいいようがなく故なく付加される責任でもある。ワイゼッカーは「今の青年であっても、ナチズムに責任がある。ドイツ国民である限り」と言っています。引受けなければならない責任があることも、そして何よりも自分が存在してしまうことも、不条理です。

しかし、何もしない限りにおいて、自由は無量大です。ところが、一瞬一瞬生きなければならぬ時、人間は選択しなければいけない。赤ん坊の乳首を捜す行為にしても選択ですね。意識的・無意識的に選択を重ねるということは、その自由度自由を減じていく。そこにこそ人間一人としての責任が発生する。この責任の累積が、人間が人間としてあることの証である内発的義務に転化するのです。

## 内発的義務

**最首** 子供たちにとつての内発的義務とは「関係しあおう」とする他者に向かおうとする力だと思えます。こういう考え方をすると「権利」は、明確になってくると思う。内発的義務が他者に向かう、つまり他者を必要とするとき、その他者に権利が発生してきます。本来的に、天から与えられた権利など私たちにはないのです。そのことが、知恵おくれと言われる子供たちを見ると、よくわかるような気がする。それにこの子供たちは、自分に当然の権利があるなど叫びません。

.....

(この春、東大を卒業する北野隆一君が、今できたばかりの著書『プレイバック東大紛争』を最首さんに進呈してきた。北野君も加わって、話題は東大紛争に及ぶ)

最首 日本の大学紛争は「個人」が分からずに、有象無象うごめて動いたといえる。アメリカがヒッピーを生み、フランスが「無」への傾斜を強めたのは、個を解体したかったから。ところが日本には解体すべき「個」がない。つくり上げるべき「個」しかなかったのです。

### 個人の権利ということ

——そのような不安定さのまま、物の豊かさ、くらしの便利さに身をまかせ、私たちはどこへ行くこうとしているのでしょうか？

最首 今肥大している現世主義の反動はくるでしょうが、現世主義の肥大の中で、差別は甚だしくなるでしょう。清潔感のある日本主義というのかな、誤解されそうだけど、そういうものが欲しいですね。今までの他発的義務は、宇宙的秩序から発せられたものであっても、ほとんど押付けられたものでしたが、その秩序が、自分の内側から出てくる。そして生きる必要というところから発生してくる義務と連動するような転換が必要です。

選択したいのに許されない状況とか、押しつけられた義務とかを、私たちは不満としているのですが、そこでは、自分の生きる場を積極的にどう作っていくかが、忘れられてしま

うのです。権利とは、もともとは人間が生きる場を作りあげようとし、その中で発生してきたのだという順序を間違えたくないのです。権利は、自分が他者とかかわろうとする、その反映として、他者から認められるものであるのに、それを個人が所有するものにすりかえられてきたところに、戦後の迷妄があります。

有権者が持つ一票は、所有物と思うから、売買の対象になります。同様に「個人の権利」ととらえた時、権利は自分の勝手になり得るのです。「権利の上にあぐらをかくな」という言い方も間違っています。権利は、私たちが人とともに生きようとする社会全般の中で成立っているものです。

私は今、最も考えを深めるチャンスを持っている十八歳ぐらいの予備校生を相手に、星子とつきあってやっと思えてきた自由・責任・権利・義務の結び付け方を話しています。私は三十歳を越して大学闘争を闘ったけれど、民主主義の問題はやっぱり解けなかった。私たちのムラ性についてイヤというほど気付きました。集団の中に自分を規定している自分をそのままにして、民主主義はあり得ない。

——大学紛争の頃の最首さんを、自分の青春に重ねて、固定した一ページをなつかしんでいる人も多いと思います。その最首さんは、当時を今そのように省察されるのです。

## 人間自然主義

最首 そうですね。その後の星子とのつきあいが決定的だったと思う。星子は何も主張しません。だからといって、親が星子の権利を代行するなんて失礼なことではできません。星子は花のような子です。水をやり忘れたら、萎れてしまうような子とっての「基本的人権」とは何か？ フランクルの「責任性存在」にひきつけられたのは、大学闘争の末期の頃でしたか？。

今ここにあることの徹底的受動性、そこからしかスタートできない。受動性という自然性の中で、内発的義務を育てる、そのことを私は、人間的な自然主義といたい。

——権利を主張することについては、沢山の言葉が溢れているのですが、「なぜか知らないけれど、そんなことはできない」という内なる声に耳を澄ます、その内なる秩序はどうしたら生れるのでしょうか？

最首 繰返すようですが、人間は社会的な関係を結んで生きる存在であって、大人であろうと子供であろうと、意識的・無意識的に、他者と関係を結ぼうとする力を持っています。支配欲や所有欲、あるいはミザントロープ（人間ざらい）は、その力の逸脱や変形した姿です。まずそのことを自覚し、そのような教育が行われねばなりません。その教育は、できる

だけ子供が自然の振舞いができるように、大人が自己抑制すること、及び逸脱や変形した力を持たない子供たち（知恵おくれの子たちなど）を大切にし、その子たちから学ぶことを根幹とします。

私は、そういう意識形態である内発的義務が、人間の豊かな社会をつくる根本だと思っています。それが、支配や所有のあり方を自ずから規定すると思います。私は「何のため」を問うクリアカットの世界が、少しずつ輪郭を崩していくだろうという予感がありますが、すると積極的に言うべき人生の目標は出てきません。

「人と人は、なかよくやっついていこうね」という言葉の上位に「何のために」はないのです。人間的な自然主義には〈神〉〈秩序・自然〉がはらまれています。それを消してしまうところに現世主義・科学主義がはびこります。切ることのできないものを切ろうとすることによって陥ったところ、から抜け出す。今まで影だったものを日向に出す、日の当たっていたものを影にする。そういう転換を図る時期に来ていると思うんです。

教育の転換は、その要かなめです。

——教育の論議は、この深みから出発しなければならぬのに、何と現世主義に毒されていることでしょうか。含蓄豊かなお話をありがとうございます。

特集

'90年代

学校を変えよう

# 父母の教育権と学校参加

— 九十年代の課題 —

今橋盛勝



一、「伝習館訴訟」最高裁判決への戸惑い

「伝習館訴訟」最高裁判決（一月十八日）は、新聞・テレビでも大きく取り上げられ、報道された。事案は、福岡県立高校の三人の教師が、社会科の授業で、教科書を使わず授業をしたこと、授業の内容が特定の政治的立場からの「偏向教育」であり、試験問題も適切でなかったこと、成績評価も全員3の一律評価であったことを主たる理由として、懲戒免職にした県教委の処分を取り消しを三教諭から求めた裁判である。一、二審では、一人の教師の懲戒免職だけを適法とし、他の二人の免職処分はいきすぎであり違法とする判決であった。ところが、最高裁判決は、三教師の免職処分をすべて適法とし、その理由として、学習指導要領には法的拘束力があ

り、教師には教科書を使用する義務があることから、三教師の行為は逸脱が著しく違法であるとした。

「国家の教育権」が、この判決によって一層強まったと一般的には言われている。この判決について、教育学・教育

法・憲法学界をはじめ、「国民の教育権」「教師の教育権」の立場に立つ市民・父母から批判がなされるのは当然であろう。しかし、他方で、免職処分の理由とされた事実、つまり、高校の社会科の授業において、教科書が使われず、特定の政治的立場に立った教育内容の授業がなされ、例えば、日本史と地理の試験問題に「社会主義社会における階級闘争」「スターリン思想、毛沢東思想とその批判」が出題され、一律に3の評価を受けるといふ教育、授業、評価のあり方を、国民父母・生徒はどのように受けとめたのであろうか。

三教諭の授業・評価について、当時の伝習館高校の生徒・父母はどう考えていたのか、教師・学校・教委に対してどのような働きかけをしたのであろうか。懲戒免職という厳しい

処分が、県教委・保守政党だけの判断と力でなされたとは考えられない。「そういう授業はおかしい」、「特定の政治的内容を教えることは、公教育として間違っているのではないか」

「広く系統的な内容を学べる授業」、「大学入試にも困らない授業を」という生徒・父母、一般市民の要求、意識を背景にしてなされたのではなからうか。判決要旨では、「生徒の父兄に強い不安と不満を抱かせ、ひいては地域社会に衝撃を与えるようなものであったことは否定できない」とされている。三教諭の問題は、生徒たちや父母から出されたと考えられる要求をどう理解し、どう対処したかである。「学力テスト」最高裁判決に比べて、雑な論理で、しかも簡単に学習指導要領の法的拘束力と教科書の使用義務を認め、免職処分を適法としたのは、この事実の特殊性によるのではなからうか。

## 二、「教師の教育権」と「生徒の学習権」「父母の教育権」

「国民の教育権」論、「教師の教育権・教育の自由」論に対して、多くの父母・国民が抱いている批判と危惧は、まさに教師のこうした教育実践のあり方に対してである。右派だけでなく中間派の憲法学者の中にも同じような懸念がある。「教師が依然生徒に対して相当な影響力、支配力を有しており、生徒の側には、いまだ教師の教育内容を批判する十分な能力は備わっておらず、教師を選択する余地も大きくない」(判決要旨) から、国が法律で教育の内容・方法について適

守すべき基準を定め、教師の教育活動を規制する必要があるという「国家の教育権」論を支持する父母・国民は決して少なくないであろう。

こうした批判に対して、「国民の教育権」論、「教師の教育権」論は、生徒・父母、他の教師の批判等によつて是正できるものであり、法的規制、教育行政の統制になじまないものであり、その必要もなく、指導・助言で足りるとしてきた。しかし、はたして、そうであろうかという疑問、それだけでは正されるのであろうかという不安と危惧の念が、多くの生徒と父母・市民にはある。なぜなら、そうした事例は身近なところで少なくないからであり、また、生徒・父母が疑問に思い、困つても、それを教師・学校に言うことは容易ではなく、言つても改善されないだろうと考えているからである。

伝習館高校事件において、「教師の教育権」が生徒・父母の批判と要求を拒絶するために、使われることはなかったであろうか。それらから自由に教育する権利として理解されいなかっただであろうか。「教師の教育権」が教師に認められるとすれば、それは、国家・教育行政との関係においてであり、父母・国民の信託に応え、「生徒の人権・学習権」を保障するために認められた職務権限・責務としてであり、生徒・父母の批判を拒否したり、無視したりすることを正当化するものではない。

「教師の教育権」に関するこのような半分誤った理解・意識・対応は、「民主的」教師・教組・教育運動の中にも少なからず存在する。さらに、全く誤った理解なのであるが、それが、国家・教育行政に対してではなく、生徒・父母に対してだけ主張されるという意識・対応はひろく見られるところである。これら二つに共通することは、「教職の専門性」論と父母に対する優位意識である。後者は、戦前の天皇制教育と通ずる「国家―学校・教師による教育」という意識であり、姿勢である。戦前と異なっているのは、そうした意識と姿勢が、「受験制度―内申書・成績評価―テスト」体制の中に組み込まれ、強まっていることであらう。

### 三、「学校をひらくために」―《父母の教育権》日本の実状・

#### 欧米の実状

「伝習館高校事件」最高裁判決を見て―同じことは「教科書裁判」にもいえるが―、また、学校の現状を見て、痛感することは、子ども・生徒の人権・権利（学習権を含む）のために、父母に何ができるのか、父母にはいかなる権利があるのかということが、戦後においても、ほとんど明らかにされずに、現在に至っていることである。

体罰・いじめ・校則・部活の問題でも、内申書の問題でも、授業のあり方でも、父母として疑問に思い、悩み、なんとかしてほしいと思うことは少なくない。説明をもっと聞き

たい、質問したいと思うことも少なくない。そういう時、日本の父母は、率直に質問・要望し、改善を要求することができるであろうか。教師・学校は、それを当然のこととして、誠実に答えてきたであろうか。父母の要望を聞くことを大切にし、父母の理解と合意を得ることを教育的責務ととらえてきたであろうか。また、わが子と子どもたちの教育と人権・権利が保障されるには、父母が適切に主張し行動することが不可欠であり、安易な学校、教師依存は、父母として無責任な態度であり、許されないことだという認識と意識が日本の父母にあったであろうか。

国・文部省の教育政策に批判的である父母、革新的な主張をしたり運動をしている父母であっても、こと、わが子の学校教育問題・教師との関係においては、他の多くの父母と同じく、〈学校・教師の優位・支配―父母の依存・隷属〉という関係を持ち続けてきたのではなからうか。むしろ、教育政策の問題が分かり、教師に対する管理、その下での教師の苦悩と努力が分かるだけに、学校・教師に問題があっても、それを批判せず、批判すべきではない、連携すべきだと考えてきたのではなからうか。安易な〈学校・教師への依存・服従―協力〉、それが日本のあるべき父母の原型とされてきたと聞いていい。それは、明治憲法・教育勅語―戦前の天皇制教育から、現憲法・教育基本法―戦後教育への転換にもかかわらず

変わることなく続いた日本的教育意識であり、態度である。

しかし、この父母・教師の体質的ともいえる教育意識・思想は、70年代末から80年代の「非行・校内暴力・体罰・校則による管理―いじめ・登校拒否・中退問題」という学校問題によって、揺すぶられ、問い直されてきた。「依存・服従・協力」というのでは、解決できないわが子の問題・学校問題にぶつかり、子どもの人権、父母の地位と権利を考えようとする父母が生まれ、確実に増えてきた。その背景には、戦後教育の体験を持った父母、高学歴化した父母、都市化の進行、教育への関心と教育情報の増大がある。「父母は、学校教育に対して、どういう位置にあり、権利を持つべきか」、これは90年代の大きなテーマであり、課題である。とりあえず、「父母の教育権とPTA」研究会が、まとめた『学校をひらくために―《父母の教育権》日本の実状・欧米の実状》の一読をすすめたい。欧米の父母が学校に対して保障されている権利、学校参加の状況を知るところから始めなければならない。「父母の教育権と学校参加」について「鎖国的状況」のまま、学校を変える視点を見いだすことはできないだろう。

こうした主張は、「教師の教育の自由・教育権」を否定し、軽視するものではない。民主教育、子ども・生徒の人権・権利が、その柱一本だけでは担えないということは明らかにしているし、そもそもそれだけで担わざるをえなかつた戦後

のある時期までの教育のあり方が特殊であったと理解すべきであろう。

私が、『教育法と法社会学』（三省堂）で、「子ども・生徒の人権・学習権」を提示、それを基軸として、「父母の教育の自由と教育権」を展開し、ついで「住民の教育権」を解明し、最後に、『国民の教育権』論の再構成」を提起したのは右のことを明らかにするためであった。今日の教育状況と理論的課題は、八十年代の中ごろからの「子どもの人権」論と取組みをへて、「父母の教育の自由と教育権」の明確化と「国民の教育権」「教師の教育権」論の再構成」に移っていかなければならないとなっている。専門書としてはめずらしく、この一月に五刷りになったのは、研究者だけでなく、問題にぶつかり、真剣に考えよとしてきた父母・市民、弁護士、教師に読まれてきたからであろう。

昨年暮れに国連で採択された「子どもの権利条約」の批准運動にしても、「父母の教育権と学校参加」論の深まり、広がりや制度化のための運動と結びつかなければ、形式に終わる危険性がある。しかも、「父母の教育権と学校参加」論は理論だけではなく、それを担う全国組織を必要としているのではなからうか。なぜ、父母だけは戦後四十余年「組合」を持たなかつたのか、費用を負担しなかったのか。

（『父母の教育権とPTA』研究会代表・茨城大学）



「人間ってすごいね、

先生」



久津見宣子

ちでそだてたことだ  
 ……とりいれのこと  
 を頭に入れて たね  
 をまいていろいろと  
 めんどうをみる……  
 そだてたものをとっ  
 てたべられたときは  
 きつと すぐくう  
 れしかつただろうな  
 (隆くん)

「人間ってすごい！ね、せんせ」と目を輝かせて言ったのは『人間の歴史』（白井春男著）を学んだ子どもたちです。私は、このテキストで十余年、五、六年生といっしょに歴史の授業をしてきました。授業の内容、子どもたちの様子の詳細は、最近まとめました拙著『人間ってすごいね先生』（授業を創る社）をご覧くださいただけなら幸いですが、ここでは子どもも私も楽しんで学んだ教材「人間の歴史」と子どものすばらしさの一端をご紹介します。

〈人間ってすごい〉

・農業が採集とちがうところは 自然に生えているものをそのままとったりひろうのではなくて ちゃんと自分た

・はたおり機って大発明……一本おきに（縦糸が）パツとあがるそうこうがすごい。五千年も前にもう発明されてたんでびっくりした。いっとうはじめは どうやって考えたんだろう。教えてもらいたい  
 子どもたちは、農業やはた織りを生みだした昔の人々に感嘆しながら対話をしているようでした。「すごい」という表現は、人間のすばらしさへの驚きと感動なのでしょう。こういうとき、私も「ほんとにそうだね」と想いを共にしていました。

〈子どもってすごい〉

この歴史の授業で、もうひとつ私が「すごい」と目をみは

ったのは、子どもたち自身についてです。

・ 神の力をつかって人をそむけないようにするのは、うまいやり方だと思いました。国家とは、今までの共同体とちがって、血のつながりのない地いきごとのまとまりになって、生産者はほとんどれいと同じようなあつかいをされました。そむけなくするために、軍隊、けいさつ

税の役人をつくり余じようをとりたてました。こんな昔に、今にててびっくりしました（良平くん・古代）

・ 余じようってさ、ムギとかコメだったでしょ、だけど倉庫いっぱいもためられるようになったら、それはね物なんだけども、それだけのムギをつくった分だけ人が働いたのを集めてためとくことになる（賢也くん・古代）

・ ……大量生産は資本主義がすませたし、そのもとはじよう気なんかの産業かくめいだった。ぼくは、戦争が産業かくめいのところまでいくのおどろいた。……資本主義はつたつして、すぐくべんりて技じゅつもすすんだのに、それが戦争のもになったと思つた

（勝久くん・現代）

・ 日本軍が、中国などの人を大量ぎやく殺をしたなんて、歴史をやるまで知らなかった……市民の人がひどい殺され方するから、そのとき私がいたら殺される方だ……中国の人はどんな気もちだっただろう。日本に怒りがあ

ると思つた。中国の人につらい思いをおしつけて、日本

は現代まできたのだと思つた（宏子さん・現代）

・ 余じようは多くなるんだから、何に、どういうものに使うかなんだなあと思う……（作っている）みんなが、なつとくいく使われ方ではなくてはだめなんだ。国の中だけじゃもうかいけつしないだろうなと思う。だって、いろいろに世界のことがつながっているから……ほかの国のことも知りたい。いききたいなあ。いろいろな国の人に、あいたいなあ。わかりたいことがいっぱいできた

（けい子さん・現代）

小学生が、ここまで考えていることに驚かれるかもしれませんが、この子どもたちは、ふつうの公立小学校の五・六年生です。実は、私自身、この歴史の授業をはじめたとき、こんなに子どもたちが考えてくれるのかとびっくりしたのです。そのうえ、子どもたちは、「おもしろい！」「この歴史、ずうつとやろうよ」というのです。学校の勉強を子どもがおもしろいというのも、当時の私には意外なことでした。勉強は、つまらなくても、しかたがないからやるもの、と思つていましたから。

でも、思いあたることはありません。それは、私が初めて白井春男さんの「人間の歴史」に出会ったときの、「こういう歴史があつたのか」という衝撃と、「そうなのか」と胸に

おちてわかるうれしさです。私は、子どもたちがむちゅうになり、もっている力を存分に発揮して、授業をさらに発展させてくれるのは、この教材にある、と確信するようになりました。子どもの心をゆさぶり、その力をひき出す「人間の歴史」とは、どんな教材なのでしょう。

### 〈人間の歴史〉

「人間の歴史」は、白井春男さんが、一九六〇年代につくられた歴史の自主教材です。

人間が生きていくために必要なものを、どのようにして手に入れるかという経済の観点を基盤にすえ、社会を大変革させた三つの段階として、狩りと採集、農業と牧畜、大量生産に分けて考えていくのが大きな特徴です。この、生産と労働を中心にして、人間の社会がどのように発展し、文化をつくりだしてきたかを学ぶテキストは、次のように地球の歴史から現代社会までの内容で構成されています。

- ・ 地球の歴史
- ・ 狩りと採集の時代
- ・ 農業と牧畜の時代
- ・ 国家の誕生
- ・ 古代国家の発展
- ・ 中世封建社会
- ・ 近代社会
- ・ 現代社会

「人間の歴史」と出会って、私がアツと思ったのは、巨視的に歴史をとらえる、ということでした。細かい事象の暗記は不要、むしろ役に立たないというのは、歴史学習について

もっていた私のイメージをくつがえすものでした。

私自身の体験では、歴史は常に暗記モノでした。小学校では、ジンム、スイゼイ、アンネイ……ご存じですか？ 歴代の天皇名です。これを徹底的に覚えさせられました。敗戦後歴史教育は大きく変わったとはいえ、何年に何がどうした、という事象や年代を暗記するというのでは同じでした。そして、どういうわけか、現代まで学ぶことはなく、いつも明治維新にふれたあたりで終わっていました。ですから、人間の歴史の「今、生きている社会をとらえる」という目的にも感激したものです。

また、余剰や市場について学ぶと、それをモノサシにして社会を考えていけるといったのしさもあります。たとえば、余剰の増加が、階級を生み、国家誕生のモトになることを学習すると、その余剰をほとんど収奪される奴隷制社会を想像できますし、その後の時代も、余剰生産のない手は誰か、生み出した余剰は誰のものか、何に使われるか、と現代までとおしてみることが出来ます。すると、それまでみえなかったことがみえてくる、というおもしろさがありました。どの時代も、今の自分とかかわりがあることに、驚きや発見があつて、もっと知りたくなってきました。

「人間の歴史」には「私たちと同じような、無数の名もない人々が毎日働いてつくりだしている社会の歴史」という観

点もあります。いつの時代にも社会にとって重要なのは、生産のいない手である大多数のふつうの人々で、その人たちの仕事は埋もれて見えにくくなりがちなので、授業では人々がどのように生活していたのか、衣・食・住についてはできるだけ具体的なイメージが描けるよう、はた織り、米つくりなど、ものつくりの実習をおこないました。

### 〈子どもの側にたつ〉

私たちには、いま出会っている目の前の子どもたちに、授業で責任をもつことが問われていると思います。そこを避けずに実践をすすめていくとき、教科書を教えるだけで、その責任を果たせるものだろうかと私は疑問をもっています。

国際的な視野にたつて、世界の人びとと共に生きることが強く求められている時代に、教科書を指導書どおりに教えて丸暗記させる歴史では、さきに引用した子どもたちのような感想をもつてくれるには至らないでしょう。ものを考える人間を育てることはできないと思うのです。

激動の世界の中で、現実のできごとと対応して社会を考え、生きていく力のモトを育てる教材内容を選ぶことが、とりたてて必要なのではないでしょうか。そういう教材を用意して、子どもの側にたつ授業を、共同研究で日常的につくり出すのが、私たちの仕事だと思えます。それは、憲法と教育

基本法の精神にもとづくものであり、この立場にたった広範な教育運動をこれからもすすめていきたいと考えています。

最後に、社会人となった卒業生、芳山史枝さんから『人間つてすごいね先生』に寄せられたメッセージの一部をご紹介します。

……就職のときも、結婚のときも、鉄鋼関係などの、戦争が始まればもうかるという体質をもった会社に関係するのはいやだと思いましたが、ニュースで知る政策とから、法案についても、つい、あ、あぶないんじゃないかしら、という目で見えてしまいます。その発想は、この人間の歴史の授業の中で培われてきたものだったと思い当たったわけです……今でも、本の最後の小学生のように「わかりたいことがいっぱい」だと思っています。

この原稿を書きあげる直前に、白井春男さんが急逝されました。白井さんは、戦後一貫して、教育運動を推進し、国民の手で教育内容をと、「人間の歴史」をつくりだされました。そして、科学にもとづく内容と子ども視点で授業を創ることを、最後の日まで追究されつづけました。その白井さんの志をうけつぎ、発展させていくことを、いまあらためてむねにきざんでおります。

(くつみ のぶこ・人間の歴史の授業を創る会)

特集

'90年代

学校を変えよう

## 思春期って

## ステキだね先生

尾木直樹



こんなふうに変に悟ったような一見「ものわりのよい」反応を示すお母さんもいます。

本当に思春期って不思議です。私たち教師や親を問わず、だれもが大人になる過程で必ず通過してきたにもか

一、わかりにくい(?) 思春期

とにかく不可解です。

「これが、あのかわいかった我が子かしら?」

親も面喰らいます。

「学級委員の田中がこのごろヘンなのよね。何となく反抗的で目つきもきついし、学級会の司会もなげやりなの——」

職員室では、先生たちも思春期に突入した子どもたちをもてあまし気味です。

「いや、うちの子は思春期・反抗期なんですから、嵐が通り過ぎるのをじっと待っているんです。そのうちおさまりますから——」

かわらず、だれも思春期の子どもたちへの心にヴィヴィドに反応しないのです。できないのです。

いや、むしろ、思春期を嫌い、あたかも「問題行動」とか、「くずれ」などと称する人が圧倒的です。民主的実践家と称される先生たちの中にも、思春期を「くずれ」としかとらえられない人がたくさんいます。残念なことです。

しかし、考えてみると、それほどにこの思春期の正体はつかみづらいのかも知れません。私たちが、思春期をとらえる際には、私たち大人は思春期理解がとてむずかしいんだ、そういう困難性が思春期の特性でもあるんだ、という点をしっかりと認識しておくことが大切だと思います。

## 二、人間って何なの？

### 生きるってどういうこと？

思春期の特性は、身体的性的変化の側面からとらえると小学の後半から中学三年間とみることが出来ます。しかし、中学教師ならだれでも体験することですが、子どもたちは、中学二年になると激変するのです。

ある意味で、どの子もがけだるそうで、ヤル気に欠けてきます。同時に反抗的で、心配な行動も増えてくるのです。

中二の十二月のこと、それまで「模範少女」だったA子さんの表情が暗くなり始めると同時に、こんな文章を書いてきました。まさに、思春期に突入した証でもあるかのように。

このごろひまです。なんにもなくてつまらないです。ただ朝起きて、学校行って授業受けて、友だちとおしゃべりして、給食食べて、なんとなく勉強して寝る……。

こーんなつままない生活ってないと思う。

なんか、あつとおどろくようなこと、起こらないかな……。

まあ平和といえぱ平和なんだけど、これじゃつままない。

私には刺激が必要なのっ!! なーんちゃって!

なんで学校なんか行くんだらう。なんで人間って生きて

るんだらう……なんてこと考えると、私っていつか死ぬんだ。年とって、今の私は消えちゃうんだあ、この世界から消えちゃうんだあってことまで考えて、しまいは、何も考えたくなくなっちゃうまで自分で追いつめて、こわくなくなってしまう。

こういうこと、たまに考えます。私って、すごく心のせまい弱虫なのかもしれない。でも、今の生活から抜け出してみたいくなる。やっぱり弱虫なのかな……。 (中略)

このごろひまです。がまんしているからかも……。でもほんと、こんなのいやです。なんか、ないかなあ……。

私って、変なヤツだと思えます。ほんと。あー、また寝る時間がきた。ふうー。

ここでのA子の叫びの正体は、「人間って何だ」「生きるってどういうこと」「何のために勉強するの」などという極めて大切な、人間が生きていく上での本質的な問いかけなのです。つまり、思春期とは、このようによりよい「生」を求めて真暗闇のトンネルをさまよう時期なのです。

## 三、「人間のすばらしさ」を

つかんだとき

東北の「わらび座」に修学旅行に行きました。そこでは、ジャージを着て、四時間以上もソーラン節の踊り実習に汗を流したのです。そこで、ほとんどの子どもたちは、「人間がわかった」「人間のすばらしさをつかんだ」「生きる意味が見えてきた」と喜びに満ちて語ったのです。信じられないようなことですが、思春期の子どもたちだからこそ、人間の生きざまを探し求めてさまよっていたのです。N子さんは、次のように記念文集に綴っています。

本当にわらび座に行けた事を心からよかったなと思っています。そして、ひまわり班の人達に出逢えてよかったです。

「好きな事を一生けん命にやり、一日一日を一生けん命に生きる」ということが、人をこんなにもきれいにさせているのかと思うと、感動でいっぱいになりました。わらび座の方々一人ひとりの生き生きとした顔は、本当に素敵で輝いていました。

これからもいろいろな場面に出逢うと思うけど、一生の中で、こんなに感動した場面は、これ以外ないと思います。声をからして、一生けん命ソーラン節を教えてくれた栗ちゃん。おかげで、発表会のトップバッターに選ばれても、みんな燃えて、どのクラスよりも、一番できがよかつ

たような感じがしました。

私自身も、やる前はすつごく緊張して不安も大きかったけど、「みんな同じ思いなんだ」と自分に言いきかせた時自信を持つことができて、精一杯踊れました。踊り終わった後の気分は最高によかった！（中略）

なんか、今までは毎日がつまんないとか思ってたけど、わらび座に行つてからは、どんな小さい事でも、面白くない事でも、もつともつと一日一日を大切に一生けん命に生きていきたいなど思うようになりました。

生きることの大切さ、喜びを教えてくれたわらび座の皆さんに本当に感謝しています。

#### 四、登校拒否を

##### 卒業直前に脱出して

思春期の自立へのもがきの中では、一時的に「つまづく」ことだって当然です。三年生になって、わずか四、五日間しか登校できなかつたA君が、卒業間際の二月から毎日登校、猛勉強を開始。そして、これまた信じられないことに、見事に都立の普通科に合格してしまつたのです。その彼は、卒業を十数日後にひかえた三月の上旬に、こんな作文を書いてくれました。



僕は、この中学時代に、自分の意志を持つことを学んだ。学校へ行かなくなった時も、自分の意志さえしっかりしていれば、どうにでもなったはずだ。

しかし、それを僕は、他人のせいにして逃げていた。早い話が甘えていたのである。しかし、今は少し違う。少しだけが、自分の意志を持てるようになった。それはまだ不完全なものだが、きっといつかは完全なものとし、自分の意志をしっかりさせようと思う。

そして、卒業後は他人に甘えることなく、自分に厳しくし、しっかりと自分の意志と行動力を持ちたい。

卒業間際になると、このA君ばかりではありません。

まるで、思春期の最後をくつきり美しくみがきをかけて彫り上げるような感じなのです。

私は、小学生のころから自分の中にとじこもりがちだった。今してみれば、なぜ自分から出て行こうとしなかったのか不思議だけれど、なかなか自分を他人に見せようとはしなかった。このごろになって、やっと少しずつみんなと話せるようになってきたけれど、友達とのつき合い方を中学校生活の中で少し学べたと思う。(中略)

とても悩んだけれど、いい経験になったのかもしれない

い。高校に入ってから悩むだらうけど、今度は、自分から心を開いていきたい。(後略)

いじめられがちだったC子さんの作文です。

自分で心が狭かったな——と思った子は、「心の広い人」を目ざしてはばたこうとします。つっぱっていた男の子も、失敗をくり返しながらも、その都度、教師や親や友人が心から生き方を迫る中で自己確立を少しずつとげているのです。

思春期って、「本当に」ステキです。

思春期真只中の子どもたちは、人間と大人の愛を求めてもだえ苦しみ、大声で叫んでいるのです。そんな子どもたちに私たち大人は、おろおろし、腹もたてます。

しかし、その何倍も苦しんでいるのは、他ならぬ思春期の子どもたち自身なのです。「思春期ってしんどいね、でも、ステキだよ」。こんなふうに語り、頼れる存在として、私は子どもたちの心の中にひそかに棲んでいたいと思うのです。

(おぎ なおき・練馬区立石神井中学校教諭)

特集

'90年代

学校を変えよう

悩み、迷える場を

学校は用意して

金森土岐



学校とは人間の集団である。様々な考えを持ち、それぞれの生き方を持った人間の集まる場所である。そして、それ互いに影響し合い、認め合いながら「自分」というものを確立していく場なのである。始まったばかりの自分の人生をどう織りなしていくかを決めていく大切な第一段階なのである。今日、日本では誰もが六歳から学校教育を受けている。そして最低限九年間学校へ通い、他人と触れ合っていくのだが、今は主に中・高校生活について書きたいと思う。私は、今年三月に高校を卒業する。私が三年間を過ごしたのは私立自由の森学園である。現在の学校教育が点数序列の重視で生徒の人間性を測る、という風潮になって何年か経つ

思っていた私には、公立での三年間はとても耐え難いものであった。なぜならその三年間、「私」という自己はどこにも存在していなかったからである。また、「他人」も存在していなかった。私を含めた誰もが、心に、顔に、一枚のペールを被せた虚像だった。教師の目につかぬように、周りと足並みが崩れぬように「自分」を押し殺して日々を送っていたのだ。与えられた課題をこなすこと、教師の言うことを丸のみし、試験の点数に結びつけること、それが「学ぶ」ことであり、「成長」することであると教師は教え、生徒は信じていた。しかし、私の心は常に「自分と他人の存在する場所」を求めていた。私は「金森土岐」として存在したかったし、他

が、私も中学時代の三年間は公立でこの教育を受けてきた。高校を選ぶ時、自由の森と決めたのには幾つかの理由があったのだが、その中で最も大きな理由は、本当の私を表現したいということだった。人とのつながりをとても大切にしたいと

人も虚像としてではなく、実像と出逢いたかったのである。

自由の森では、ボールを取り除いて、誰もが素顔で、しっかりと存在している。誰かが命令し、強制することなく、互いに呼び掛け合って行動している。点数に結びつく「記憶力」の勝負ではなく、いかにして取り組み考えたかを評価するのである。「ここでなら、いっぱい自分らしく在れる場所を見つけられるだろう」と希望をいっぱい抱えて入学した。

「自分が自分らしく在れる場所」というのは馴れ合いの場ではない。慰め合ったり傷の舐め合いをする場でもない。そこは本音を言い合える場である。自分とは違う考えを持った人間が存在していることを認め合える場である。それはいわゆる「気」を使うことによって疲れる「気」ではなく、相手の心境や状態を配慮するという「気」の使い方(気配り)が自然にできる関係が成立されていることを意味する。しかし、この場所を見つげ出すまで、幾度挫折し、涙を流したか知れない。自由の森には自分の人間性、その個性を表面化できる環境がある。自分を自由に表現できるのである。だからこそ、その中でその場所を見つげ出すのが困難になってくるのだ。

私はこの三年間、たくさんの人と出逢った。そして、たくさんの人と岐(わか)れてきた。学校内でも学校外でも、出逢い岐れた人はたくさんいる。「岐れる」というのは、この場合自然

に会わなくなる、自然に離れていくという意味だが、出逢って岐れて、また出逢って、その繰り返しの中で私は今、ようやく自分の落ち着く場所(人)と出逢えたのである。その場所を確立でき、その人達と知り合えたのは、機会と自分の要望がうまく一致したからであろう。しかし、私はその機会を逃さないために常に心と目を開いているように心掛けていた。その状態を *Opening Heart With Eyes* と呼んでいる。

もし自由の森でなかったら、人と出逢う機会を逃さずに過ごすことができただろうか。機会があっても、自分か相手のどちらか片方でも、素っ裸の心の上にボールが被ってはいは「その人自身」に出逢うことはできない。いくらこちらが心を開いても、相手にその気がなければどうしようもないのだ。その点、自由の森では生徒の心はむき出しである。もちろんそうでない人もいるだろうが、少なくともこちらが心を開いているのに、前より増してかたくなになるということはない。機会さえあれば、出逢うことができる。その機会を逃さぬことが大切なのだが、機会と互いの条件が全てそろっているというのは偶然に等しい出逢いなのかもしれない。

こうして今の人間関係を持たた時、それまでの人間関係とは比べものにならない解放感と安心感に満たされた。偶然の出逢いなのかもしれないが、着飾らない私の全てを自然に表現できる場所を、今ようやく見つけられたのである。

学ぶということは、机に向かつて教科書を聞くことだけではない。友人や教師との間でたくさんのことを吸収し、自分の内で消化し、視野を広げ、自分がこれからどう生きていくのが一番良いのかを探求することも、学ぶという中の大切な一つである。そう実感できるようにしたのも、こういう環境に在られたお陰かもしれない。何が自分に向いているのかを見つけていくこともその一つである。学校は、そういう過程にある者が、自分を解放し、自分の手と足と目で自分らしさを求めていくことができる環境でなければならぬはずだ。

しかし、現実はどうだろう。校則や規則でがんじがらめにされ、「退学」「処分」という切り札を持った教師があたかも権力を握っているかのように、学校から生徒の自由を奪おうとしている。制服という生徒の個性を封じ込めた服装は、その中において最たるものかもしれない。だが、学校という場所は、生徒のためにあるものはずである。教師が上に立つて一方的に押さえつけ、「勉強を教えてやる」という存在である以上、教師と生徒の關係に生まれるものは、嫌悪感と憎しみと軽蔑以外の何ものでもない。人間關係というものは本来そのようなものではない。常にフェアでなければならぬのだ。権力者と、それに従う人間という關係は「支配」という状態にあるわけだから、互いに考えを述べ合ったり、影響し合って共に成長していく關係には決してなれない。だが、

生徒側がそういう關係を「所詮こんなものなんだ」「仕方ないよ、こういう所なんだから」と諦めているのも事実だ。現在自分が持っている關係以上の、もっと深く、もっと豊かな關係を、求めも、見つけもせず、他人よりもまず自分のためという自己中心的な人間が山ほどいるというのが事実だ。迷い、悩み、傷つくことを恐れ、できるだけ平穩無事な毎日を送ろうとする。

しかし、英語の単語を覚えるだけでは本当の優しさを知ることにはできない。数学の公式を覚えるだけでは本当の強さを知なければ自分のものにはならないのである。表面は穩やかな毎日が送れたとしても、知っているのに知らない顔をするのが利口な者のすることであると悟ってしまった中・高生に、私は同情を禁じ得ない。一生、人とつき合っていかなければならぬのに、人の心の痛みも、涙を流す理由も何一つわからないまま過ごすことほど、淋しいことはないのではないだろうか。そういうことが何一つわからない状態や、自分のことしか考えられない人間を、私は「孤独」と呼んでいる。

現在、偏差値だけで生徒を見ている教師たちに聞いてみたい。「そこから何が見えますか。生徒の何がわかるのですか」と。得意教科と苦手教科の確認の他に、何があるというのだろうか。試験の結果だけで人間を測るということは、その人間

の可能性をのぼすどころか、逆につぶしていくことになる。人間誰でも得手不得手があるように、点数を取ることが苦手な生徒だっている。そんな生徒はどんどん追いつめられ、自信を失くしてしまふだろう。一度失われた自信を取りもどすことは簡単ではない。それに、点数だけで生徒の全てを測ろうとするのだからなおさらである。自分の得意なものや好きなことを点数で表現しない限り、他に表現の手段を許されていないのだから、「何故努力が報われないのだろう」と落ち込んだり、「所詮自分なんか」と投げやりになるのも無理はないのかもしれない。

だが、どうでもいい人生などあるはずがない。全ての人の人生が輝き、充実したものでなければならぬ。自分にしかできない生き方、自分だからこそできる仕事、自信の持てる人生を送るために学校へ通い、「自分らしさ」を探すのである。学校側は常に、生徒が自分の生き方について悩める環境を用意しておくなければならぬはずなのだが、現実在にそれができている学校は幾つかあるのだろうか。何故教師は「生徒を切り捨てる」こと以外の方法を学ぼうとしないのか。悩み、苦しみ傷ついている生徒の気持ちが変わらないのは、自分が実際に悩んだことも傷ついたこともない「優等生」であったからではないのか。「優等生」に劣等生の気持ちが変わるはずがない。ならば何故、その生徒と相対し、理解するため

の時間を持とうとしないのか。もし生徒を一個人として見る事ができたならば、「処分」というかたち以外にも様々な方法がとれるはずであり、ましてや殴る、蹴る、髪を切るなどという行為はできないはずである。極端な話をすれば、子供に人としての生き方を伝えるべき教師自身が、人との接し方をわかっていないがために、伝える術以前の問題として、教師から生徒に伝わってくるものが何もないのである。

他人はいつしか「存在」しなくなり、机やベッドと同じ「もの」となる。そして自己中心的なわがままで気紛れな人間となっていくのだろう。人間誰もが自己中心な生き物であるが、やはり自分と同じように他人も存在しており、自分とは別の生き方を持った人間であるということを認めなければならぬ。それは英単を覚えるより難しいことであるが、それ以上に大切で、必要なことであると考える。

人間として生まれてきたからには、人間としてやらなければならないことがある。学問追求もその一つであろう。だが、それだけではない。自分の生き方を通して、経験を通して人との接し方、愛し方を伝えていく場が学校であり、悩んでいる生徒が気が済むまで悩むことができ、迷える場所を学校は用意しなければならぬ。それが本来あるべき学校の姿だと断言しても過言ではないと私は考えている。こんな私の思いを、次号からの連載で書いてみたい。

# 高校に救いが あるとしたら

県立高等学校 K・K



て辞めてやるッ」

「ね、君、感情的にならないで。落ちついて話をしよう」

「帰らせて！ 話したくなんかない」

ポニーテイルに束ねた髪を振り乱して、カバンをしっかりと抱え込んで泣きじゃくる生徒。先生たちは持て余し気味に押し問答をしていた。傍にいた養護教員に聞くと、朝通常に登校した

## ☆A子の退学

秋雨が朝から降る肌寒い日のこと。職員室にいた私は、女子生徒の泣き叫ぶ声に反射的にイスから立ち上がった。叫び声は更に二、三度聞こえ、私は思わず声のする方に廊下を走った。昇降口の冷たい床の上には、取り乱した格好の女子生徒がうずくまり、その周りにぐるりと数人の先生が取り囲み、苦い顔をしていた。

「帰るって言っても、このまま帰すわけにはいかないから少し話をしよう」

「イヤッ。こんな学校辞めてやる。離して！ 帰るから」

「辞めるって言っても、理由を聞かなきやダメだし、手続きもあるし、すぐには無理よ」

「理由はイヤだからよ。生徒のこと罪人扱いにする学校なん

A子は、頭痛を訴えて保健室に来た。熱が38度あったので、担任に連絡し、早退するよう指示したという。A子がカバンを持って昇降口に来たところ、持っている紙バッグに私服が入っているのを、ある先生に見咎められ、昨夜無断外泊していたのではないかと言われて、この騒ぎになったという。A子はかつて万引きで補導された経歴があった。

「帰した方がよいでしょう。体調が悪いというので、養護の先生が許可しているのだから」。私は思わずそう言った。

「この子、熱が38度あるんです」。養護教員も控え目に言う。

「今日は帰って、体調がよくなってから今のことを話をした方がよいと思うよ」。私が更に言うと、周囲の先生は口々に反対した。

「勝手に帰れなどと言わないで下さい。この子は昨夜外泊し

ているようです。今帰すのはまずい」「この紙バッグには私服が入っているのよ。調べたら、帰るの一点張り。今帰したらまっすぐ家になんて帰らないし、何をするかわからないわ。」

家に帰るかどうかは、生徒を信じるしかないと私は言い、更に長いやりとりの末、A子は雨の中を帰って行った。私は勝手に帰らせたまじい先生ということになって……。

その日の昼すぎ、私はふらりとやって来た校長に、今朝のA子の一件を話してみた。

「A子は以前ひどい万引きをして、あれ以来改まるかと思えば、パーマはかけるし、ますますひどくなっている。だけどね。昔と違って今は95%以上の子が高校に来る世の中だ。勉強などに関心のない子も沢山来ている。これからは、そういう子を沢山かかえて学校はやっていかなければならない。A子のように学校になじめない子が増えるのは、無理ないよ」生徒指導のまずさに全く触れない校長の言葉に、反感を覚えたものの、95%説は事実なのだ。今の高校は大半が大学受験と就職を最終目標にして、規律と秩序を重んじているが、学校に来る目的が受験でも就職でもない生徒が増え、このようない元的な価値観ではやってゆけないところまできている。

このような状況の中、次のように言う教員もいる。

学校の示す知的なものへの興味を感じない生徒、一日学校において、その規律や秩序に耐えられない生徒、高卒資格だけ

が目標の生徒、そういう生徒が増加して行った時、学校の取るべき道は二つしかない。教育内容を著しくレベルダウンさせるか、退学させるか……。A子は、その後退学した。

#### ☆ S子の退学

一カ月程たったある夕方、私は家庭謹慎中のS子を訪ねた。ところがS子はその日の昼頃書き置きをして、ボーイフレンドのところに行ってしまった、と母親は当惑しながら告げた。通されたS子の部屋は、新築の家の二階。ピンクのじゅうたんを敷き詰めた洋間に、ベッドが三分の一を占め、造り付けダンス、机、高価なラジカセなどで埋まっていた。

S子は友人に紹介されたボーイフレンドと家出・外泊して家庭謹慎になっていた。母親はオロオロしながら、

「学校に呼ばれた時、S子は男のために家出した、男と関係を持ちたくて家出した、と言われました。それは十六歳の子供に使うような言葉ではないと思いました。S子はほんのちよつとした気持ちで外泊しただけです。でも、謹慎中に家出して、どうしたらいいでしょう」

S子の個室と母親の言葉に、子供に甘く、遠慮がちな親の態度を感じた。ともあれ私と母親は直ちにS子の彼の家に出かけた。

S子の彼はひよろりと長身の少年で、高校一年。しかし先日中退したのだという。S子はGジャン姿で悪びれる風もな



く、少年の母親の横に座っていた。その場でS子に、在学中は少年と交際しないことを約束させて、私たちは少年の家を出た。落ちこんでいる母親とは対照的に、S子はフワフワした足取りで夜の街を歩いていた。十六歳でオレの女、私のカレと男女関係を固定させ、ベツタリとつき合うのに耐えられない私だが、S子はそれに浸っていた。

その後何回かS子を訪ねたが、S子は数カ月後に退学。

### ☆K子の妊娠

数カ月後、K子の両親が憔悴し切った顔で私の家に来た。K子は半年程前、バイト先で同年の少年と知り合い一緒に暮らそうと家出を繰り返して、その度に両親は血まなこになって捜した。その後両親の説得で少年とは絶交したはずだった。けれども陰で何度も会っており、昨日になってK子が妊娠していることがわかった。しかも既に六、七カ月と言う。

母親はあんな少年の子は絶対に産ませたくない、と言う。少年は父子家庭、長い間施設で育ち、中卒後三十四歳の父親と暮らし始めた。以前K子の父親は、少年の家にK子を連れもどしに行った。その時口論になって、少年はK子の父親を殴った。女の子には甘く、普段はおとなしいが、何かあると狂暴で手がつけられないと言う。

「こんなひどい子が世の中にいるのか、というような子です。その子どもなんて、ゾツとします」と母親は訴える。

一方K子と話してみると、肩に垂れた髪をいじりながら、少年を「好き」「一緒にいると楽しい」と繰り返す。母親の言葉を伝えても、少しも響かないK子を見て、「そんなに好きなら、結婚して産む方が幸せじゃないか」と思ったが、K子もそれはまんざらでもない様子だった。

両親は猛反対、親として少年のことを考えるとハラワタが煮えくり返ると言う。いい子だったK子がどうして、と嘆く。

結局K子は中絶した。いや実際には「出産」した。お腹は小さくても胎児は育っており、二昼夜苦しんだ。両親は「生きた心地もなく」その子を埋葬、供養した。

一週間後に学校に出て来たK子は、少年を「好き」と言っていたあの表情がふっ切れていた。大きな代償を払って得たものがあつたのかも知れない。

### ☆生徒に何をしてあげられるのか

ここ数年、高校生で「学校が面白くない」と言う者が増えている。かと言って、彼女らが積極的に打ち込めるものを見つけようとするか、というところでない。

昨日も風邪と称して一週間位休んでいたY子に電話をかけてみると、実は学校を辞めたいと言う。仕事の終わった夜六時、私はY子の家を尋ねた。Y子は不在で、私と同年輩位の母親と冷え込む玄関先で話をした。「学校を辞めて、早く自立したい。十八歳になったらすぐに車の免許を取りたい」と

言うので、高校位出ておかなければ将来困る、といくら説得しても耳を貸さない、と母親。そして声を落としてこう言った。隣に中学に行かずにずっと家にいる幼な馴染みがいて、その子と親密にしている。どうもその子の影響を受けているらしい、と。Y子は写真部で、よくコンクールに入選する。顧問からも来年度は部長に、と期待されている。学校が嫌になる原因は「勉強」が余り好きではないことその他は全く思い当たらない。私はひどく疲れて自宅にもどった。

学校に長く勤めていると、無意識の内に「学校は善」と考えてしまう。そして「高校を出ておかないと将来損をする」という論理を振りかざしてしまふ。確かにそういう時代もあったが、フリーアルバイターが職業として成り立つ今日、高卒でなくても十分働いて生きてゆける。私はY子の選択に何と言ってやるのが一番よいのか、思い悩んだ。

現在の高校は、大学受験が就職を最終目的にしてカリキュラムが組まれている。高校での価値基準は、大学受験や就職に有利であるかどうか置かれている。もちろんこの価値基準でよいとする生徒も多い。しかし95%が高校に来る今日、このことに何の興味も関心も持たない生徒が増えていることも事実である。学校では、そのような生徒に対する対応策や切り札がほとんどないと言ってよい。

多くの生徒が学校が面白くない、目的が見出せないと言う

のも無理からぬことだと思ふ。そして心の不満がうっ積し、A子やS子やK子のような「問題行動」に出るのではないか。

それらの「問題行動」に対して、学校はなぜ生徒がそうしたかを聞き、その魂にかかわってゆくようなシステムを持たない。「生徒指導規則」に照らし合わせて、不正は不正、罪は罪として裁くだけである。このような論理で罪を悟らされても、生徒たちの心のモヤモヤは一向に晴れないばかりか、学校や先生に対する不信が募るばかりである。今の若者は人間関係が希薄だ、情緒に乏しいと言われ、確かにそう感じることもある。しかしそれは、心に悩みや不満を持つ生徒の問題を見ないで、表面化した万引きや「不純異性交遊」だけを裁く学校の生徒指導方法の反映でもあるのだ。

学校で生徒にやってあげられることがあるとすれば、心に悩みや不満を持つ生徒の魂と向かい合って、深くかかわってゆける、そういう人材や場やシステムを創ることだと思ふ。そして大学受験や就職のためでない勉強——性教育、女性学、労働教育、食教育など——をすべての高校生が学ぶことを真剣に検討することである。

それは多分男女共学の家庭科で、私たちが行おうとしている内容と一致している。その家庭科は、今の学校の歪みをただすことのできる教科であるゆえに、一教科のワクを越えて取り組む必要性を感じる。

# 家庭科って

## ときめくね



### ・よしだあきひろ

「石けんコンサート通信」でおなじみの吉田明弘さんが家庭科の教育実習をした（We'90年2・3月号参照）。「兵庫Weの会」でその報告があり、続いて彼の盟友ヤマケンこと山本謙吉さんが彼の授業にコメントした。二人の意見は示唆に富み、この号のテーマにぴったり。吉田さんの教育実習体験は「とんでもない通信」から転載、山本さんにはコメントを書いていただいだ。（編集部）

教育実習が僕の思い出のなかで、胸がキュンとなるような心ときめく体験として残っています。実習中に撮ってもらったビデオやスライド。そんなものや、子どもたちに書いてもらった感想文を見ていると、そういうえばあんなこともあつたなと思ひ出されて「ずっと入院していた中西さんは元気になったかな？」とか「編み物をしていたあの子。クリスマスのプレゼント間にあつたかな？」と思ひはめぐります。

実習先はと言うとWeの会の河上紀子さんの園田学園中・高等学校。女子校に家庭科の教育実習に行ってきました。

行く前までは、女子校ってどんな感じかな、教室に入ると

女の子ばかりだろうし、トイレはどうしよう、と心配だったのですが、でも学校の中に入るとそんなこと忘れてしまつて、いつもの石けんコンサートのノリで、通りかかる子どもたちに話かけていました。話をしていると、年齢の差もさほど感じなくて（中学一年生と僕とでは歳が倍違います）僕も中学の頃を思い出してしまいました。

中学生の頃の、何をしても楽しくて、アイドルの話とか、クラブのことやら男の子のこととか、そんなことをしゃべっているみんなを見ていて、いいなと思つてしまいました。「先生、アイドルでは誰が好き？」というから「光GENJIもいいし、でも富田靖子が好き」と答えて「太陽がいっぱいーを一曲歌いました。「先生、彼女いる？」と聞いてくる子どもには「一さあ、どうかな。僕の彼女にならない？」とその子を追いかけて行くと、子どももキヤアキヤア言つて。僕はすっかりうれしくなつてしまいます。でも中にはやっぱりはさかしいのでしょうか。話かけても目があわない子もいたりして、そういうのも、いいなあと思うのです。こんな子どもたちと二週間を過ごしたのですから、どんなに楽しかったかはわかるというものでしょう。

まず初日に職員室でごあいさつ。「これから男性も家事や育児を担う時代になるのでしょうか？」とメッセージをして、今度は体育館で子どもたちに紹介してもらつて「人間に

はいろんな人がいていいわけ、僕みたいに家庭科をやりたい男性がいてもいいよね」と自己PRをしておきました。ちょうど文化祭が翌日で、このあいさつの後に僕も子どもたちといっしょに準備をしたのですが、みんな好奇の目でみていました。でも三年生ぐらいになると、けっこう話しかけてきてくれるようで「大江千里に似てる」とか言われてしまいました。お昼には「先生食券あげる」とラーメン券をもらって僕はすっかりごきげん。ラーメンとカレーうどんを食べました。でも食堂は合成洗済でした。ちなみに家庭科室には石けんが置いてありました。さすがさすが。

何しろ僕は大学は国文科でしょう。家庭科は通信教育で学んでいるところだし、わからないことばかり。洗濯も好きだし、料理も好きで、ときたまソバを打ったり、天然酵母のパンを焼いてみたりするけれど、包丁の使い方だっけ教科書のようににはできないし、あのトントントンっていうようにはキヤベツだっけ切れないのです。被服になるとまったくダメっ感じ。ぞうきを縫ったりするとガタガタで、目もあてられません。中学生のころ技術の授業で本箱を作ったのですが、先生が僕の作品を見て「吉田君、すまないがペーパーテストでがんばってくれ」と言っていました。だいたい大ざっぱなんだよね。こんな僕が家庭科の実習に行つてうまくできるのでしょうか。でも僕は怖いもの知らずというか、実習に行つ

てしまったわけ、さぞ指導教諭の河上さんは苦勞されたことでしょう。ごめんなさい。

僕はやっぱり家庭科のなかで、もちろんキヤベツがトントン切れたり、服が縫えたり、洗濯の仕方を知つたりという生活技術の習得も大切なだけ、世界に目をむけようと伝えたいと思うのです。毎日の暮らしを中心に、自分のこと、自分をとりまく人たち、自分はどうな時代に生きているのか。そしてどんな時代をつくりたいのか。そういうことについて考えることができればいいなと思うし、生きることの意味を問いたいと思うのです。

そんな家庭科のイメージをひろげていると、僕のあれもできない、これもできないという不安な要素はふっ飛んでしまつて、いま僕が考えていることをせいっぱい子どもたちにも伝えよう。そして実習で、僕もありのままの姿で子どもたちと接しようと思つたのでした。こう思つてしまうと、なんだか自信がついてきて、調理実習の前の日に、河上さんにタマネギのばつちし切れる法を伝授してもらつたりして、子どもたちに翌日「タマネギはこんなふうに切ると、きれいに切れます」なんて僕が説明しているのだからおほほほ。ちょうど調理実習では、スパゲティ・ミートソースを作つたのだけれど、それ以来上手に作れるようになったし、一度ごちそうしましょうか？ もうすぐ編み物にもチャレンジしてみよ

うと思っています。できあがったら、もちろん彼女にプレゼントします。

編み物で思い出したけれど、もし家庭科の先生になれたら、休み時間も放課後も熱心に編んでいる子どもが一人や二人いるでしょう。そんな子のところへ毛糸と編み棒をたずさえて行って「ねえ、先生にも教えて」と話しかけようと思うのです。それで「編み方はこうするんだよ」と子どもに説明してもらいながら、学校のこととか家でのこととか会話を交わしたり、寒い日にはお茶でも入れてゆったりと。そんなのって、とっても楽しそう。いいなあと思ってしまう。それで僕がすこしは上達したら、授業でも編み物を取り入れて「○○さんが編み方を教えてくれて、僕もやっと一人前になりました」と子どもたちに公表しておいて、Weの森陽子さんみたいに『家庭科新時代』の森さんの実践にあとがけされています)、女の子も男の子も編み物をしてみたいな。ひとつひとつ目をひろいながら、友だちとワイワイしゃべったり、僕は僕で子どもたちにお茶と手作りクッキーのサービスをしたり。こんな授業をやってみたいな。こう考えてみると、家庭科のイメージはどんどんひろがっていくのです。

やっぱり調理実習はリズムにのって、ワクワクしながらやりたいと思って中一のクラスでは「好きです石けん」の歌をオープンニング(指導案では導入という)で歌いました。とこ

ろが僕の手順の悪いのと歌を歌ったりしたので、昼休みにずいぶんくい込んでしまつて。でも誰も文句を言わないし、なんて優しいのだろう。そして調理中は僕の石けんコンサートタイプのをかけて、試食のときにはムードミュージック全集。やっぱり雰囲気を出したいから、テープを流してみました。で、あとの感想文には「自分の歌を強引に聞かせてくれるところがおもしろい」とか「おもしろかったけど、吉田先生の歌が強烈だった」と書いてあったから、調理実習に歌っていろいろのいいのかしら？

石けんの歌は、中一の2クラス、高一の2クラス、高二では4クラスで歌いました。みんな覚えてくれて、廊下を歩いていると「石けんの歌うたって」とリクエストがあったり、わざわざ友だちを連れてきて「この子まだ聞いていないんだ。歌ってあげて」と言ってくれるのでした。それで僕はすっかりうれしくなつて、廊下でもグラウンドでも道でも、どこでも「石けん石けん愛しています」と口ずさんでいました。で、この石けんの歌には、もつとうれしいことがあって、モダンダンス部の練習を見に行つて(文化祭のダンスに感激したから)、踊ってもらおうとしたら、すでに練習は終わっていてダメ。がっくりして家庭科室にもどろうとしたら、ダンス部の子が「先生、石けんの歌うたって」と言うのです。それでいつもの調子で歌うと、みんなよろこんでくれて、子

どもが楽しそうだと僕も楽しい気分になるから、いそいで五階から一階の家庭科室にかけおけてラジカセをもつてきて、ほかの歌も披露。すると中三のみわちゃん・ゆりこちゃん・かずちゃん・あいこちゃんの仲よしグループが、石けんの歌に振り付けをしてくれたりして、これはまたうれしい。そこで僕はふたたび家庭科室にかけおけてカメラを取りに行ったのでした。ところが電池がなくてフラッシュがつかない。またまた僕は電池をとりに行くことになってしまいました。

ハアハア息を切らしていると、子どもたちはニコニコして僕を見ている。そして石けんダンスのワンポーズごとをカメラにおさめたのでした。僕がうれしくなつて一生懸命だと、子どもたちもうれしい気分になるのだなあと思ったし、逆にも僕が「そんなダンスつまらないよ」なんて言ったとしたら、子どもたちもつまらないだろうし、そういう僕と子どもたちとは同じ時を共有することはできないでしょう。子どもたちといっしょにいて、ほんと僕は楽しいのです。生徒だからとか、先生だからとか、そんなことはまったく意識しないし、そういうことを越えて、いまいっしょにいたい人として、話をしたい人として、顔を見ていたい人として、あるんだよね。そういう関係は、そういう気持ちは、学校生活に、授業に持ち込めないものかと僕は思うのです。

(二)とんでもない通信「第22号より」

## 生徒と教師のやりとり

—石けんコンサート—

### ●山本謙吉

チャーリー(吉田明弘君)が教育実習生として、園田学園の高校二年生のクラスで授業をした。僕はそのビデオテープを見せてもらったのだが、気にかかることがあった。それは、授業の中の生徒と彼(教師)とのやりとりについてだった。

彼は授業中、「チェルノブイリ原発事故のことで、何でもいいですから知ることがあれば言ってください」と発問した。つづいて「いかがですか」と言いながら、一人の女子生徒を指名した。彼女は、すぐに答えることができなかった。彼は別の女子生徒に「いかがですか」と問いかけた。その彼女も答えることができなかった。さらに同じように問いかけられた三人目の女子生徒も答えることができなかった。すると、指名されてはいないが、ある女子生徒が意見を述べた。彼はその発言をとりあげて説明を続けていった。

その場面の映像は、ごく普通の、きつと誰もが何度も経験がある授業風景と見えた。さて、ここで気にかかること。

授業中のこのような教師の言動を、はたしてそれでよいのか、と問い直したのが林竹二である。彼は全国の小中高校で二百回を超える授業をして、そのつど書いてもらった子どもたちの感想文に依って授業について独自の見方をしている。

林は、「教師の仕事は授業を組織することである」と言う。そして、「そのために行うべき教師の活動の核心をなすものは、子どもの発言を激しい吟味にかけることである」という。子どもたちが学習参考書などから仕入れてきた知識、あるいは世間の通念、世間一般に考えられている意見、みんなの中にいつの間にかしみこんでいる考えなど、そう見える、そう思われるものを、検証ぬきにそう「有る」と決めこんでしまっている事がらを自分の意見として出す人があった場合、それをそのまま通してしまうのでは吟味という仕事は抜け落ちる。そうではなくて、それを吟味にかけることから問答がはじまる。

林が長年研究してきたソクラテスは、その相手がもちあわせている意見を出すと、必ずそれを激しい吟味にかける。どんな意見もすべて否定されてしまう。その吟味に自分をゆだねることで、人は世間一般の通り一ぺんの考え方から抜け出すきっかけをつかむ。そこで大事なことは、その否定の質で、自分の意見の維持がたいことを腹の底から自ら納得してはじめて、その通俗的な物の見方・感じ方からその人間は解放

されてゆく。それがソクラテスの教育の方法である。授業のなかで教師がしなくてはならないのはそういうことである。

ところが、多くの教師にはあらかじめ正しい解答が用意されていて、その解答へ導くのに都合のよい発言だけを取りあげて、しかも何の吟味にもかけずにそういった借りものの知識を渡り歩く。そしてそのことに何も気づいていない。

林は発言と参加ということについて述べている。子どもの発言量によって参加の度合いをはかるのではない。授業に参加するとは、授業の始まりから終わりに至るまでのあらゆる場面で子どもはたえず授業に参加していなければならない。

一人ひとりの子どもについていえば、自分がものを言っているときより黙っているときの方が圧倒的に多い。だから自分以外の人の発言をどれだけ素直にまともに聞き取ることができるか、言葉にならないようなものをどこまで聞き取ることができるか、さらにそれを聞きながら、その発言とつき合わせながら自分の考えを点検することがどのくらいできるかということ、これらが授業参加のもっとも根本的な問題である。そして他の子どもたちの発言を充分に聞き取り、授業の流れの中で他の発言との関連で自分の発言が必要になった時に発言する、という姿勢が子どもとクラスの中につくられていないと子どもが授業の主体となることはできない。場合によっては、いわゆる「活発な発言」がひどい授業妨害になって

# ひと

## 〈季節のうた〉 の 仙田敬子さん



「季節のうた」の仙田敬子さん、小柄で華奢な体に「古きよき時代」の女学生の優雅さと華やきが漂う。編集長の女学校時代の親友。東京出身。兄といっしょに野山を駆けめぐって育ち、女学校では、先生をからかったり、茶目っ気たっぷりな少女。

「嫁が本を読むなんて、もつてのほか」という家風の婚家先で、俳句なら、紙と鉛筆があ

いる場合がある。いや、それが圧倒的に多いのではないか。仲間の一人が指名されて立ったが、なかなかうまく説明できなくて困っているときに、わきからやかましく発言を求めるのは授業参加でなくて授業妨害であるが、子どもが何か持っているのに、うまく言いあらわせないで答えにつまってしまうと、すぐほかの子を指名するのも教師による授業妨害ではないか。こういう教師によって授業の中の節度を子どもが身

につけることができるはずはない。子どもの発言における節度や沈黙のふかい参加こそが、よい授業が成立するための不可欠の要件であることが案外一般に忘れられているのではないか……。

チャリーリーの授業のビデオを見ながら、林が述べているそういつたことが気にかかった。

れば、と、公民館の句会に通いながら、内緒で作り返ける。「今から思えば、束縛からの逃げ道としてなんでもよかったのかもしれない」と当時を懐しむまなざしに。

仕事一筋の研究者だったご夫君富男氏は、阪大を退官後ほどなくして癌に倒れる。本人に告げないことを仙田さんはあえて選ぶ。一月半後、ご長男を相手に仕事の話を楽しそうにした直後、富男氏は永遠の眠りにつく。

「別れようと思ったことも、子供を連れて家を出たりしたことも度々」あったとか。「五十歳を過ぎた頃から、次第に優しくなった」亡き人への思いを、五・七・五の文字に凝縮させて耐えて、この六月で二年になる。

昔は多勢の学生たちが出入りし賑やかな暮

らしだったとのこと。合理的で理論家の富男氏が「ふわらふわらして」と評した「直観と感性で生きる」敬子さんを、少しハラハラと見守る騎士ナイト役は、成人した二人の御子息。

俳画は俳句と題材がぴったり同じではダメ、微妙にズレて、それでいて季節は同じという組み合わせが難しいと伺う。

「俳句は、余白」を残すことができるから好き、読む人もいろいろるなうけとりかたができて」と。日々の暮らしを大切に生きる人の濃やかな情感と、季語のイメージの豊かさ高い象徴性。日常と非日常の不思議な交錯と余白の響きがハツとするほど美しい。「淡海」(牧羊社)、「仙田敬子句集」(芸風書院)と、句集二冊。(稲邑)



発

言

## 高校入試における

## 男女差別を考える

武田 恭子

一 昨年の静岡県立菫山高校理科入試における事前選抜および男女差別問題の新聞報道を皆さんは覚えておいででしょうか。男子より成績が上回る女子が「女子が多くなると家庭科の授業を行わなければならない」という理由で、不合格にさせられていたことが、明らかにされたのです。理数科というと、理数系が得意な子供たちが学ぶところだと思われるでしょうが、実際は、大学受験の成果を上げる目的のために「無駄のない」教育課程を組んだ「特別進学クラス」というのもよいでしょう。

この菫高問題について「男女差別は他校にもある」「受験一辺倒の歪んだ教育だ」「男女共学必修に向かっている家庭科を女子にも学ばせず、差別の口実にするのはおかしい」などの声が、県内外から県教委やマスコミに寄せられました。静岡の教育が、これほどマスコミを賑わしたのはかつてなかったことです。マスコミは、問題意識を喚起し世論を形成する大

きな力となりましたが、やがて「沈黙化」されていきました。県教委は、事前選抜については認めています。男女差別についてはその事実さえ認めようとしていません。内部告発した菫山高校の教員は、年度末の人事移動で不当に転勤させられたとして、現在係争中と聞いています。

静岡県民にとって衆知の事実である「高校入試における男女差別」が、今まで問題化しなかったのは「男は一生妻子を養うべく、いい学校にいき、いい企業に就職しなければならぬ」「女はどうせ結婚して家に入るんだから、いい学校に行くことはない」という社会通念が罷り通っていたからです。そして「エリート校」のすぐ下のランクの「名門公立女子高校」の存在は、それを合理化していたのです。

これについて、国連婦人の十年の中で活動してきた婦人が声を上げたのは、必然的成り行きといってもよいかもしれませぬ。昨年九月、その呼びかけに、浜松市内の婦人団体の有志

が集まり、この問題への取り組みを開始し、十月十五日「公立高校の入学者選抜における男女差別を考える会」が正式に発足しました。私たちの地域のいわゆる「エリート校」の女子の割合は21〜22%に過ぎません。公立女子高があるためにその程度に人数制限されているのです。会では「入学者選抜における女子の差別的取り扱いをやめさせること」と同時に、「公立女子高校の共学化をすすめること」を当面の課題とし、「男女平等が教育の場で実現されること」を目標に活動することになりました。高校の男女比のアンバランスは、思春期という大事な時期に、男女が自然な形で互いの性を理解し合う機会を奪うもので、「男女共学」をより確かなものとすることは、男女共生社会に不可欠と考えるからです。

ところで、現在の公立女子高校にも、かつて男子が在籍していたことがあります。それがなぜ共学化に進まなかったのか、私たちの会では学習会をもちました。男子の入学は一九四九年、占領軍が日本の民主化のために、教育についても「小学区制、男女共学、総合制」の三原則を迫った時です。私たちの地域の旧制女学校に、二十六名の男子が小学区制により入っています。一方の旧制中学にも五名の女子が入りました。ところが、次の年には旧制女学校の二十六名の男子全員が、旧制一中と二中に分けられ転校しているのです。もちろん、男子用のトイレ等設備が整っていないかったことや、本

県の場合、教員の交流はなされなかったための指導の難しさはあったでしょうが、旧制中学の女子はそのまま残り、十分ながらも男女共学の歴史を歩むのです。なぜ、男子は去ったのでしょうか。ここに再び登場するのが家庭科です。当時、高校の家庭科は「実業」という教科の中で、農・工・商・水産などとともに入選の扱いでした。にもかかわらず、各校に施設設備を整えることが困難であるという理由で、旧制女学校は「家庭」を必修とする学校として事実上女子校化したのです。旧制中学は「家庭」を選ばない男女が学ぶことになり、女子の人数は少数で推移します。その旧制女学校が現在の公立女子高校であり、旧制中学がいわゆる「エリート校」なのです。

私たちの願いは、自然な男女比率で、実効ある男女共学を受験教育に偏らずにすすめてほしいということです。過熱する受験競争の中で味わう優越感や達成感に、自己存在の意義を見出ししている大人や子供たち。様々な人間と交流し、共に生きることを学ぶ視点が欠落していると思わざるをえませんが、教育に効率を求めようとすれば、差別や選別、ふるい分けでより均一な集団を作り上げようとすることは必定です。私たちの運動は、女性であるがゆえに味わわれてきた数々の挫折を子供たちの時代にまで引き継がせたくないという思いと、教育は効率を求めめるのではなく行われるべきだという

ことを、男女共学という角度から問題提起しているにすぎませんが、ぜひ全国の皆さんのお力もお貸しいただきたいと思っています。現在、入会者を募るとともに署名活動をしています。

ご協力いただける方がありましたら、ぜひご一報ください。

連絡先 浜松市元魚町一五〇―五 浜松婦人懇話会内

☎ 053-56-3287 (火木土の午後)

発  
言

## 授業が私を変えていく

小野慶子

「エーッ。また買ってきたの?」

非難めいた声を出しながらも、次男がのぞきに来る。見せれば言われるとわかっている、見せずにはいられない。紙づつみをとく。

「へー、すごいじゃん!」

上野の科学博物館の地下売店で買ってきたアンモナイトの化石。ずしりと手に重たい。学校で子どもたちに「さわっていいよ。もってごらん」と言っている自分を想像してつい口元がゆるんでしまう。

だいたい私が化石を買ってくるなんて、ちょっと前には考えられないことだった。化石でむかしのことがわかると頭では知っていても、わざわざ手に取ってみる気もしなかった。

それが授業をしていくうちに、本ものの化石が見たい、見せたい、手に入れたい、となったのだ。

「授業」というのは『地球の歴史』の授業。『人間の歴史』の序章ともいえるものだ(『人間の歴史』については、本号の「人間ってすごいね、先生」で久津見宣子さんがくわしく書かれていますので、どうぞお読みください)。地球はいつどんなふうに来たのか? 人間が現れる前の長い長い歴史の中に、どんなに多くの生命の積みかさねがあったことか。そして、今も私たちはたぐさんの生き物と共にこの「地球」で生きているのだということ学ぶ。それをただ、無セキツイ動物からセキツイ動物へ、魚類、両生類、爬虫類と丸暗記をするのではなく、証拠となる実物や、スライド・ビデオ・読

み物などを使って、科学にうらづけられた大むかしの世界をイメージ豊かにとらえさせていく。

よく晴れた日曜日。二階のペランダでスライド撮影。授業に使用したい写真の載っている本をできるだけ平らに開いて置く。カメラを持つ自分の影が入らないように気をつける。手ぶれがないよう、体の一部を壁につけて……。『社会科学の授業を創る会（現在は人間の歴史の授業を創る会）』の機関誌一号にあった接写の撮り方を思い浮かべながら、一眼レフのシャッターを押す。カシャリと快い音。一枚一枚写真の大きさが違うので、ピントをあわせるのに手間どる。

教室で「ヘーッ」とか「オーッ」という子どもたちの感嘆の声があがった時のうれしさ、心の中で「やったね」とさげぶ。今回の秀作(?)は、大勢の学者たちが大きな恐竜の骨を発掘しているところと、マンモスの歯の化石だと思ふ。

「ねえ、見て見て、みんな夢中で描いていたわよ。」

水道橋の「人間の歴史会館」。せまい部屋いっぱいの子どもたちの描いた地球のはじまりの絵をひろげる。雨にぬれないうようなビニールに包んで持ってきた大きなラシャ紙八枚分。「この原始の雲、いかにも雨がふりそうっていう感じ。子どもって、こういうのが描けちゃうのよねエ。」

三人でやっている月二回の研究会。一時間分の授業テープ

を起こし、授業でしたことを持ち寄る。ひとりだどいつい後まわしにしてしまう授業の記録やまとめも、話し合う仲間がいると不思議とできる。互いの授業を検討すると、自分では気がつかなかった問題点がつぎつぎと出てくる。

「この発問で答えさせるのは無理よ。子どもがかわいそう」「どうしてこんなふうに言いきれるの? まだ学者たちだって結論は出せないでいるのに、どの本に書いてあった?」

私のまずの課題は「知ったかぶりの授業をしないこと」。あたり前のことだけど、これがなかなかむずかしい。なにしろ教員になって約二十年、「知ったかぶり」で身を守ってきたようなものだからそう簡単にはぬけられない。でも今やつと子どもといっしょに学ぶ授業の楽しさがわかりかけてきた。授業が私を変えていく。

四十六億年の地球の歴史を勉強した五年生の感想から。

「(46 m)でっかい表がおもしろかった。スライドの勉強がおもしろかった。名前がむずかかった。(生き物の)大きさを教室などで比べてくれたのでよくわかった。この勉強をして、科学者はすごいと思った」(武志くん)

「この地球の歴史をやって、むかし恐竜がこの世界を支配していることがわかった。人間ができる前にこんなに長いときがあったって知ったときは、びっくりした。恐竜の模型づくりや折紙づくりもおもしろかった!」(綾子さん)

発

言

## 学校と向き会う

川上啓子

私は日頃から、人や物との出会いを大切にしたいと思っています。人は人との出会いと、その交わりの中で育てられると思うのです。まして、子どもの柔らかい心にこそ、たくさんの「ふれ合いの暖かさ」を感じさせてやりたいと思うのは、すべての親の願いでしょう。そのためにも、家庭とともに学校が果たす役割を期待しています。

人と人とが真心でぶつかり合える場、何事にも率直な意見が交換できる関係でありたい学校が、何か事ある時には、心を閉ざし、保身に走るように見えるのは何故でしょう。クラス委員として、学校と関わってきた経験から感じたことを述べてみたいと思います。

昨春、六年生の担任が変わり、子どもたちにとっては寝耳に水の新しい先生がやってきました。

六月、一クラスの男子の間に、いじめが広がり、授業さえ

成立していない」という情報に、親たちにはできるところで担任を助けられないものかと、教頭同席の上、話し合いが持たれました。

話し合いを通し、親たちが感じたのは、担任があまりにも教育者としての能力に欠けるのではないか、という点でした。何度かの話し合いの中で、ますますその感は募りました。

教師も人間、その個性に口を出す気はありませんが、プロである以上、教えるに足る能力と人格、そして意欲ある人であってほしいと思うのです。

生き生きしていたわが子も、表情が乏しくなり、すべてに意欲をなくし、学校のことは全くと言ってよいほど口にしなくなりました。学校生活が、こんなに子どもたちの心にかげを落とすのかと、改めて感じさせられるほどでした。

親同士の話し合いを持ったたり、あれこれ試行錯誤している

時、PTA役員の一部から事情を聴かれ、この件の一切から親は手を引くように言われる一幕もありました。どうやら、PTAと学校との関係を心配し、子どもたちの置かれている状況は、二の次のようでした。

親たちに諦めの色が濃くなり、せめて勉強だけは遅れないようにと、塾へ通う子どもが急に増えました。

しかし、このままでは終われない、そんな思いで様々な事を試みました。親同士の親睦をはかる、クラス通信の発行、ハイキング、ゲーム大会等、意気消沈している子どもたちを励ましたい。そんな思いで親たちは動きました。

また、こういう問題に関わって行動するたくさんの人にも相談してみました。門野晴子さんを講師に学習会を開いたのも、その一つです。

これ等から得たものを総合すると、自分の子どものことに、事なかれ主義、おまかせ主義ではいけないこと。また、同じ学校の中に理解を示して下さる先生がいるはず、その先生に相談してみるなど、とにかく諦めずに、話し合いを求めて行こうと、勇気づけられるアドバイスを頂きました。

さっそく、子どもたちが信頼をおく理科専科の先生に、親の思いと、これまでしてきたことを伝え、子どもたちをお願いしました。

先生は、その後、週三時間の理科の授業の中で、敢えて時

間を割き、子どもたちの心に触れ、本音を引き出し、助言し、励まし続けて下さり、子どもたちも、自信を取りもどし始めることができました。そのお陰で、校長も私たち親の言葉に、やがて耳を傾けてくれたのだと思えます。

その頃から、子どもたちの表情も少しずつ明るくなり、二度にわたる皆で校長室に向き、自分たちの思いを直接伝えたいのです。

そして、とにかく話し合いをとの第三者から学校への提言も効を奏し、やっとクラス全体と、学校との話し合いが実現、二日後、担任は長期療養休暇の名目でその座を去りました。

私たち親は、決して学校と敵対するつもりはなく、話し合いを望んだのです。しかし、疑問を投げかけると、すぐに構える学校の態度、学校と教師だけを守ろうとする閉鎖性は、日頃学校と保護者との間に、しっかりと信頼関係が築けていないことに原因があるように思います。

いつでも出向いて行ける学校、教師と親がオープンに話し合え、子どもにとつて、どうすることが、より良いことか、子どもに視点を置くことが守られれば、問題の陰に子どもたちが置き去りにされることもないと思えるのです。

この先、学校を開かれた場にしてゆくために、教師と親が信頼関係を築くことは、お互いのテーマではないでしょうか。私自身への反省も込めて……。

発

言

## 家庭科は学校を変える

星名 綾

知識や技能を、その場限り、目先のことのために理解するのではなく、それらを生かし、応用しながら、現実を認識し、未来を見つめる。歴史の流れの中に自分を位置づけ、今自分がこの世に存在することの背後にあることを学び、今自分ができることが、次の世代とどのように関わっていくのかを考えてみる……。このようなことをする場や機会が、今の学校から失われている。また、他人と意見を交換し合ったり、自分の内面に深く立ち入り、自身と対峙しながら、考えを深め、真に自らの足で歩いて行く力を養う場も少なくなっている。

学校を変えるためには、今の学校から失われてしまったものをとりもどすこと。定期試験がすんだら、受験にパスしたら、用がなくなってしまうという教育ではなく、学校を離れて、一個の人間として生きる時に、自分の頭で考え、歩んで行く力を養い蓄えるような、そんな教育をとりもどすことが必要である。家庭科にはそのような場を提供し得る力がある。

家庭科では現実にある生活の課題を教材にできる。食べ

る、住む、着る、という日々何気なく、当然のこととしてやっている事柄や、人が愛し合い、新しい生命を産み、育てるということ、現代社会が抱えてしまった、公害、原発、差別など、かなり幅広く扱うことができる。多くの課題について触れられなくても、どこか一つを深く掘りさげること、また新たな課題を見い出すこともできる。実技によって、物を生産する原理を、自分たちの体を通して学ぶことができ、先人の苦労や知恵を「やってみる」ことで共有することもできる。有利さ、経済性、効率性が優先され、あらゆるものが目まぐるしく変化している現状と照らし合わせると、逆の経路を辿っている部分もある。しかし、それは、私たちが失ってしまったものをとりもどす、一手段でもある。

便利で、経済的、効率的な状況は、ややもすると、生活する、生きる主体性を喪失させる。お金を出せば、食物・衣服はもろろん、サービスに至るまで、大抵のものが手に入る。選択する主体は多くの場合、氾濫する情報にふり回されてい

る。もし、目の前に存在するものの裏にあるもの、生産過程やそこで使われる労働力などに思いを巡らせることができたら、生産と消費の場が隔離され、情報が氾濫している現状を、確かな自分の生活観を持って生きることができたら。

生活課題を教材としても、それを生徒の内面に働きかける方向へ持って行くことは、決して容易なことではない。教材化できる課題は山積しているが、各々の課題について、教師である「あなた」はどう考え、どうしたいのか、という問題意識や、生き方が問われる。このことは、私が模擬授業を通して痛感したことである。逆に、教師側がもつ、問題意識を提起することによって、道が開けて行くのかもしれない。

学校も、社会の影響をもちにうけている。点数で人を評価し、校則に代表される管理体制の枠に生徒をいれる。個性ある多種多様な人間と対応するよりも、何かに統一した方が扱いやすいから？ 恐ろしい！ 校則なし、制服なし、何の拘束もない学校もある。まさに自由だが、今、自由を問うていると聞く。現在、多くの学校では、生徒自身がおかれている環境について、何らかの疑問をもつても、積極的にとりくむのは難しい。が、家庭科なら、その場を提供できるだろう。

私にとって家庭科は、必修だからやる、というものであった。確か、中学までは作ることが中心だったが、高校では作ることの他に、先生自身、試行錯誤しながら、家庭科を学ぶ

こと、結婚、環境問題などについて考える場をとりいられた。当時、全くその気がなかったため、本気で授業に臨まなかったのだろう。私が何を思ったか記憶がない。今になって、何か大切なものを忘れてきてしまったように思う。

家庭科は、現実をみつめ、未来を展望し、先人の営みを共有する場や機会を持つ教科である。時間的な広がり、人と人との関係、地域・社会との結びつき、といった空間的広がりを持つ。その中で、教師と生徒が、教える―教えられる関係から、共に学び、考えていく関係に変わることができ。点数で測り、評価することが、本来ならおかしい事柄、たとえば、各生徒のもつ人生観・生命観などが含まれている。

教師と生徒は教える―教えられる関係、答えは一つで教師が持つもの、というのが学校で行われる多くの教科の姿だ。五教科中心の学校教育の中で、影になりがちな家庭科だが、そこで扱う生活や生に関するものは、全ての文化や知識の底にあるものだと思う。男女で学ぶ家庭科は、全ての基礎となる生活を考える場であり、それは生徒一人ひとり、生きる力をつける場でもあろう。ここでは、教師の力量も当然問われる。学校状況全体からみると、家庭科はその一部にすぎないかもしれない。全ての基礎を含む家庭科を、全ての人が学ぶならば、それは、やがて学校のあり方を変えることに確実につながるのではないか、と思う。（日本女子大学学生）



# 新しい 家庭科を 創るために

小学校では

## 柳田社会科との結合を

・武蔵野市立第三小学校

小田 富英

### 一、柳田社会科の単元と家庭科

もう、ずい分前のことになる。私は、本誌第二巻十号（一九八四年一月）の特集「84年　ことし私は」で次のように書かせていただいたことがある。

「柳田社会科においても、私自身、小学校卒業期の三部作授業として、最終単元『人の一生』を、理科の『ヒトの体』と結合してやり終えて、一定の手応えを感じている。その他、『すまい・あかり・ねんりよう』や『着物』など、家庭科教育の蓄積と共鳴する単元は多い」

「柳田社会科」とは、あの民俗学者柳田国男が、戦後の一時

期、民俗学研究所の活動のほとんどを費やして、集大成した教科書『日本の社会』（実業之日本社）のことである。

その単元のなかから、学年別に家庭科の内容と重なると思われるものを列挙してみると以下のようになる。

二年 「しごと」

三年 「かいものとみせ」「たべもの」

四年 「道具のむかしと今」「すまい　あかり　ねんりよう」「着物」

五年 「私たちの生活と消費」「共同生活」

六年 「人の一生」

社会科であるから、柳田が「史心」と名づける歴史教育が底流に流れているが、同じような単元を家庭科でやる時に、

この柳田の手法をとり入れることは、かなり意味あることだと思ふ。九十年代、学校が変わりうるとすれば、教師が自らの存在を相対化し、「制度としての教師」から降りようと自覚的になるか、こま切れに区分された教科の枠をはずし、教室を生活の匂いで満たす努力をするかのいずれでしかない。

柳田国男は、『社会科の新構想』という本の中で、次のように述べている。

「一番子供に興味のあるものは、食物の変遷だと思ふ。食物の変遷ということは、おもしろく説ける自信をもっていきます。簡単なことで、すぐ気がつくのは、第一は、米を盛んに食うようになったこと、第二は、飯が非常にやわらかくなつて、以前のようにあごを使うことが少なくなりました。そんなことも簡単に説明できはしないかと思ふ。(中略)食べ物の変遷というものからじっくり説いたら、単に食べ物についてのこれからの考え方が全然変わるばかりでなく、物は考えようによつては、深いところにまだ知識の潜んでいるものかどうか、人間のすることは正しい、いいことばかりをしているとは限らない。ときによつては、失敗もしているということを中心かせたら、大きくなって選挙民になつた時に、はてなと考える資料をずいぶん六年の間に与えることができると思ふ。それには先ず食物の変遷を教えるのが一番よいのではないか、着物でも説明がつかます。私は着物のことも一年

ばかり考えておりましたし、住宅のことも考えないではありませんが、やはりその変遷が一番激しいのは食物ではないかと思ひます」

私は、「食物」「住居」「着物」など、子どもたちが知りたいと思つている衣食住に関する学習のなかで、こうした柳田の発想をとり入れることが、教科の枠組みをとりはずす第一段階の試みになると思ふのである。

## 二、「あかりのうつりかわり」と

### 『火の昔』

これから述べようとすることは、私が今受け持っている三年生の教室のでき事であり、直接家庭科と結びつけられないかとも思ふが、このまま従来の家庭科に生かすということではなく、今までの実践に振り幅をつける参考にしていただければ幸いである。

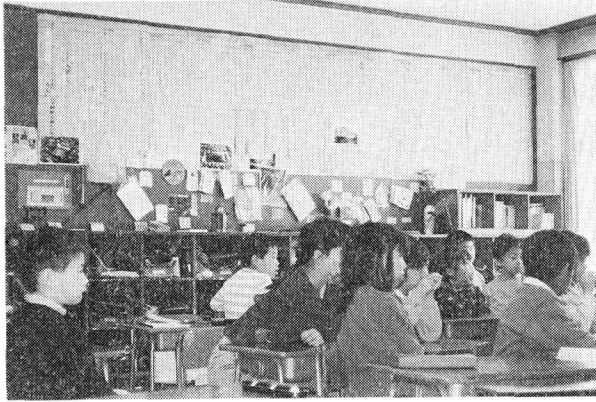
三年生三学期の社会科の学習は、全国どの学校でも、「学校のうつりかわり」と「地域のうつりかわり」になっていると思ふ。そして、その導入段階では、やはりほとんどが、「昔調べ」や「昔集め」と称して身のまわりにある古い物を見つける作業となっている。

そこで、私は、他のクラスの先生たちと相談をし、学年共通に次のような確認をしながら冬休みを迎えた。



ている。

「魚燈の火はちつとも明るくなく、おまけに外から入って来るとすぐに鼻につき、着物にもにおいが付くほどの臭い油で、漁村はお手のものだからいつまでも使っていました、都会では他によい油が無いから使ったので、何か代りになる



油の出るのを、言はば待ちかねて居たのであります」

柳田は、こうしているうちに中国から入ってきたあぶらなが、たちまちのうちに全国に広がっていくのは、「栽培が容易で、産量が胡麻などよりはずつと多く、又何処へでも運送しやすかったからでしょうが、今一つには人がすでに燈油の便利を知って、しかも魚燈の臭いの閉口

し、何か代りの品を待つて居た為」だと述べるのである。

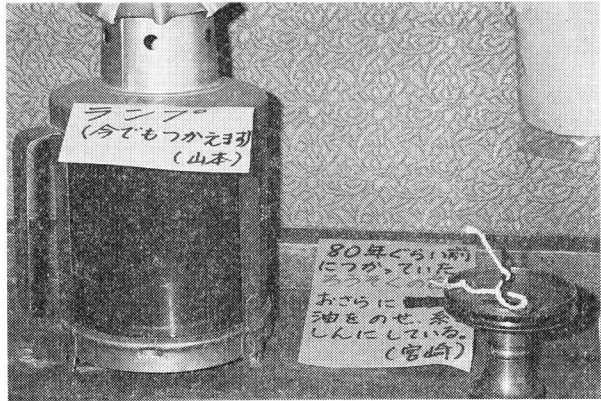
そのあと続けて柳田は、次のような名文で閉めている。

「もとは日本はどちらかというところ、畠作のあまり進まぬ国でありました。それがちようど菜種の花を咲かせるようになった頃から、麦類も盛んに畠に蒔くことになり、又一方には田圃の緑肥用として、紫雲英を作り出しまして、麦の緑と菜の花の黄色と、れんげ草の紅の色とで、みごとに春の平野を彩どることになりました。すなわち家々の夜を明るくしようとした我々の願いが、偶然ながらも一国の風景までを明るくしたのであります」

### 三、昔の「火」とこれからの「あかり」

「あかりのうつりかわり」を載せた学級通信を配った次の日、宮崎君がおじいちゃんから借りてきたという燈明皿を持ってきてくれた。そこで、さつそく「火をともしよう」ということになり、学校にあった「和ろうそく」と一緒に、暗幕をひいた理科室で実験することになった。教室にもどった子どもたちが書いた作文のいくつかを紹介することにす。

「今日、はじめて昔のろうそくを見ました。魚、ごま、つばきとかから油が出るなんて少しも知りませんでした。昔は、明りをとすだけでも、たいへんなことなんだと思いま



した。

(杉山沙代子)

「わたしは、いままであまりはそんなに大切にしないでいいと思っていきました。今だったららかにあたりをつけたりけしたりできるけれども、むかしは、あかりのつけ、けしみたいへんでした。まい日、つけられるものじゃないから、なん時ごろねたのだろうと思いました。」

りかした本をもって、むかしのろうそくをつけて読んだら、なんか色がよくわからなく、字もかんたんによめなかったの、むかしは、とてもくろうしたんだなと思いました。

(河村さやか)

ここまでくると、当然子どもたちのなかから、「これからはつめいされるでんきは、どんなでんきかなあと思えます

(川本雅子)」という声があがってくる。そこで、子どもたちのアイデアを募集すると次々に意見がとび出してきた。

「『でんきをつけたいな』と思うとついたり、リモコンで家中のどこのでんきもつけられる」

「一つのボタンをおすだけで、ぜんぶのでんきがつく」  
「ドアを開けるとつく」

「太陽のかわりのような大きなものができる」  
もうすでに実用化されているものもありそうだが、なかには、「雨がふったくらい夜道にべんりなでんきつきのかさ」という新案特許になりそうなものもでてきた。

このように「物にはすべて歴史がある」「今と昔はちがう」「今まで変わってきたのだから、これからも変わっていく」という柳田社会科の「史心教育」が、家庭科教育の実践と結びついた時、こま切れに区分けされてきた教科の枠組みを切り崩す可能性が見えてくると思う。

本号の特集「九〇年代、学校を変えよう」に関わって結論を述べさせてもらえば、小手先の「生活科」が教科枠組み再編の起爆剤になるわけもなく、「学校」とか「教師」とかの制度的な存在から降りようとする自覚的な営みこそが、教師ひとりひとりに求められてい、そうした想いが共鳴することしか学校の変革はないと断言できるのである。

# 新しい 家庭科を 創るために

中学校では

## 楽しい授業を求めて

— 米の学習 —

● 鹿児島県日置郡市来町立市来中学校

特手ナツ

一、はじめに

私の学校は、遠洋漁業の根拠地である串木野港より約10km離れた小さな漁港(羽島港)の近くにある、生徒数百五十三名の中学校です。私はここへ転勤して二年目。保護者の職業は漁船員が最も多く、全体の四十一・三%を占めています。農業は三・七%です。そして、父親不在、離婚、母親蒸発等で単親家庭に育っている子どもが多いようです。校区内に年間売上高が一億五千万〜六千万の漁業協同組合がありますが、その漁業従業者はほとんどが高齢者です。しかし、その方たちは昔からの海の魅力にひきつけられているのか、マグロ漁船を降りてもいまだに海を捨て切れず、小型船で漁をする沿岸漁業に従事しております。

女の子より男の子の方がたくましさがなく、幼稚で自立していないように感じます。子どもたちには父親の船上での生活と労働の厳しい様子が目に入らないのでしょうか。父親たちは衣・食・住に関すること一切を自分でこなしておられるのに、子どもたちは無力に見えて仕方がありません。父親たちの船上での生活(労働と衣・食・住生活の営み)が陸上に住む、人間の普通の営みであるという認識をもたせ、自分のことは何でも自分でやれる子どもに育てたい、健康で安全な食べ物を選んで食べて、自分のからだを命を守り、家族の食事を見直し改善していくことのできる力を付けてやりたい、さらに食物の生産と流通の仕組みを理解し、その発展過程で生じた矛盾を克服していく力を育ててやりたい、また簡単な

日常食の調理もできるようにしてやりたいと痛感しています。

新学習指導要領では、家庭科も男女ともに履修する教科になりました。しかし現場にはまだまだ女子のみが履修する教科という感覚が根強く残っています。

本校は、これまで男女共学はしていませんでした。89年からやっと一年生だけ共学にしました。二、三年生の男子が、「あれ、家庭科を男女一緒に授業している。おいたちも家庭科の勉強があつとじゃろう」などと言っています。男女共に技術科も家庭科も半分ずつ学習させていきたい。そうなるように、一歩ずつでも進めていきたいと考えています。

以下で報告する内容は一年生の食物学習です。二十八時間取り扱ひ中の十時間を使ってやった「米の学習」の部分です。男子は一年生だけで食物学習が終わりになることを考え、さらには新学習指導要領では食物を男女とも三年間を通して一回だけしか学習できないことも考えて、実践した記録です。子どもたちは米の学習に先だち、オリエンテーションを二時間、栄養の学習を二時間やっています。米の学習の後、魚の学習を四時間、野菜の学習を二時間、そして最後に「今、私たちの食事は」というテーマでまとめを四時間やりました。

## 二、米の学習の流れ

・もみを食べてみよう（一時間）

・玄米を精白米へ（二時間）

・炊飯実験、澱粉の糊化（二時間）

・カレー調理（二時間）

・米粉づくりとだんご作り（二時間）

・米のまとめ（二時間）

## 三、授業の記録

### (1) 米の学習の背景

本校には実習農園があります。米作りを始めて四年目です。昨年も六月二十六日の五く六校時、ゆとりの時間に、農業改良普及所や地元農協の営農指導員の指導を受けて、全校一斉に田植えをしました。もともと田畑面積の少ない所で、田植え経験のある子どもはほとんどいません。はじめ気持ち悪いと言っていた子どもたちも、慣れると聞き覚えた要領で、ていねいに植えていきました。田んぼが校舎のすぐ横にあるため、二く三階の廊下から稲の成長の様子もすぐ分かります。苗作り、田おこし、途中の薬剤散布など、準備と手入れは父母にやってもらいました。だから米の収穫はしても、苦労して米を栽培したという実感がありません。この点はこれからの課題と思います。

とれた米は収穫のとき、全校生徒がおにぎりにしてたっぷり食べています。また二月の立志式に餅つき大会をやり、つき上がった餅をみんなで食べるのです。その他に、奉仕作業

や役員会等の折に、たまには父母たちにもおにぎりを出して食べてもらっています。学校の調理実習にも、この米を使います。

(2) 第一次 粳を食べてみよう

前年実習園で取れた粳と説明をし、各班に三百gずつ渡し、「時間内に、班員みんなで食べてしまうこと」と指示しました。

- ・ 一粒一粒粳殻を取りながら食べている班
  - ・ 水洗いしてはすり鉢ですることを繰り返している班
  - ・ はじめからフライパンで粳を焼いている班……この班は、一部の粳はポップコーンみたいにはじけるが、全部はじけないのに気付いき、「どうしてだろう。昔はフライパンなかつたよ……」と言いながら食べていました。
  - ・ はじめから釜で粳を炊いている班
  - ・ はじめからすり鉢、広口びんでついている班
- いろいろでした。

◆生徒たちは、粳殻が取れにくく、煮えにくいのにびっくりし、三百gついただけで大変だったと言っていました。その経験から、「昔の人々は毎日食べる分をついていたので大変だったろう。粳殻を簡単に取る方法はないのだろうか」と考え始めました。

粳はよく乾燥させてあります。それは種をしつかり保護す

るために、次の発芽に備えてあるからです。このように、粳は植物として生きつづけようとしているのを、人間が勝手に食糧にしてしまうのです。人間は他の生き物の犠牲の上に生きています。昔の人々は知恵を絞り、生命をつないでいくためにいろいろと工夫をしてきました。そして効率の良い便利な機械も発明してきました。粳を食べてみようとして行錯誤した後、感想を話し合ううちに、子どもたちは昔の人々の知恵に学び、自分たちはどう生きたらよいか、考え始めました。

(3) 第二次 玄米を精白米へ

はじめ私の方で粳を玄米にして置き、玄米、五分つき米、胚芽精米、精白米、強化米を準備しました。米の構造図も、成分表も準備しました。そして、玄米飯と白米飯も教師が事前に炊いて授業にのぞみました。玄米を各自に渡し、すり鉢やびんで搗精させました。子どもたちは、ぬか層の存在に気がきました。その後で「昔の人々は精白米は食べていなかったかも」という声が出てきました。

強化米の開発されたわけを話したら、「昔の人たちはぬか層がいくらか残っていた状態で食べていたから、強化米は要らなかったのだ」と気付きました。精白米にする機械が発明されてから、雑穀を食べていた民衆の中にも脚気になる人が出始めたと話したら、文明の進歩が矛盾を生むことに気付きました。



次に、玄米飯と白米飯を試食させたら、「玄米飯がおいしい」という声が出てきました。玄米の消化吸収率の悪さと圧力釜などの使用が必要なことを説明した後、今に生きる自分たちはどう工夫すればよいか各人に考えさせました。

食べ物は自然の産物なので、持ち味を生かして食べることが大切であると強調したかったです。

#### (4)第三次 炊飯実験とでんぶんの糊化

各班毎にビーカーでごはんを炊かせました。米の量は各班とも五十gとし、吸水時間も一定にし、水の量を変えました。水の量は、一班が米と同量、二班が一・五倍、三班が二倍、四班が三倍、五班が四倍、六班が五倍としました。でんぶんの糊化時間を測定させ、炊き上がった後ごはんの量を計らせました。そして、どの班の飯も試食させ、どの水加減で炊いたものが、自分の口に一番よく合うか、またおいしいか、確かめさせました。糊化状態の良いのは、重量の一・五倍、体積の一・二倍が目安であることがわかりました。そこで、各家庭には好みがある。目安を覚えておくといい、おいしいごはんを炊き上げるために、釜を選び、火加減をまめにすることが大切だと説明しました。

子どもたちは、水の多い少ないがあっても、ごはんを炊き上げることができることに気付きました。水の量が多いと水分をたっぷり吸い込んで柔らかくなるので、消化吸収力の低

下している病人などに食べさせるには都合がいいとおさえました。

#### (5)第四次 カレー調理……省略

#### (6)第五次 米粉作りと団子作り

石うすとミキサーで粉作りをさせました。うるち米ともち米をここで教えたかったので、半々の粉にし、各班毎に三百gずつ準備しました。この食物学習では小麦粉の学習が予定に入っていません。そのため、私が前に小麦粉をこねて作ったドウとグルテンも準備しておきました。

でき上がった粉三百gに塩少々と水を加えて、耳たぶのかたさに練り団子にし、ゆでて試食させました。石うすを使う際には、石うすのすりあわせ部分を見せ、石うすの構造を説明しました。なぜ団子にさせたかという点、粉の種類によって性質が違い、米の粉は引きが弱いことをわからせたことからです。団子にするとき、小麦粉で作ったドウと比較させ、グルテンを見せました。

子どもたちは、昔の人々は碎け米、くず米を飯に炊いてもおいしくないということから、粉にして団子にするとおいしいうことに気付いたことを知りました。それがごはんがわりになったり、おやつになったのだとわかってきました。また、石うすでの粉作りが大変で、団子ひとつ作るのに大変な労力があることを実感したようでした。団子作りのとき、ドウも

ゆでた子がいました。その班から小麦粉の団子が堅いのはなぜかと、質問が出ました。

私は、まとめには「自分たちのおやつも見直してみたいね」でとどめておきました。

#### 四、子どもたちの感想

。米についての学習で、昔の人々はいろいろな考えを出して、生活に役立てていったのがすごいなと思った。ごはんを作るときには、自分にちょうど良い堅さにするために、水の量を考えて入れなければならぬことがわかった。粉作りでは、ただの石を組み合わせてまわすだけで粉が作れるなんて、びっくりした。

。あんなに小さい米粒の中にいろいろな栄養素があることがわかった。米を炊いているとき、なぜ米が立つのか、またなぜ、米にひびのようなものがあるのか、昔の人々は米をいろいろな方法で食べていたこと、また芋より米の方がいいということを知っていた昔の人々が芋を主食にしていたら、私たちは今、芋を主食にしていたかもしれないと思っ

#### 五、授業を終えて

授業中の子どもたちの活動の中から生まれたつばやきを、大切にしなが

ます。私としては、子どもたちに自然の恵みである食べ物大切にしながら食べなければ、という気持ちで芽ばえてきたような気がします。また、他の動植物の犠牲の上に我々人間の生々生きることが成立していることにも目が向き始めたように思います。しかし、ここで日本における「農業」や「農業政策」のあり方に対する批判を入れれば良かったなと思っています。それは、この地で将来、農業とかかわりを持ちながら生きていくという子どもが出てほしいなあと思うからです。

もつと時間に余裕があれば、「米とパン」というテーマで討議させると、その点がでてきたのではと思います。できなかったのが残念です。

### 編集室からあなたに

#### ◆ 9年目のWeよろしく

お願いします

'90年代のはじまりの年、Weは9年目を迎えました。Weの出発を、大海に船出する小舟にたとえましたが、波風もおだやかな湾から、荒海に乗り出したことを、ひしと感じます。

振替でご送金下さる継続の方々のご筆跡も、見なれてきて、ふと目がとまると、それは新規お申し込みの方であるのもうれしい。9年目のWeは、ちょっぴりスリムになりましたが、小粒でもピリリと辛い山椒精神はますます健在。新連載の頁もきつと大きな話題を呼びましょう。Weをどうぞよろしく!

# 新しい 家庭科を 創るために

高等学校では

## 授業にならない授業の

中から……………

● 都立高校

蔵本佳子

「学校を変えよう」というテーマにひかれ、つい書いてみたくなった軽率さに自分であきれながら書いています。誌上で紹介できるような生徒を引きつける授業など今の私には夢のような気がします。かつて登場された先生方の綿密な実践例でも着実に学校変革を進めていけると信じていますが、それでも私がこうして書く意味があるとすれば、我が校の実態が授業を成立させるにあまりにも困難で、まず生徒と交わるための突破口をみつける大変さ、学校という場が子供たちには形骸化していることなど、教材研究はもちろん大事だが、それ以前に私たち大人と子どもたちはどう交流していけばいいかという課題が迫っている立場にあることだと思います。

現在の学校に勤めて四年間、理想と現実のギャップの大き

さに打ちのめされ、授業にならない授業にほとほと教師の意味はどこにあるのか、むなしさの毎日です。それでも彼女たちも生きている限りは知的欲求がきつと存在しているに違いない。それを拾い出すための授業づくりを試行錯誤してきました。しかし簡単には自分をさらそうとするはずがありません。学校という制度が教室で自己表現する自由を奪い、教師や生徒同士が交流する関係を抑圧しているからです。

「教育がおかしい」ことについては、We誌上でも何度も取り上げ、私も今までの自分の状況をつかむ手がかりとなる考え方を求めてきました。その中で特に私の関心と呼んだ人が、佐々木賢さんです。著書『学校を疑う』を読み、特に定時制高校という現場を知る人の感覚が、より説得力をもって

私に迫ってきたからだと思いません。不可解な子供たちの言動には大いに悩まされ続けてきた私に、佐々木さんの分析は私の心にあつた一つの壁をこわしてくれたような気がします。

「教育」ということそのものを疑ってみる―この発想はとも新鮮でした。教師が教えたいという教育欲を自分から取り去ることは難しいことですが、家庭科は生活そのものを対象としている分だけ、他教科に比べ犯してはならない領域にふみ込む危険のある教科です。ふみ込まれた者の傷は確実に残り、こちらがいかにもその原因を社会問題に変えようと訴えても、やはり「放っておいてよ」ということになる場合も多いのです。私の感覚で大事だと思ふことを、「彼女たちの大事」に少しでも近づけていく―これは考えてみるとすごいことだと思わざるを得ません。それでも生徒が学校にいる自分を肯定的に受けとめ、教師の言葉を積極的に自分の生に生かしていこうという意志の気持ちがあるなら、スムーズに対話できるかもしれません。しかし、残念ながら学校で生きる知恵や技術を学ぼうという生徒はほとんどいません。

佐々木さんは本の中で、「子供たちの意志の力が弱まっていて学校はそれを強めることに役立たない。なぜなら意志と忍耐を混同しているから」と言っています。そしてその意志を育てる手だてとして「若者のコミュニケーション作り」をあげています。ホームルーム活動が最もそれに適することになります。

すが、今、あちこちの学校で文化祭が低迷し、個性を認め生かし合う集団とはほど遠いのが現実です。「若者のコミュニケーション作り」―ここに学校が新しくなるポイントがあるとしたら、家庭科はそれを創造する教科として最も可能性に満ちたものになるのではないのでしょうか。

さて前おきが長くなりましたが、では具体的にどんな工夫ができるでしょうか。手づくりの被服製作も、健康を脅かす衣料や合成洗剤も、住まい方を考える住居も、自身の興味関心が生徒の知的関心をよぶに至らず、三学期の保育こそ何とか内面に迫りたいと考えていました（担任を持っていない私には、授業を通じてのコミュニケーションしかありませんでした）。ここで私は少々発想の転換をしなくてはなりません。私は今まで生徒の関心の度合いはいかにすぐれた内容を提示できるかにかかっていると考えていました。しかしコミュニケーションの視点で考えると、目指すべき結論がいかに高レベルのものであっても、彼女たちを通過しない限り全く意味のないものになってしまうということ。以前「エリートには知性を実体験の言葉に、実体験感覚の豊かな子らには、それを知的言語に変えていく作業が必要である」との講演を聞いたことがあります。彼女たちの世代感覚をひき出す手段を講じなくては始まらないのです。

ところで保育の授業に入る前に楽しい体験をしました。冬

〈アンケート内容〉 ①性についての疑問(生理, 性, 妊娠, 出産) ②B・Fから性交を迫られたらどうするか ③「処女を守る」ことは意義があると思うか ④「愛があれば結婚や年齢に関係なく性交する」という考えをどう思うか ⑤妊娠を望まないのに性交を迫られたときはっきり避妊を要求できるか ⑥理想の異性像と自分の長所・短所

休み、このままいくと留年になりかねない子供たちに作文の課題を出しました。三つからの選択でほとんどが「私の幼い頃のこと」を選んでいました。学校生活に最も不適応を起こしている子供たちばかり。でも皆、実に生き生きとふり返り、幸福な子供時代を懐しみ、ある子は書いているうちに熱中してしまい忘れていた思い出がよみがえって実におもしろかったと。課題を与えられたことに感謝しているくらいだ

と。いつも授業にそっぽを向き暗い顔をしている子、チャラチャラと落ちつきのないあの子にも、こんな時代があり、両親が自分をどんなふうで育てたかを第三者の目で語っていただきました。こみあげてくるいとおしさを感じないではいられませんでした。佐々木さんはそのお仕事の中で、「自分史」を書くことを入れていました。子供たちが今の自分を客観的に見つめてみる作業というものは大変重要なことだと思えます。子供たちは管理的な教育、教え・教えられる上下関係、資格のための教育のままでは決して心を開くこと

### 保育の計画 (14時間)

#### ①愛と性

- ・アンケート調査
- ・第二性徴, 性的欲求について
- ・性行動をめぐる人間と動物のちがい
- ・性差
- ・男らしさ, 女らしさを考える

#### ②妊娠と出産 (中絶, 避妊も含む)

#### ③乳幼児の発達と保育問題

はないはず。とりあえずはアンケートで意見を吸いあげ、性に関する疑問についてはできるだけ答ええることにしました。このプリントはけっこう楽しそうにやります。「ちょっとこれおもしろそうじゃん。こんなの一人でやってもつまらないから友達のとこでやってもいい? 先生」と席を移動する子もいます。毎年思うのですが、この領域は互いにプライベートな部分に土足でふみ込むことにもなりかねないので私にとつてもつらいところです。アンケートを読むとその子の環境や人間観がよく出てくるので扱いは慎重にならざるを得ません。人に言いたくない性体験を持っている場合もあるから。

次にその展開のしかたですが、結論を一方的に与えるやり方は避けたいと思います。質問を投げかけながら確認していく。その際誰を指すかということもあらかじめ念頭におくことも大切だと思います。しかしはっきり言って問答法は力不足のため失敗だったと思います。二十五人のクラスが

かろうじてよく発言してくれましたが、四十六人で人の意見に耳を傾けるムード作りは難題です。一度に成功させるのは無理だとしても、意見を引き出す中で「へーえ、あの人も案外同じ悩みを持っているのね」とか「皆同じこと考えているんだ」という共通認識（討議ということからいえば、合意づくり）をつくっていったら集団が活かされてくると思います。

私はこの取り組みをしている時、実はWeで寺島松子さんの性教育批判を読み、ポイントを傾けることになりました。それは私自身が男女の性的自立を基本とした上での創造的な関係を最終的に生徒に伝えるべき目標としていて、確かにそれは一見美しい結論であっても、現実の複雑な立場・構造の中ではたてまえにしかならないと納得してしまっただけです。社会的につくられる性差は避けられないテーマです。これをどう切りこむか。そんな折、私は本屋で一冊の本に出会いました。小倉千加子著『松田聖子論』です。70年代の百恵と80年代の聖子を、歌と実人生よりフェミニズムの立場で比較、考察したものです。引き込まれるように読み夢中でノートにまとめてみました。ついでに二人のカセットをひっぱり出してきて、あまりにも安易でしたが、私は何となく久々にこれはいけるのではないかとという期待に胸が高まりました。なぜならテレビというメディアは子供たちの大きな位置を占めるものだし、音楽には異常にこだわる世代、またアイドル

（男性が望む女性像）分析は意外と興味をそそるのでは。そう思いながらカセットをかけたなり、詞を読んだりといつもと違う授業になりました。

決してうまくいったとは言えないものでしたが、普段の学問くさい授業では感じられない刺激があったことは確かです。私の思いこみを超える彼女たちの世界が、松田聖子の世界にオーバーラップして浮かび上がってきた実感です。例えば、女の子にも性欲が自覚され、それがオーブンになっていること。結婚という制度の外では聖子に代表される女の子の恋愛のやり方が間違いなく定着しつつあること。少女マンガの洗礼。貞操などほとんど意味を持たず男性のみがこだわっている。性を異常に感じさせる男は嫌い、など。しかし対異性における性行動は依然として女が男に頼り、つくす形が守られていて、この二面性が彼女たちの矛盾となっています。「先生、松田聖子の相手の男の子って私の理想と同じだよ。結婚したらね、私にセーターを編んでくれる男がいいの」などという発言もありました。いずれにしても結婚という制度が重くのしかかります。次は彼女らの世界に、私たち大人がその矛盾を核にアプローチしていく能力が必要でしょう。残念ながら今の私にはそこまで力はありません。ただ、彼女たちの日常の中で大きな位置を占めるもの（価値意識に大きな影響を与えるもの）を逆に学ぶ―それも観念的ではなくて

具体的な言動から一ことの重要性を感じました。大人のお説教にならない授業とはこんなところにヒントがあるのかも思えません。ついでですが少年向け雑誌のマンガにも教材としておもしろいものがあるようです。『パートナー』（くさのあきひろ）や『安穩族』（石坂啓）。

生徒に迎合しすぎるとの批判もいただきましたが、彼女たちの中学までたどってきた学校生活ややすらぎのない家庭など、ふとしたことで耳にしたり、聞かされたりすると、怒ったり、どなったり毎度のようにできなくなりました。ある時あまりにもおしゃべりが多かったので私自身は投げやりな気持ちだったのですが、でも思いきってカッコよく「ねえ、みんな、どうせ何かの縁で四十六人こうして集まってこの二時間が与えられたのだから、もっと自己表現してみようよ。生きた時間を皆で作っていきましょうよ」などと言うと、サーッと視点がこちらに。少し照れましたが、学校という場がどうして彼女たちの若い時を生かすものにならないか、私なりに少々時間をとって訴えてみたのです。笑う子もいました。相変わらず無視する子もいましたが、私自身が誠意をもって言った言葉には少なからぬ反応があったような気がします。急には彼女たちとの関係は良くはならないけれど、休み時間などに声のかかることが多くなつたようです。それから内容が内容ですから最初のうち「よくそんなエッチなことやってるね

え」「普通そこまで言わないよ」との声も。でも「そうねえ、私もここはできたら避けたいといつも思うけど、とつても大切なことだからヨージンって気合い入れてくるんだよ」。どつと笑いがおこり、「先生も大変ね」。だけどやっぱいろいろな子がいて、私のプライベートな生活をニヤニヤと聞いてくる子も必ずいます。しかし回を重ねていくとむこうから私に悩みをもってやってくる子も多くなり、一つの壁をこえたなあと思います。

何だかんだと試行錯誤してきましたが、私はこの保育で一つの発見をしました。彼女たちから学んだこともそうですが、やってみていくうちに彼女たちに対して聞きたいことが次々と出てきたことです。今までは与えたいことが山ほどあつて臨んだけど、今回はむしろ本当に私の得た結論は彼女たちに受け入れられるかという疑問が多かつたように思います。小沢牧子さんの親子論じやないけれど、「子供は子供の世界に返し、大人は大人の仲間を広げ、再び新しい視点で子供の暮らしに加担したい」ですね。

学校がこんなものでは簡単に変わるしろものでないことは百も承知してますが、文明社会が奪った人間らしさをどこかで回復していかなくてはならない時がきていると思います。次週は生徒自身の研究発表に期待しようとか今からワクワクです。

# アンケート

## “90年代の学校は？”

日教組の教育研究全国集会に、家庭科部会の正会員として参加された方に、次の5点についてお尋ねしました。

1. '90年代の学校、あなたのイメージは？
2. それはなぜですか
3. 学校をどう変えたいですか
4. 変えるための導火線になるものは何ですか
5. 変えるための妨げとなるのは何ですか

回答して下さった方は5名で、少数でしたが、どうぞなまの声をお読みとり下さい。

### 1. '90年代の学校、あなたのイメージは？

- ・暗い (全員)

### 2. それはなぜですか

- ・初任者研修、指導要領の改訂、免許法改訂等で (中学・T)
- ・社会の状況がそうさせているのでは… (中学・H)
- ・日教組が連合に行き、県教組のほとんども、それにならって右方向へ動きつつあります。管理体制はますます強くなり、学校で物言わぬ教師がふえてきます。子供たちも自然にほんののことを言わなくなります (中学・Y)
- ・真に心豊かな人間を育てる教育がなされていないから。心ある教師、情熱のある教師も少なく、後継者も育ちにくい (システムの問題ももちろんあるが…) (高校・S)
- ・管理教育の強化が始まりそうです。新指導要領改訂に伴う教育実践への介入がありそうな気がします (細部に入るな!) (高校・F)

### 3. 学校をどう変えたいですか

- ・先生も生徒も生き生きとしたものに。形だけでなく、子どもに生きる力になるための教育を。管理強化でないものに (中学・T)
- ・生徒がのびのびと学習できる環境作りが大切では (中学・H)
- ・子供をこう育てたい、という指標を全職員で討議して、「そうしたら、この部分をこう変えていこう」という企画が生まれて、実践できる学校 (中学・Y)
- ・輝きのある、生徒も教師も「生きもの」である学校にしたい。それが日本の未来に、人類の未来につながると思うから (高校・S)

- ・授業を創る、あるいは授業実践を公開しあえるような、次の世代 (時代) の子供たちをどう創るかということが、話し合える学校にしたい。教育が次の時代の第一線にいるとの誇りが持てるようにしたい (高校・F)

### 4. 変えるための導火線になるものは何ですか

- ・職場のなかまの創造性と実践力で。管理職ではない (中学・T)
- ・生徒一人一人を大切にできる教師一人一人のゆとりと思いやり (中学・H)
- ・男女にかかわらず、すべての人が学習すること (今、職員室は学習できる雰囲気ではない) (中学・Y)
- ・良い輪を広げる活動、教研、サークルなど、一般にアピールする情報を使う (高校・S)
- ・身近な者同士の話し合い、サークル活動だと思う (高校・F)

### 5. 変えるための妨げとなるのは何ですか

- ・組合の組織力低下で、学び、生かし、さらに実践力をという若い教師が少なくなっている。話し合う時間も少ないが、意識統一が難しくなっている。 (中学・T)
- ・文部省よりの押しつけがある。地方に行けば行くほど忠実に守るため、学校経営がせばめられる (中学・H)
- ・1多忙さ 2男女の差別 (中学・Y)
- ・システムの問題はいろいろあるが、要は「やる気」、人の問題だと思う。本当に危機を感じている人間が、どれだけいるだろうか。 (高校・S)
- ・現場が忙しすぎる。ゆとりがない。管理強化のため、他人と創造する喜びを創り得ない (高校・F)



# 荒野のバラ

## 一花の カリキュラム一

●熊本市立藤園中学校社会科教諭

田中裕一

(カットも)

### 1 堕性は感性を奪う

時は春、陽はうらら、というのに、まあ学校という役所はどうしてこう忙しいのかしら、と毎年春が来る度に暗くなってしまう。年度末から年度始めへのハード・スケジュールは、人を狂わせ、その感性を奪ってしまう。

新入生が、緊張した面持ちで、決意新たに入学して来るというのに、学校の受入れ体制はこれでいいのか、いつも不安にかられる。殺人的なスケジュールに追われ、事務的管理はソツなくこなしても、卒業生を送り、転出入の職場の仲間を送迎し、新入生を迎えるに足る、十分に人間的で、本格的

な戦ストライジー略は立てられているのか、大変疑わしい。

転勤して来た教頭は、四月当初に、「三月末からきょうで八回目」とぼやいた。「何が」と聞くと、「宴会(歓送迎の)」という。悪い人ではないが、これでは教師がだめになる。

以前の事だが、こんな風景に私が出会ったのも三月だった。職員室に授業を呼びに来た生徒に、いきなり一人の教師がわめいた。「この忙しいのに授業なんてできるか!」実際は熊本弁だったから迫力があつた。「こん忙しかつに授業なんてでくるか!」—彼はその時受験事務に忙殺されていたのである。

学校という組織にいと、かくも本末を取り違えて気の毒に取り出すのである。もつとも教師乱心のあおりを食って、現場の教育事務を今の三分の一に減らして、教育本来の仕事と研究と休養に専念させてみせる。だが現場も融通の利かぬことおびたらしい。たとえばの話、「雑務を減らそう」という事になると、すぐ「推進委員会」なるものを作つて会合をふやし、アンケート取つて集計し、そして何事も変わらな

い。変わったのは新たな忙しさのみ、といった調子である。子供たちに、もつと夢のある、価値のある教育はできないのであろうか。熊本市の教師が一人自殺した。県内の一人の教師は、研究発表嫌さに自校に放火した。この事実を前に、教委は呆然、市民はあ然としたが、現場には当然の声もあつ

た。追いつめた荒廢を抜きにして、個人の異常に責を帰することは一面的でしかない。虚しい忙しさに人は耐えられない。新入生に対して、校長も担任も「初心忘るべからず」とのたまう。だが、「花伝書」一つ読んだこともない教師が、一番初心を忘れて、墮性でそんな通俗的物言いをしているのではないか。本当に勉強している教師は、知らぬまに生徒を勉強のとりこにしてしまう。「勉強しろ」と口喧しくいう人の力量ほど怪しいものなのだ。前者の仕事のあとには快い疲れが残るが、後者では虚しいくたびれが募るばかりだろう。

## 2 あなたは何を見ているか



エドヒガン

さて、あなたは今年の桜の花を、しみじみ眺める心の余裕を持ったであろうか。今年の揚雲雀あげひばりのさえずりを聴いたであろうか。「忙しかったのでつい……と、答えも紋切り型だろう。もちろん「しず心なく花の散るらむ」と歌う余裕も、「花の下もとにて春死なむ」と浄土を憧れる心も、葉にしたくも失っている浅間あましい現世ではある。

だが、ここで私は考える。私は一生のうち、この花に幾度会えるのであろうか、と。人生平均七十六としても、せいぜい七十六回ではないか。私にとって、そのうち五十九回はもう戻らぬ花である。するとあと十七回しかこの花に出会えない、と知ると愕然としてしまう。これは衝撃的なことではな

いであろうか。若い頃、あえていえば物心ついた四・五歳から私は花が好きではあったが、ずっとその事実が見えてはいなかった。人生も折り返し地点を過ぎ、下り坂の加速が加わると、初めてなせもつとよくものを見なかったのか、かえすかえすも悔まれてくる。私は何を見ていたのか、何を聴いていたのか、そうした想いが痛切にわが身を襲う。と同時に、きょうこの目の前の花、もの、人が、ひどくいとおしいものに思えてくる。日常の多忙さの中で「死への存在」である自己を見失っている事を指摘したのは、ドイツのハイデガーであった。シュストフは「死を忘れるな！」とさえ強調した。

私は今年の花をよく見たいと思う。人の話をよく聴きたいと思う。やがて生を終える虫たちが、ひと夏の命を燃えつきるように鳴き果てる生き方を学びたいと思う。「何度見たって同じこと」ではないだろう。花は、場所により、時に応じ、私の心の在り様によって、まるで能面の表情のように様々の彩りを現すに違いない。そしてその度ごとに、そこからの発見と創造があるに違いない。その自然の語りかけを、無心に聴きたいと思う。

その花を、「子供」「生徒」と置きかえてもよい。恐らくは井伊直弼から出たと思われる「一期一会いちごいちえ」も、今やテストに出題されるほど手垢にまみれた言葉とはなったが、私は花との出会い、子供との出会い、人々や事がらとの出会いす

べてを、大地を踏みしめて一步一步を歩む想いで大切にしたい。慌しく馳けずり回る今の日本人では、ほんとうに悠久の仕事は難しいのではないか、と思ってもみるのである。

戦前の国定教科書は、新入生の授業を一斉に北から南まで、「サイタ サイタ サクラガ サイタ」で始めた。沖縄では一月にカンヒザクラが、北海道では五月にソメイヨシノが咲くというのに、である。自然なんてとてつもなく大きなもので、文部省とか「国定」とか歯牙にもかけず、自らの必然に従う。今どき権力への政治的配慮に色蒼ざめているのは、所轄官庁と学校と、内閣が任命する最高裁位だろう。

### 3 花のカリキュラム



まず桜の季節は外に出てみよう。「教科書にない」「年間計画にない」という所から教育がおかしくなる。栗の木の盆を造っている韓国人に、「生木で剣ると歪むだろう」と日本人が問うた時、彼は答えた。「ゆがんで悪いか」と。何と大らかなことであろう。最初の理科は花見からでなぜ悪く、というのだ。「人は本性より知ることを欲する(“All men by nature desire to know.” Aristotle); “Metaphysica” trans. by Ross, Oxford.)」といったアリストテレスは、「驚き」から哲学が始まると指摘した。自然と人との出会いは、驚きに満ちているはずだ。花式図を描くのもよからうし、身近な

バラ科の仲間を調べるのもよからう。国語の授業は、花陰で詩を創ったり、古今の桜の詞華集アソシエイトに想いを寄せるのも味なのだろう。

美術の時間は、長谷川等伯の桜図で日本の装飾障屏画を学ぶのもよいし、浮世絵版木が桜材であることを知るもよい。音楽の中三は、滝廉太郎の「花」で始まっている。だが「春宵一刻值千金」の風光を眺めずに歌うから事がおかしくなる。かつて武島羽衣のこの詩を中学生に解釈させたら、「ちやうてい」(長堤)は「天皇の住む所」、「あおやぎ」(青柳)は「青い草の上に寝そべっているヤギ」と迷訳した生徒がいた。生徒が悪いのでも、歌が時代に合わないのでもなく、定見なき乱開発が悪いのである。

英語ならば、東京と交流のあったワシントン・ポトマック河畔の桜に触れ、代りに日本に贈られた「ドッグウッド」(アメリカハナミズキ)に触れることができるはずだ。社会科なら、サクラ前線の北上で日本の気候の一端もわかる。歴史では本居宣長のサクラ観や、封建武士の「散る」美学に触れ、戦前「咲いた花なら散るのは覚悟」(同期の桜)とさせた歪んだ価値観が、日本三百万、アジア二千万の生命を散らせた罪禍に触れるのも必要である。私は、授業中ポリリウムいっぱい外を通過した右翼車の「同期の桜」で、タイムリーな授業ができた。生徒も「貴様と俺とは」を知っていたから。

技術科では、東北佐竹藩からの伝統工芸・桜皮細工に触れ民芸の本質に迫る事もできるし、古代史発掘時の桜皮の弓にまで遡ることもできる。驚くべき人間の創意ではないか。

さて家庭科では、となると、これはもうサクラモチだろう。生菓子敬遠・ダイエツト中でも、真正サクラモチと、ニセサクラ・ビニールモチとを比較させたらどうだろう。当世の眞贋が手に取るようにわかるのではなからうか。この葉の塩漬はオオシマザクラを最上とする。伊豆大島、関東南部に自生するこの桜は、花が白色清楚で、香気が高い。萼に毛がなく、基部が細くなっている。ついでだが、各地のソメイヨシノは、このオオシマザクラとエドヒガンの交配種として、現代では固定されている。葉の塩漬は桜を選ぶが、「桜茶」は各種のヤエザクラの蕾でできるから、実習で試作するといひ。生徒は意外と自然を発見して喜んでくれる。数年前、私が生徒とバラの花弁を校庭で集めて作ったジャムと、PTAの山菜料理教室で作った梅ジャムは大好評であった。生徒も大乗り気で、試作品はたちまち消え失せた。

道徳では、というならば、かの有名な薄墨桜ウススミザクラの枯死寸前を、老医師が精魂傾けた根接ぎで蘇生させた感動的な話がある。

#### 4 荒野に立って

こんなに豊かな教材が、足許にござい



ソメイヨシノ

る転がっているというのに、どうしてつまらぬ学校の授業に教師が言い訳をするのだろう。「都会に桜がない」では枯れていく桜、落葉の早まる桜に近寄る大気汚染を学べばよい。かつて全国最優秀賞を受けた中学生の研究に「銀座の植物」があつた。銀座は柳だけではない。「指導要領にない」などは、全く足もとも子供も、本物も見えていない心貧しさの故であろう。子供がパンに飢えているというのに石を与えて、子供に服を作るのでなく、服に合わせて子供の手足を裁断している「法匪」や「小役人」に教師がなりはてているのであろう。

長崎市長狙撃と伝習館最高裁判決は、同日の新聞の一面を埋めた。この二つの事件の構造的なそ絶対の教材であつた。教科書にない狙撃事件は、日本の民主主義の浮沈に関するに扱いくくなる。ここに五人の判事任命の政治性があり、狙撃犯出現の土壌がある。ここに彼らの思想を育んだ教育の貧困を見ることも決して短絡ではあるまい。標的とされた教育も判決を誘発する要因を内蔵していよう。だが「不当判決」と叫んでも、この日本の荒野が緑野に変わる訳ではない。壇之浦で沈む平知盛の最期のように「見るべき程のことは見つ」と、限りある我等の生の最期に実感できるよう、荒野に立つ足もとから、静かに、誠実に、不動の教育を始めよう。

愁ひつつ 丘にのほれば 花いばら

蕪村

# 家族と家庭科

## 高校教科書「家族」の問題点

酒井はるみ

『家族』教科書は家族の民主化を、主として新憲法と民法改正の範囲で明らかにしたと述べたが、それは家族研究の視点であらためてまとめると、つぎのようになる。

新時代の家族モデルは、家族構成としては核家族、家族形成規範としては夫婦家族制（夫と妻中心の一代限りの家族、双系的親族関係、均分相続）、家族理念としては近代家族（90年2・3月号参照）なのであった。当時の欧米の家族のとりえ方がすっかり出そろったのである。

さて、『家族』でこれらを明示したのは法が中心で、先月号に書いたように、全体の四分の一を占めていた。それでは残る四分の三のページには何が記述されていたのだろうか。もちろん解放された女性の職業生活のあり方なども含まれていたのだが、この四分の三は、新しい家族をしっかりと支える

内容でなければならぬ。そこでこの部分について若干の検討をしてみよう。

まず「目次」は表に掲げる通りで、12月号の「家族目録」とつきあわせてみると、その内容から妊娠がなくなり、親類が加わった程度で、学習指導要領の内容そのままではないが、それにきわめて近い教科書になったことがわかる。

さて、単元1だが、これは五つの項目（節相当）で構成されている。最初に「私を知る」という項目が位置づけられている。日本の現在の家庭科教科書をみている限り、家族関係の領域で「私を知る」から出発することは考えられないほど、今やそれは跡形もない。しかし、アメリカの家族の教科書の方は、手元にある50年版も、現在刊行されているものも、自己を認識することから始まっていて、このパターンはアメリカの伝統であるらしい。『家族』がアメリカのパターンをふんでいると仮定して、手元にある一番古いアメリカの家族の教科書『家族生活』（原著書刊行50年、のちに紹介予定）の第一章「あなたほどの程度に成人していますか」が対応していると思われるので、比べてみよう。

「私を知る」では、自分の身体的成長と人的環境（影響）をあげてから、「何ものにも犯されない、何人にも奪われない、尊い存在である」自分の個性をのびし、個人的人格を成長させ、よい家族関係を保ち、発展させる経験は豊かな人をつく

## 『家族』の目次

まえがき
学習と指導について
単元1 私の家庭と家族
単元2 友だちと隣人と親類
単元3 成人するとは
単元4 結婚の準備
単元5 結婚生活に成功するには
単元6 親になる
単元7 仕事に成功するには

りあげ「『個人と  
しての私』を完成  
させる」と結んで  
いる。

これに対しアメリ  
カでは、「成長  
と発達とは、個人  
が人生にぶつかっ  
て行くその道にお  
いて、向上し成熟  
しようと努力する

限り続くもので、人格は決して完成したということがないのです。……あなた方は各方面に、なだらかに、一貫して成長するものではありません。そうして成長しつづける人は、だれも考えなければならぬ多くの成熟があるのです」に続けて、最も普通の成熟のタイプをあげている。それらは①年齢的成熟②肉体的成熟③知的成熟④感情的成熟⑤社会的成熟(対人関係)⑥哲学的成熟(信念・理想・目的・倫理・価値観)としている。

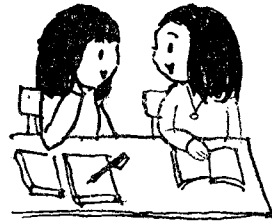
この章は自己の発達段階を客観的に認識し、そのような自己が、以下に続く家族、友人、異性交際などとかかわってゆくように位置づけられた章となっている。

さて「私を知る」では法や教育制度改革で最も強調された「個人の尊厳」が明記されている点特徴的であるが、この「私」がつぎに続く家族生活や結婚における、個人や両性の平等に関連づけられてゆかないのである。「私を知る」の本書構成上の位置づけが意識的にとらえられてはじめて、新しい家族を具体化する力になるはずであるが、この記述では成功していない。ここでは一例をあげたにすぎないが、『家族』の場合、この一例には普遍性があると私は言いたいのである。CIEの指導があったためだろうが、教科書構成上は近代科学の装置が導入されている。にもかかわらず、その装置が機能するような科学や社会的現実が適切な形で文章化されえなかったといっている。かわりに、押しつけた表現をとってはいいかもしれないが、道徳的な彩りをもった記述でうめられているのである。これはやはり内容の貧困といえるだろう。この四分の三に新しい家族をしつかり支えるのに十分な内容をもりこめなかったということなのだ。

それができなかったのは執筆者ではあるが、彼らだけを責めることはできない。教科書が時の学問的水準を如実に反映するものである(あつてほしい)限り、教科書の貧困は、実は戦前の家庭科関連の科学的研究の不在、科学としての家政学の不在のつけ、だったといえるであろう。執筆者もまた時代の子であった。

## 教室の私語と

### 向きあって(1)



(カット 井田裕子)

## 大学生たちと歩く 小沢牧子

ふたつの大学の非常勤講師として、大学生たちと出会うようになって、十数年をかぞえる。臨床心理学と教育心理学の講義やゼミを担当してきた。学生の人びとと向きあい、聞きあい、論じあい、たっぷり遊びもするなかで、私にとつてたくさんの学びや発見があり、楽しさがある。そこで感じ考え体験したあれこれを、読者のかたがたと分かちあってゆきたい。

三年ほど前のことだったろうか、W大学の百人ほどの大きな授業で、学生たちの私語に困ったことがある。縦長の大教

室に当たった年で、授業を作るにはやりにくい条件をもったところだった。話す側と聞く側の間に、距離ができやすいのだ。

教室の居心地と私語の多さとは、どうも関係があるようだ。教卓があまり高くなって、聴いている側とフラットな感じで話せる教室に当たった年は、私も自然で自由な気分になれるし、聴く人びとが耳を傾けてくれる様子があつて、いきおい私語は少ない。

その年は、ことさらにざわざわとして、話しにくかつた。私は、大学の授業は聴きたい人が聴けばいいのだという考えだから、出席を取ったことはないのに、教室のうしろの方まで席を埋める人びとの数が、回が進んでもなかなか減ってこない。そして私語が絶えない。四月に開講して一カ月たった頃には、あたかも「この授業はこんなふうにざわついているものなんだ」とでもいうムードが固定してきた。これでは、話す側の私はつらい。前の方で聴いている人たちも居心地が悪そうだ。何とか打開しなくてはならない。

五月も終わりの頃、私は「講義中の私語について考える」と題して、二回ほど時間を使うことにした。私が一方的に教壇の上から「静かにしてください」などと言うのは、聴く側にも話す側にも、何の意味もない。まず、聴く人びとはそれぞれどう感じ考えているのか、卒直なことを私がきかせて

もらうところから始めようと思った。学生の人びとにその旨を提案し、このテーマについて、一週目には小レポートを書いてもらうこと、二週目にはその内容を私が紹介しながら討論をしたい旨を話した。

この授業は、主として二年生を対象とした「教育心理学」で、「学校教育と心理臨床」という講義タイトルを付していた。それはまた、教職課程を取得しようとする学生の必修課目として位置づけられているものだった。必修課目の少ない大学のカリキュラムのなかで、教職資格とのからみで国から枠をはめられている必修課目であるこの授業と、教室の私語との関係を、のちに私は学生たちのことばから、あらためて自覚させられることになる。

「私語をめぐる論議」の場には、その話を聞いた三年や四年の学生の数人も、臨時に参加してきた。すでに私と数年のつきあいのある、友人という感じの学生たちだ。彼らの参加動機はひとつには、このテーマが実は、「教育」という問題にかかわった深い奥行きをもっていることを見ぬいてのものであり、もうひとつには、これまでのつきあいのある小沢さん（W大学では、一部の学生たちに、教員をサンづけで呼ぼうとするひとつの伝統のようなものがある。この空気を私は好きだ）の投げかけた問題をいっしょに考えようという、友情めいたものもあったのだろう。

小レポートのテーマはふたつ。「あなたにとつて、大学の講義とは何か」、「教室内の私語についての、あなたの本音」。三十分ほどを使って、手短かに書いてもらう。いずれも、私が学生たちの考えを聞かせてほしいという依頼としてである。

学生たちのことばは、私の見えなかった多くのものを見せてくれた。その中身については次号にのべてゆきたいが、今回はNくんの意見ひとつだけを紹介しよう。

「小沢さんがマイクを使われるので眠くなります。それに、フーコーのいう監視システムを踏襲しているような教壇に立たれていると、『権力』から何かを言われているような感じになります。演劇的に書けば、教壇に立たずに、学生と同じ水平線で、マイクなど使わずに講義なされたほうがいいと思います。」

この授業は「資格」にかかわる必修課目なので、別に「教員」に「なりたいたい」のではなくとも、「教職」という「資格」を「もらいたい」に求める人間が大部分だと思えます。ですから、私語を考えるのでしたら、大学の存在論まで考えなくてはならないと思えます」

なるほど、ごもつとも。学生のことばは、教員を決してさぼらせておかないだけの力をもっている。当事者から教わる、とはこういうことを言うのだろう。子どものことは、子どもに聞け、そして学生のことばは、学生に聞け、である。



# 男性学への契機

## 魔男の宅急便

### 愛と 苛立ちの朝

諸橋泰樹

朝の満員電車に乗っていると、男たちの発散する「苛立ち」をひしひしと感じ、彼らの意地悪なしぐさや目つきをこうむらないよう、思わず防禦的になってしまう。たまには、そういった視線や行為をハネのけるべく、年齢相応に堂堂としてみるのだが、そういう時は、ぼくも苛立ちを顔にかいて虚空を睨んでいるに違いない、と気づいて悄然とする。

先般、非常勤で教えているマスコミ志望者コースのある専門学校の年間最後の授業で、最終学年の女性だけのクラスに対し、これから社会に出るにあたってせつかく「志」を持って専門学校に入りその方面の会社就職が決まっているのであれば（マスコミ関係は「実力本位」の世界とは言いが、「男本位」の世界であるのが社会の、そして特にマスコミの世界

の常であり、きみたちは出社の初日から男女差別を思い知らされるかもしれないが）、少なくともすぐに辞めるようなことだけはして欲しくない、と述べた。

プイと辞めてしまい「だから女は」と言われぬようにして欲しい、会社が男女格差をつけて働きにくければそれを地道に働きやすくして欲しい、それが後から来るきみたちの後輩のためのきみたちの使命だ、と。そして喋っているうちに（ぼくの講義科目はメディア論なのだが）、結婚、仕事、子ども、夫婦の役割分担、イエと両親（老親）の問題などに話は発展し、最後のまとめに、つまらない男とは絶対一緒にならないように、とつけ加えた。

「つまらない男」の中には、ぼくも含まれざるを得ないのだらうな、と喋ってから忸怩しよくじとして思っていると、生徒の一人は、次のように言った。

——でも、「つまらなくない男」というのは、一体この世の中にいるんですか？

うーむ、鋭い質問だ、とギクリと口に出してそう言うのと、ぼくは他の生徒に、どう？ きみのBFは、「つまらなくない男」かい？ と訊ねた。その生徒も（BFの存在は否定したが）最近のオトコはツマラナイ、そうでない男にお目にかかりたい、という彼女の意見に組みした。

男たちは元気がなく、魅力がなく、輝いていない。サラリ

ーマンは日々の仕事と日経新聞とスポーツ紙とゴルフとカラオケにあけくれ、食品添加物にも地域問題にも無頓着で、妻や子どもは自分とは違う世界の住人であると思っっている。学生は進学と就職のみが人生の究極目標で、単位だけのための授業とサークルとアルバイトとクルマと女のコードだけが自分の世界であり、彼らにとって「女のコード」とはセックスの対象、結婚したら、「家事・育児をやってくれる者」の謂である。

しかし、男たちサラリーマンも学生も、どこかに苛立ちを匿しており、満員電車ではその風船玉は一触即発だ。かと言って、社会を変えられるとは思わず、変えようとも思わない男たちには、ただ苛立っているだけで怒りと勇気がない。

この「生きにくさ」や「であること」への言いしれぬ苛立ちは、考えてみれば近代以降女性を「家」に囲い込み、男たちが作ってきた社会で男自身が「自家中毒」を起こしていることのあらわれなのかもしれない。要するに、男たちは自身自身にイラついているのだ。男性の吸う空気は、文字通り薄い。満員電車の中の酸欠で鈍った感覚で、窓を開ける勇氣もないのだ。一方、女性たちは元気で、呼吸がラクになった、と小沢牧子さんはぼくに言った。その分今まで男が吸ってきたからね、とぼくが言ったことを、彼女は自著のあとがきに使ってくれた。

女性学にぼくがかかわっていることを知ると、同性からは

半ば揶揄の意味で、それならば「男性学」はないんですか？女性学があつて男性学がないのは差別じゃないですか、と言われる。無論、男性学は実在する。渡辺和子さんによると、87年7月にアイルランドで開かれた第三回国際女性学会では、男性の女性学研究者が自らの性や家族・社会構造を対象化・理論化した分科会が持たれ、アメリカの大学では既に百以上の男性学講座があるという。女性学に照射されて初めて可能になった視座といえよう。

この連載のサブタイトルを「魔王の宅急便」と名づけてみた。何と読むのか、「まだん」か「まおとこ」か。いずれにしても「坐り」も「語呂」も悪い。男の魔女(?)は、「悪魔」という一般名詞と相場は決まっている。女の悪魔は「魔女」であり、魔女は悪魔の亜流であるのが、今の言語の世界なのだ。これも、女性学からの突きつけがなければ男には気づかなかつたに違いない。

このような「みつともない」サブタイトルを引きずって、男性がポスト・女性学状況下でのイニシエーションを経て自立し、大空を満員電車によってではなく飛び回る(何にまたがってだろう?)ような契機を、あなたの家までお届けしたい。ぼくにとつては、おそろくWeの存在すら知らないであろう苛立った朝の男たち(この人たちにこそ必要なのだが)への語りかけの契機ともなるはずである。

# 私の朝鮮史

岡 百合子



朝鮮史の数少ない女性の登場人物に黄真伊<sup>ユンジンイ</sup>がいる。男の論理で書かれる歴史で女はとらえきれないが、黄真伊は、その男の歴史の中のややはずれた場所、一点キラリと光を放っている存在である。

黄真伊は十六世紀、李朝中期の妓生<sup>キョシヨ</sup>であった。生没年もさだかでなく、彼女の残した歌六首と、断片的な記録があるだけだが、それがかえって人びとの想像力をかきたてるのか、多くの伝記や小説の主人公にされている。出生にまつわる話もさまざま、ある者は名門の両班<sup>ヤンバン</sup>の妾の子だといひ、別の者は貧しい盲女の父なし娘<sup>メコ</sup>だといひ。いずれにせよ私生児<sup>シシヨ</sup>だったようで、当時の社会では「賤民<sup>センミン</sup>」とされる存在だった。黄真伊は、詩をよみ書をかき墨絵もたしなみ琴の名手でもあった。その才と天性の美貌を武器に多くの男を手玉にとり足下にひざまづかせたといひ。それが、両班の妾になる位が関の山だった彼女の、せめてもの自己主張であったと、伝記作者たちはいひ。しかし、いま残された歌をみる限りそこにかびあがるの

は、女の言挙<sup>コトカ</sup>げが許されなかった時代にあつて自分の心に正直に、烈しく生きた女人像である。

冬至<sup>トウジ</sup>のながながし夜を、真中<sup>マナカ</sup>より二つに断ちて あたたかき春のしとねにたたみいれ 君の訪<sup>トビ</sup>いくる短か夜を のばしのばさめ (尹学準著「時調<sup>シジョウ</sup>」の訳より)

冬の一人寝の長い夜を切りとつて、恋しい人との夜につきたしたいという切ない愛の歌。一方、恋しい人をひきとめもせず帰してしまふこともある。

あわれ わがなせしことの 末を思わざりしよ さらにいませと袖ひけば 君もいかざりしを 送りてのちのこの焦<sup>コガ</sup>れ われは知らざりし (同)

黄真伊は、大儒学者徐花潭<sup>ソフヤム</sup>を誘惑しようとして果たせなかつたとき、その人生に新しい転機を迎える。男と対抗しひざまづかせることで人生を充たそうとしていた彼女が、かえつて彼を学問や人生の師とおおぐことになるのだ。感性の豊かな女性であつた彼女は、同時に深い内面の人でもあつた。

山は昔に変わらねど 水は日々に新たなり 四時に流るる その水に 昔のもののあるべきや すぐれし人も水に似て ひとたび行けば帰らざり (同)

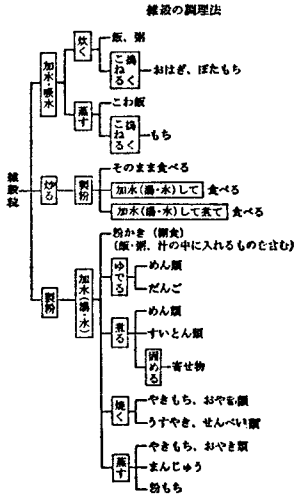
晩年の彼女は、深山幽谷を放浪したといひ。たつた六首の歌しか残さなかつた黄真伊だが、それは、朝鮮史の珠玉の一滴である。

## 雑穀といも

石川尚子

昨年はおもに、献立を構成している食品を取りあげて書かせていただいたが、本年は、書き残した食品、台所や食の道具、食事のとりきめや食べ方などについてまとめてみたい。

書き残した食品としてまず最初に「雑穀といも」を取りあげる。エネルギー源となるでんぷんをどんな食品から摂っているかによって、それぞれの地域の食文化が特徴づけられるであろう。米づくりを始めた弥生人たちの植物性熱量源の割合をみると、弥生前期には、米は5%にみえず、残りは、雑穀、いも、どんぐり類など米以外のでんぷん質食料であった。中



「長野県における雑穀の栽培状況と調理法」(長野県短期大学紀要第44号)より

期にはそれがほぼ同数となり、後期には70%・30%と米の割合が大きくなっている(『日本の古代4』中央公論社)。

このように、次第に米の主食化が定着するわが国だが、米づくりの担い手である農民や貧しい人びとの日常の主食は、雑穀といもであった。上表は、雑穀の調理法を示したものが、多様な食べ方がくふうされていたことがわかる。しかし、一部「村おこし運動」などで見直されているもの、生産量も激減し、食卓からは姿を消した雑穀が多い。

いも類についてみると、江戸時代に移入されたさつまいもが、飢饉に欠かせない救荒食品として普及したことが注目される。寛政元年(一七八五)には、さつまいも料理一二三種類を掲載した『甘藷百珍』という専門書までが出版されている。埼玉県川越市は、さつまいもの生産地として有名だが、市民のなかに「川越いも友の会」があって、さつまいもの食文化を広く伝える活動を繰り返している。さつまいも資料館もあるのでは是非一度訪ねていただきたい。

(さつまいも資料館 ☎ 0492-43-8243)

## 赤穂高校へ転勤して

高遠高校に勤務して十一年経っていた。十年以上は膠着人事という県の指導もあり、転勤を考えていた折、赤穂高校と駒ヶ根工業高校の兼務で移動ができる話が出てきた。通勤時間は片道たっぷり一時間はあるし、二校兼務の落ち着かなさなど問題点はいろいろあったが、家庭科のように少人数教師の職員の人事移動は非常にむずかしい状況だったので、この移動を承知した。一九七九年の春である。本務校は赤穂で、週四日、駒ヶ根工業は週二日の勤務であった。その時、赤穂高校の「家庭一般」は女子のみ、普通科の男子は体育を、商業科の男子は商業の専門科目を履修していた。選択科目は「被服」と「食物」が三単位ずつ開講されていた。「家庭一般」には男子が数人はいっていた。選択科目を履修していない男子が、かねがねその筋から問題にされていたが、これについては、県の教育

指導課と、私たち教育文化会議との間で、一九七三年の教育課程改訂にともなうさまざまなことを交渉したなかに、「好ましいことではないが、男子の選択者がいる場合には、充分な配慮と手だてを講じて指導する」という文書を取り交わしている。基礎的な科目を学習した上に選択科目をのせることが当を得ていることはたしかである。しかし、現実になんか希望者がいた場合に拒否をしないという道を、長野県の場合は残してあった。それを受けて、県下の高校の約半数は、このような形の男子の受け入れを教育課程表に明示している。赤穂高校もそのなかの一枚であった。男女ともきわめてまじめな気持ちで「食物」を選択している生徒の多い中で、進学に対応する科目を避けて選んでいる者も、毎年何人かはいた。そういう生徒は往々にして授業中も落ちつかず、集中力を欠き、提出物がきちんと処理できなかつたり、忘れものも多いという基本的な生活習慣の不足が目についた。家庭科の教師のなかには、「劣等生の救済事業ではあるまいし、いい加減な動機で選択してくる生徒（特に男子）まで受け入れることはない」と主張する人もいた。安易な学習態度の生徒を肯定するつもりはないが、男女共学の家庭科を推進している時期には、それも丸がえにして指導をしながら、学校教育のなかで学習意欲や、学力のつけ方などのグローバルな問題にせまることが必要なのではないかと考えていた。

## 箕面忠魂碑違憲訴訟を支援する会 (1)

『We』や『We』の会』に関わりだしてまだ間もないほうが連載をもたせてもらえるなんて、『We』ってほんとに寛容だなあと思う。だからとって遠慮はなるべくせずに書いていけたら…と勢い込んでいたら、ちょうどテレビで礼宮文仁氏と川嶋紀子さんの「納采の儀」の様子が報じられていた。そう、差別意識を人並みに(?) 持っていたほうが、そもそも差別のことに興味を持ちだしたのは、天皇制に対する疑問からだった。

ちょうどぼくが大学二回生のときに、一番で画期的な勝訴を勝ち取った箕面忠魂碑違憲訴訟。その運動に、就職してから関わりだしたぼくは、その後、それを通じて様々な人たちと出会い、またいろいろなることを教えられていく。忠魂碑というのは靖国神社の地域村落版ともいべき存在で、靖国神社―護国神社―忠魂碑というかたちで戦前国家神道を隅々に民衆レベルまで浸透させようとしたものであった。お国のために名誉の戦死をすれば靖国に祀られるぞと言われた人たちは、同じように忠魂碑にも祀られたわけである。そして、忠魂碑は、靖国神社まで行けない人たちのため

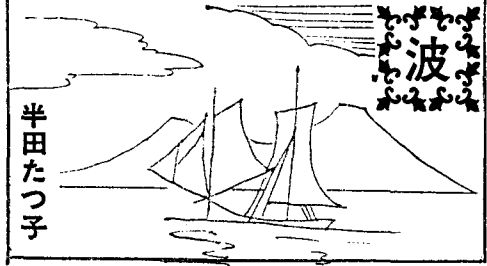
# 広がる運動

## ■中村英之 広がる人の輪

に、村での「天皇の軍隊」の戦死者だけが入れる「靖国」の役目を果たしたのである。箕面市は、その戦前の国家神道・軍国主義の遺物であり宗教施設である忠魂碑を公費で移転建立し、また、忠魂碑の前で毎年行われていた「慰霊祭」に市長・教育長らが出席し、公費を支出していたのである。これらの箕面市の行為に対し、主婦の神坂瑤子さんらが、政教分離の原則に違反するとして提訴したのが「箕面忠魂碑違憲訴訟」である。

「箕面忠魂碑違憲訴訟を支援する会」というのは、原告を中心としてこの訴訟を支え、学習を重ねている会である。戦争で兄を失った原告の古川佳子さんの気負いのない自然な反戦の姿勢に象徴されるように、反戦とは、戦争責任を問いつけるとは、何も難しい勇ましい言葉を連ねることではない、二度とあのようなことを犯してはならない、犯させてはならないという気持ちだということ。そして、反戦の意志を表現し続けることが何よりも大事なのだということを教えてくれたのが、その後のぼくに運動のありかたとか人間の生き方とかを示唆してくれた忠魂碑の闘いであり、その人たちであったと思う。

## 男女必修の家庭科が 学校を変える



長い間、家庭科について考え、語り、書いてきた。ほとんどの人が、家庭科を家事・裁縫、女子向き実用教科と思っているから、その概念を破くことから始めなければならなかった。ようやく「新しい家庭科」をイメージしてもらえた時、次に尋ねられるのは「そういう家庭科を教える力量を持った先生がいいますか？」だ。すかさず『家庭科新時代』を見せるのだが、Weが追求している家庭科を、日本中の中学・高校で男女ともに学ぶようになった時、学校は変わる——私のこの確信を伝

えるのは、容易ではない。

子どもたちの知的好奇心や、興味・関心に応えず、入試のための断片的知識を詰め込んでいる学校。子どもたちを偏差値で縦一列に並べ、抜きつ抜かれつの競争に馳り立てている学校。「フーン」を突きつける子どもたちの主張に耳を傾け、心情を理解することなく、くだらない規則で縛り上げる学校。これではいけないと悩み発言する教師を孤立させ、はじき出す学校——ここまで堕ちてしまった学校に、親も教師も無力感と諦めが先立つ。学歴無視が学校無視に連なり、すすんだ人が学校を見限る。

しかし、人間の一生で一番柔らかな素敵な年代にある子どもたちは、昨日も今日も明日も、学校に通い、一日の一番いい時間をそこで過ごす。やはり、学校を変えなくてはならない。「家庭科の男女共学ぐらいいで、学校が変わるんですか？」いぶかしげな問いに答えなければならぬ。

「家庭科の男女必修をすすめる会」が全国の男子校など五四三校を対象にアンケートを行ったことは先月号にも書いた。回答は最終的に四三・一％となり、新学習指導要領が中・高校の家庭科を男子も必修としたことへの関

心の高さを物語る。このことについて自由に書いてもらった意見を大別すると、賛成68校、反対12校、その他100校となった。反対意見の中には「必修にして学ばせるような内容は何もない」「家庭科は学校でやるべき科目ではない」がある。家庭科に無縁だった男子校の教師が、家庭科に貧困なイメージしか持てないのは無理ないかもしれないが……。また「男子校の特色から考えて必要なし」「大学受験のため実施しないでしょう」「大学受験教科に身を入れないと本校の存立にかかわる」には、学校の存在理由を受験に成果を挙げることに信じ込む愚かさが露わだ。

家庭科を男女共に学ぶ意義を理解してもらうには、「家庭科とは何か」とともに「学校とは何か」を明らかにしなければならない。二月二十七日のおはようジャーナルで「男子校と家庭科」を取り上げるというので、訪ねてこられたNHKのうら若いKさんは、「共働きなので、私のパートナーは結構家事もするのだけれど、男子の家庭科必修はナンセンス！という意見です」と言う。有名私立男子校出身で「料理ぐらい学校で学ばなくてもできる」のだそう。

「料理ぐらい学校で学ばなくてもできるでし

よう。だから家庭科イコール家事・裁縫なら高校まで男女必修にするのはナンセンスかもしれません。男子生徒が家庭科を学ぶ目的が、シングルライフ、共働き、単身赴任……一切困らないくらしの技術を身につけることにあるなら、小さい時から家事分担をするほうが有効でしょう」。話しながら、私は、かつて女性のエリートたちから、イヤというほど聞かされた言葉を思い出していた。

「私の高校生のころは家庭科が選択だったから、大学進学のために全然学ばなかったけれど、結婚して子どもを産み、育て、りっぱに家庭を営んで、ちっとも困っていないわ」。男子が家庭科を学ぶ時代を迎えて、また同じ言葉をすすんだ、男性から聞く。

「教育は目前の目的にすぐ役立つもの、と考えるところに問題がないでしょうか。中学校教育は高校入試のために、高校教育は大学入試のためであると考える人、人間の幸せは、いいところに就職し、有利な地位を得ることにあり、学校はその目的達成のための受験能力をつけるところと信じている人には、家庭科の男女必修はわかりにくいでしょうね。

人が生きること・死ぬこと・くらすこと・交わることとかかわりなく、膨大な知識を押し

しつける学校に「ヘキエキし、『知りたいこと・学びたいことを教えてよ!』と叫ぶ子どもの心にふるえる力を、私は持ちたい。家庭科に限りない可能性を見出し、この教科の実践を通して学校の意味を問はず作業はそこから始まるのです」。語りながらも、もともと男女で学ぶ楽しい家庭科の実践を世に紹介しなければ、と思った。

女子差別撤廃条約を批准するために、女子必修の家庭科を改めなければならなかったのは周知の事実だ。だから、男女ともに同じ教室で家庭科を学ぶことによって、性別役割分担をつき崩し、意識を変革し、男女平等を生活の中に定着させることができる、との理解はすすんだ。しかし、Weが創りつつある家庭科の中心については、まだ一握りの人しか知らないのだから。

男子校の戸惑いを、文部省は先回りして配慮し、生活技術・生活一般を新設した。予想どおり、男子校はこれに飛びつき、生活技術41%、生活一般34%、家庭一般を選ぼうとするのは5%に過ぎない。男子の家庭科必修は表向きだけ。「電気・機械・情報処理の授業が可能だから、生活技術を」後半二単位を体育や工業基礎、情報技術基礎など専門科目で

代替できるから生活一般を」(いずれもアンケート回答)という抜け道を用意した指導要領の問題点も、もつと語らなければならぬ。

家庭科の先生たち、重い口を開こう!!  
『生命とくらしをいとおしむー家庭科新時代へのまなざしー』(国土社)のあとがきに、私は次のように書いた。

「この教科はいま、より根源的な意味を持つていると思うのです。

子どもたちにとって、勉強は、将来有利な地位と快適な生活を獲得するための『手段』になってしまいました。労働からも、遊びからも切り離され、全面的に学校に囲い込まれた子どもたちが、学校を拒否し、学校の手先となった大人を撃ちます。大人もまた、人工的なシステム社会の中に追い込まれて、生き生きとしたいのちやくらしの実感を持ってなくなってしまいました。食べたり、歩いたり、手で触ったり、人と交わったり、…こんな素朴なエロスを回復したいと願います」。

うれしいことに、男子校アンケートの中に次の文があったことを書き添えたい。「家庭科の理念として、生活を切り開く力をつけることや、性Ⅱ生を直接的に扱いうる教科であるから当然男女共学必修が望ましい」。



# ご協力、ありがとうございました

## —読者アンケート結果報告—

昨年の11月号で、4回目のアンケート調査をお願いしました。前回調査(87年10月号)以降、インタビュー頁の誕生や昨年4月からは表紙も一新しましたので、みな様のご意見、ご感想を、ワクワクしながら待ちました。

1月20日現在、36名の方が回答をお寄せくださいました。ご協力ありがとうございました。結果は以下のとおりです。集計より、各ご意見を重視してまとめました。

第1回目(83年10月号)の109名から比べると、大分回答数が少なかったのですが、ガッカリはしましたが、今後、アンケート様式など、再検討し、みな様のご意見を参考にして、9年目のWeを創っていきたいと思います。

### 1. We を購入されたきっかけは

「家庭科教育」の読者だったので 15  
友人・知人などにすすめられて 9  
ウイ書房からの案内の手紙で 4  
新聞・雑誌の紹介記事を読んで 3

「学校給食で論争しよう」(87/6)、  
「制服一着る・着せられる」(87/7)、  
「原発一知らなくていいのか」(87/8、9)、「Weのルネッサンス」(88/1)、「家庭科一何を評価するのか」(89/6)、「地球市民として生きる」(89/8、9)、「家庭科の可能性を探る」(89/夏増)、「食べものから地球を見る」89/10

### 2. デザイン・体裁は

「よい」58% ・表紙のデザインはおもしろい。Weのロゴを変えたことで、新しい決意をかんずる。表紙はあたたかくともいい。

「普通」33%

「改善すべきこと」・見出し、カットにもう一工夫を。創刊時のWeという字の方が好き。表紙は去年の方がほんわかして好き

・学校、評価、子ども、いのち、老人医療、水等に関するテーマ  
・村田泰彦、干刈あがた、楠原彰、曾田蕭子、木村利人氏へのインタビュー、座談会「新しい家庭科の未来を探る」  
・家庭科の実践、情報  
・文章では星寛治、宮淑子、児玉すみ子、武田秀夫、岡百合子氏、他多数の執筆者があがっております。

### 3. よく読まれる方：何をまっ先に読まれますか

53%の方が「ほとんど全部」と、お答えにられました。まっ先には、「特集」「インタビュー」「発言」「新しい家庭科を創るために」「連載」の順。

「その他」で巻末から読むが3ありました。

### 4. あまり読まれない方に：それはなぜですか

2名回答。2年ほど前はあまり読まない時期があったのですが、今年度は楽しく読んでいます。テーマがどれも良い。  
・そういう人は、ろうかにたってなさい

### 5. 既刊の中で印象に残ったテーマや文章は

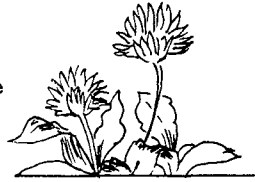
・テーマでは「産む・産まぬ」(83/5)、

### 6. Weをおもしろくするために取り上げてほしいテーマ、拡充してほしい欄は

・家族のあり方、それをめぐる法律、制度。性別役割分業制。別姓。セクシュアル・ハラスメント  
・男女共修のカリキュラム。新しい家庭科をつくる実践の充実。共修の実践紹介。Weの理念が現場で実践されている紹介。授業で性を具体的にとり上げて  
・特集には資料・データを多数そえて  
・気やすく投稿する人が増えるとうい  
・全体にかたい、ほのぼのとしたエピソードをイラスト入りで  
・直接の経験をもっと豊富に  
・四季の身の回りのこと、草木や生きものこと  
・リフォーム自慢  
・1頁ものは舌たらず、せめて2頁に



## Weの 読者会だより



〈We  
大阪の会〉

◆十一月二十六(日)。森之宮の中央青年センターにて。「日本の中のアジア」生きるために海をこえて」というテーマで、小柳伸顕さんにスライドを上映してもらい、お話ししていただきました。小柳さんは釜ヶ崎で関西労働者伝導委員会の専任教師をされるかたわら、「アジアからの出稼ぎ労働者を支える会」でも活躍されている方です。

フィリピンの出稼ぎ労働者の実状をスライドで見た後、「今の日本でのアジア人問題は在日朝鮮人問題から起こっているのだ。在朝問題にきちんと取り組まない限り、すべての外国人問題はなくなりはない」という小柳さんの言葉にハッとさせられた。

ドイツでは朝鮮人と同じように強制連行・労働させられたトルコ人が二百万人住んでい

るといふ。その歴史を忘れることのないよう、残せるものは全て残そうとしているそうだ。「過去に目をつぶるなら未来に何もできない」ということなのだそう。そして増え続ける彼等を追い出そうとはしない。国民一人一人に、ナチズムの反省が生きているということなのだろう。

スライドの中で、フィリピン女性が「日本人は心貧しいのではないか」と言っていた。企業の中で働けば働くほど、人間らしさを失っていく日本の男たちのことだけを言っているのではない。その企業戦士の夫を支える女たちもまた心貧しい。「自分のやりたくないことを他人もやらなくてもよいよう、社会を変えていくことはできないのでしょうか、私たち日本人に投げかけられたこの言葉に一人一人がきちんと答えていかねばならない。今回は二月二十五(日)「いのちありがとう」と題して、遠藤幸子さんが話してくれました。千里公民館の予定です。(北川好美)

〈We  
東久留米の会〉

◆「おばあちゃん、東京で僕たちと一緒に暮らそうよ」と息子が言うと、「狭いからいやだ」と言う。「じゃあ、広ければ東京に出て

くる？」と私が聞くと、母は口ごもって、「近所のおじいさんが都会の息子の所へ引きとられたが、一カ月もしないうちに一人もどって来たよ。老人が新しい土地に移るとボケるらしいよ」と、生まれ育った地を一步も出ない意志をおわせる。

田舎から都会に出て二十余年、夫の仕事も順調で、これからという矢先、夫の父が六十七で急死した。広い家に一人残された六十歳の母のためにUターンするか否かという問題に直面する。誰だって長年親しんだ土地を離れるのはいやだ。若い者がもどるほうが、まだ適応力があるからよいことは頭では理解できる。しかし、夫はまだ三十九歳。Uターンすることは今の仕事を断つことだ。最近、母は「もう少し一人で頑張る。子供の足をひっぱっちゃあいけないと思う」と電話で言う。しかし、それは本音ではない。

『長男だからもどるのは当然』という周囲のプレッシャーを感じる夫。そして、嫁でもある私は当然、夫に従って帰るものと思われている。私はいやだ！一人の人間として地域に根ざし、友人も得て活動し始めた私の人生は少しも問題にされないことが……。私という人間の意志・存在を大切にしてくれない田

舎の人たちに対して心が重い。

以上は、十二月二十三日、瀬戸井宅での集いで話された本音の一部です。瀬戸井さんの夫君の幹生氏のすてきなホストぶりとお料理、ワイン、愛嬢の手づくりクッキー、仕上がったばかりの内装——とても心満たされた夕べでした。

(山中良子)

◆一月の例会も瀬戸井さん宅で。殺風景な集会所での時と違い落着いて心なごむひとときを過ごさせていただきました。

一月二十一日のわが東久留米市の市長選挙は、今後の政局の動向をうらなうものとして注目されていました。新市長の稲葉三千男氏は、「市民との対話の徹底で市民が主人公の市政」を基本姿勢としておられるので、これまでの市民の声を無視した行革の見直しも期待できます。性急に結果を求めず、じっくり時間をかけてみんなのまちづくりをしたいと話していました。

高校の家庭科の講師をしておられる田上さんよりおいしい手作りお菓子とお手紙が寄せられました。まさに教育の現場において、二、三月号テーマ「教育の中の性差別」をひしひしと感じておられる率直なご意見。その一部を紹介させていただきます。

「学校の中の性差別」坂本ななえさんのおっしゃるとおりですね。特に三八頁に同感です。「かくして女子生徒は『美』に向けて自らを駆りたててゆく」。いかに生くるべきか重大な進路選択の時、ちがう価値感が入り込み、安易な道を選んではしまう。性の商品化! 「労働者としての女には低い評価しかつけない」。本当に残念なことです。しかし二十年前より性差別は少なくなってきました。進歩していると考えられます。

(川住広子)

三月の例会は二十四日(土)二時から、瀬戸井さん宅にて。福島に行かれた西内さんも参加の予定です。

### 〈兵庫の会〉

◆一月七日、神戸立市勤労会館で「男が教える家庭科」というテーマで例会を持ちました。東京から半田さん、京都から金森さん、大阪から岩瀬さん、楠崎さん、浅井さん……。みんなで会を作り上げていくという雰囲気、We兵庫というより、今はWe関西なんです。テーマにひかれて初参加の家庭科教師や、教師を目指している人も大勢来られました。

昨年初めて公立高校で家庭科教師として採

用された京都府の山内拓司さん、Weでおなじみの吉田明弘さん、お二人の個性の対比がおもしろい。家政科のある高校で、女性の家庭科教師に刺激され、教えられながらマイペースで家庭科を教えている山内さん。ヤマケンこと山本謙吉さんとの絶妙なコンビで、歌あり、ビデオ、スライドありで教育実習を再現してくれたチャリーこと吉田さん。山内さんの大学時代のゼミ担当の貴田康乃さん(京都教育大)、吉田さんの教育実習校の河上紀子さん(園田学園)も参加、言葉を添えて下さいました。

ハッピーな気分だけに終わらず、家庭科の現状、今何をどうしたらいいかも話し合い、深められました。都議会で議員を通じて、家庭科共学に向けた人事・施設面充実の働きかけのことを半田さんから聞き、神戸市・兵庫県へ働きかけの必要性を感じました。共学家庭科の中身ばかり考えてきたけれど、こうした面は一番弱かったと思いました。会の後、新年会もかねて「春のつどい」に向けての実行委員会を持ちました。二月二十五日、大阪の会の後にも実行委を予定しています。三月二十五日の春のつどい、ぜひお越し下さい。いま、We関西がおもしろい!(西本和代)



# Weに言もおこ なんでもなんでも なんなん



◆フェミニズムの「いま」：インタビューをはじめとしたいくつかの文章を読んでいくうちに、何というか：頭をなぐられたような感じがした。フェミニズムという言葉は入っていても、その背景にある、行動し、戦いを挑んできた人々のことを、私はほとんど知らない。「波」を読んで「主婦とフェミニズム」を読み、自分の甘さを思い知ってしまった。授業の中で、友達の「ごく自然にしている、男女平等なのがいい」との発言を聞いたとき、正直なところ、どういうことだろう、と思った。自然にしていたら、女性はその存在意義すら認められなかったときがあり、そのような状況について、おかしいという人々の行動があつて、今があるのでは…と思つていた。しかし、今の私をみつめてみると、頭でわかっている、行動するまでにはついていない。

女子大という場での自由に、本当に自由なのかというか、学校の外ではどうなのかを考えずに甘んじてはいなかったかどうか。

あれこれ考えるけれど、同時に、まだまだ自分中心にしかものを見ていないと感じる。過去の歴史があつて、今があり、そして、今を生きている自分、自分の立っている場も生きているということ、忘れないでいきたい。Weを読み始め、そんな思いを持ち始めました。

(日本女子大生・星名 綾)

◆たつた今、本屋さんがWe一月号を届けて下さいました。「フェミニズム」は、私にとっての大切な原点です。即、半田さんの「いま」フェミニズムを語るには」と、田中喜美子さんの「主婦とフェミニズム」を読ませていただきました。……その通りと思うことがたくさんありました。特に半田さんの迷いは、大変共感いたします。でも、私の場合も現実が先でした。

子育てと仕事の両立の中、生まれてはじめて「女」という性を真剣に考え、宗教にとりつかれるかのように「フェミニズム」を学びました。私の場合、本当に時代と共に進みましました。アグネス論争でも、子どもがほとんど同じ時期に生まれているため、歩調はピッタ

リでした。「あと五年、私の人生サイクルが遅れていたなら、よいお手本がたくさんあったのに……」と思うから、高校生に教材として持ち込む決心をしました。自分が高校で、こんな授業をしてほしかった……と思える授業をし続けました。

でも、空想をそのまま現実にもちこむのは難しく、やはり拒絶ぎみの生徒もたくさん出ました。また逆に、フェミニズムに非常にのめりこむ生徒を見ると、何というのか「寂しい高校時代だなあ…恋をしたことはないのかなあ…」と思ってしまうのです。自分で授業をしながら、本当におかしな感情なのですがどうして体験もしていないのに…と、不思議に思ってしまうのです。

ただ、高校の授業は自分でもそうですが、後に少しでもイメージとして残っていれば、すごいものだと思います。生徒たちが、今は共感できなくても、後でふつと思ひ出せば「輝き始める」時期が少々なりとも早まるのではないかと思うのです。ただそれだけなのですが、今の私には「フェミニズム」色のない授業は、何一つできない…というのが本音です。「私のため」にやっているのかもしれない。

(金沢・分校淑子)

## 教育ってなんだろう会

〈大井 敏子〉

発足してから六年目を迎える練馬のグループです。学校教育の中で、今子どもたちに何が起きているのだろうか。私たちは、子どもの教育を学校にお任せしてしまっただけで、大人としての責任を果たそうとしていないのではないかと。教育について何も知らないのではないかと。子どもたちの訴えに耳を傾けてこなかったのではないだろうか。……と学校教育に疑問を持ったり、教育について何か気付き始めた大人が集まって話し出しました。会の名称は『教育ってなんだろう会』です。毎月一回、テーマを決めて学習会を開き、語りあったり、年に一、二度、講師を招いて講演会を催し、話を聞いたりと会を続けていくうちに、子ども達の置かれている状況がだんだん見えてきました。私たちは、落ちこぼれたり、いじめで苦しんでいる子、登校拒否を続けている子、どんな子どもたちにも居心地よい場を作っていくこと、市民参加の開かれた教育制度を作り出していくことが、大人の責任だと思っただけで活動しています。

昨年、『校則ってなあに―子どもの人権をめぐって―』という冊子を作りました。その中に練馬区立中学校、34校の校則を一覧表にまとめました。是非、ご一読ください。

連絡先 〒178 東京都練馬区大泉町2-31-23 大井敏子

☎ 925-2842

## 自己紹介うぶぐるイキイキ

## 地球の子どもの家

〈柳田 陽子〉

子どもと親、アシスタント(教師)と一緒につくる小さな学校です。「学校」といっても無認可で自由なこの空間を、私たちは「地球っ子」と呼んでいます。現在、生徒が約二十五名、アシスタントは毎日六名前後(全部で約十五名)、それにうさぎ一羽とわとり二羽がここにはいます。

子どもたちは、九時から五時までの間なら、来る時間も帰る時間も自由、一日何をして過ごすかも自分で決めます。木工や手織り、お菓子作り、講座「地球」、絵の話、配役を決めて絵本を読む、筆で書く……などのプログラムを選んでいいし、おしゃべりしたり、マンガを読んだり、外で遊んでいる子もいます。数学や英語のテキストを使った学習も、ひとりひとりに合った方法を探しながらやっています。感受性豊かで、生き活きた子どもたちの姿は、「登校拒否児」という言葉のイメージから遠いものです。近くの野川公園を駆け回ったり、七歳と十七歳の子と一緒にテニスしたり、ミーティングで六歳の子の意見に胸を打たれたり、大きな大きな穴を掘ったり、パーティを企画したり、大きな学校ではできない様々な経験の中で、子どもたちは毎日変化を重ねています。大人も彼らに刺激されて、ほんの少しずつ……。

連絡先 〒183 府中市多磨町2-51-7 地球の子どもの家

☎ 0423-62-8048

# ・ We の会通信 ・

連絡先 鈴木昭彦

〒146 東京都大田区矢口3-30-1-109

☎03-756-4551 FAX03-756-0014

入会申し込み先 芦谷薫

〒182 調布市東つつじヶ丘3-6-17

〒振替/東京2-402519

We の会は We 誌と読者の方たちをつなぐ会です。毎年12月の総会で活動方針などを決定。年会費1200円で、会員の声・情報をのせた通信をお届けします。

## ’90年 We 夏季フォーラムの準備進行中

今年の夏季フォーラムは八月三日(金)～五日(日)伊豆長岡の富士見ハイソホテルにて開催の予定です。

一昨年の関西・能勢、さらに昨年の九州・熊本の熱気に煽られながら、今年度夏季フォーラムの成功に向けて実行委員会では準備を進めています。

昨年九月の第一回実行委員会以来、幾度か会合を重ね、話し合いを続けてきました。いままでとは多少視点を変えて、ということ、実行委員会では基本テーマとしていくつか候補を挙げました。いまのところ決定には至っておりませんが、「男女共生時代を生き

る―社会は変わる、家庭も変わる―や、「出会いには歴史をつくる」などから最終的に選ばれる状況です。全体会や分科会の内容が煮詰まってくるにつれて、基本テーマもよりはつきりと浮かび上がってくるでしょう。

今までに決定を見ている全体の流れについて大きっぱにご紹介します。

第一日(八月三日・金)の午後には木島知草さんの人形劇と語り、夜は参加者を任意のグループに分けてのゆるやかな交流会を予定しています。

二日目(八月四日・土)の午前はテーマ別の分科会、これには前夜の交流会をうけた自然発生的な分科会も含まれます。午後の全体会は関千枝子さんをコーディネーターとして、シンポジストの一人に最首悟さん、残るシンポジストについては、現在、交渉中です。

また、このシンポジウムのテーマについても、最終的に絞りこんでいるところです。男女共生の問題、アジアの問題、水俣の問題、家庭科のみならず、教育のかかえるさまざまな問題などから決まってくると思います。

夜は「この指とまれ」式の交流会などが計画されています。

また、せっかく伊豆へでかけるわけですから、野外コースも充実したものを、と計画。三日目(八月五日・日)の午前には従来と違う企画を、と考えています。(今までのように各分科会の報告に、三日目の午前中をつかうのはやめて、前夜の内に簡単なまとめなり、感想なりを書いたものをコピーして参加者に配布してはどうかという案が出ました)。また、頭ばかり使っている疲れるので体や手を動かすものもとり入れてはどうか、山形のフォーラムにあったような、伝統文化の紹介・実演のようなコーナーもほしいとの意見も出ました。

三月十日、十一日に、現地伊豆長岡のホテルで合宿実行委員会を行います。より詳細に、全体会や分科会、その他の活動について話し合いができるでしょうし、子ども活動のためにも十分な下見が可能かと思えます。

次号以下で実行委員会の活動状況や、フォーラムの詳細な計画、企画内容について、随時、お知らせしていきます。

何か面白い、楽しいプラン、アイデアをお持ちの方は、ぜひ事務局までご連絡下さい。実行委員に名乗りをあげてくださるかた、大歓迎です。

〈事務局・鈴木昭彦〉

# 泉

★★★★★★

この頁はあなたと私の情報交換の場  
小さなスペースですが、ご利用ください。

◆冊子・学校をひらくために 「父母の教育権とPTA」研究会

・内容 「父母の教育権」の確立を—今橋盛勝、子どもの人権と学校・父母—牧証名、まだまだ遠い日本の父母の教育権確立—中島允久他、ここまで確立している欧米の父母の教育権—窪田真二他

・B5版 92頁 五百円(送料二百円)  
・問合先 大沢周子(〒249 逗子市小坪6-17-6 ☎0467-23-3480) 水・木曜日a.m.10時~m.四時、高橋雅子(〒162 東京都新宿区南横町2 ☎03-267-6885) 月・金曜日a.m.10時~m.四時

◆冊子・校則ってなあに(子どもの人権をめぐって)教育ってなんだろう会

・内容 子どもと人権—伊藤芳朗、練馬区立中学校34校校則一覽、現役中学生へアンケート

ーと、中学生になるといくらかかる? 他

・B5版 20頁 三百円  
・問合先 大井敏子(〒178 東京都練馬区大泉町2-31-23 ☎03-925-2842)

◆映画「信号ばか」

菅田良哉氏(本誌88年十月号「青春ZIG」で紹介)が、製作・脚本・監督と一人三役で作りあげた映画です。

・内容 母親を交通事故で亡くした少年が、母の形見の黄色い旗で学校近くの横断歩道に立ち、交通安全を呼びかける。そこで、少年についたアダ名が「信号ばか」。菅原文太、吉村実子他出演。

・同時上映「ヒロシマという名の少年」  
・日時 三月二十四日(土)~四月十三日(金)  
・場所 キネカ大森(丁R大森駅東口西友5F)  
・一般千二百円、小中学生八百円(前売)  
・問合先 菅田事務所(〒154 東京都世田谷区池尻2-34-3 池尻マンション303 ☎03-5486-4083)

◆『在日』ミニコミ・ブックフェア

・在日韓国・朝鮮人の人権問題など『在日』に係る問題と取り組む団体や個人・運動体の

発行するミニコミを展示・販売します。

・会場・日程 神戸—神戸学生青年センター ☎078-851-2760 三月十六日~十八日  
広島—家族社 ☎082-211-0266 三月十七日~十八日、広島キリスト教社会館 ☎082-232-4274 三月十九日~二十日  
札幌—ミニコミ喫茶・ひらひら ☎011-746-2801 三月二十日~二十七日

・問合先 模索舎(〒160 東京都新宿区新宿2-4-9 ☎03-332-3557)

◆フェミニズム・宗教・平和の会 第五回シンポジウム

・テーマ フェミニズムから見た東アジアの経済発展と宗教  
・日時 三月三十一日(土)二時~五時半  
・場所 東京都婦人情報センター(飯田橋セントラル・プラザ15F) 会費六百元  
・問合先 奥田暁子 ☎0472-52-1167

◆女子学生のための就職ガイドセミナー

・日時 三月二十九日(木)~三十日(金)  
・場所 神奈川県立婦人総合センター  
・申込(電話)同センター(〒251 藤沢市江の島1-11-1 ☎0466-27-2111)☎線561~2)



# 十字路

〈福島〉消費者運動に  
冷水 (朝日1/25)

県総合生活協同組合連合会が行った総選挙立候補予定者への消費税アンケートに対して、県が公表を取りやめるよう指導していた問題は、消費税論議をきっかけに全国的に広まってきた消費者運動

に冷水を浴びせる結果になった。「特定候補者への投票を促すことになる」という県側と、「会員に判断材料を与える目的」という生協連側の認識の違いは大きい。一般の有権者の政治的な行動を行政がどこまで規制できるか、という問題をはらんでいるだけに、今後論議を呼びそうだ。(西内みなみ)

〈鳥取〉障害者雇用を率先―既に社員の一割以上 (新日本海1/19)

八頭郡用瀬町用瀬の電機部品メーカー、用瀬電機は、従業員の一割を超過する十四人の心身障害者を採用、温かい雰囲気のみならず業績を伸ばしている。二月には新工場建設に着手、これに伴ってさらに二人の身障者の雇用

を内定しており、県内で二番目の重度障害者多数雇用事業所の指定を受けることがほぼ確実となっている。

悲惨な戦争を忘れないで―体験まとめた本発刊 (新日本海1/26)

悲しい戦争はもうご免。県連合婦人会(近藤久子会長)はこのほど、婦人たちの戦争体験をまとめた本「子どもに伝える戦争体験」を発刊した。年々風化していく悲惨な戦争体験を後世に伝え、真に平和で豊かな未来を築くための「一助」にしようというのがある。文脈には平和を願う「体験」の思いがあふれている。申し込みは〒680 鳥取市扇町21、鳥取県連合婦人会 (前田享子)

〈埼玉〉「ゴルフ場公害」で調停申請―飯能市民ら業者相手に建設中止求める (朝日1/8)

既設と造成中を含めゴルフ場が七カ所もあり、埼玉県「ゴルフ場銀座」になりそうな飯能市の市民らが、建設工事中の「西武飯能カントリー倶楽部」(松山善三社長)を相手として、「農業による環境汚染が生じる」などと工事の中止などを求める調停を八日、総理府の公害等調整委員会(勝見嘉美委員長)に申請した。(協美智子)

〈愛知〉丸刈りイヤ8割弱―「市民の集い」中学生に街頭調査 (朝日1/22)

中学生の丸刈りやおかっぱについて、街頭でインタビュー形式のアンケートを続けた岡崎市の「中学生の頭髮の自由化を求める市民の集い」代表・森山昭雄愛教大教授は二十一日、「中学生は、四人に三人までが丸刈りをいやがり、八〇%以上が丸刈り校則はない方がいいと考えている」という調査結果をまとめ、同市民会館で公表した。(平野利依)

「教師独自の戦争観困る」―学校が「学年だより」回収 (朝日2/9)

名古屋市港区の市立南陽中学校(中野宇宙校長、生徒数約八百人)で、教師が生徒やその父母とコミュニケーションを図る目的で毎月一回、各学年ごとに配布していた「学年だより」が、教師独自の戦争観を載せたなどの理由で、昨年十一月発行の八号が学校に回収され、その後の発行も差し止められている。学年だよりを作った教師らは、「ひどい独断や偏見だとは、とても思えない。日ごろ自分が見聞きして感じたことを生徒や父母にも知って欲しかっただけなのに」と話している。(山本直子)

〈香川〉女性委員、一割弱―市民参加、まだ不十分（毎日2/10）

高松市政に市民の声を反映させるための審議会や委員会は、男性委員が中心で、女性委員は一割弱にすぎないことが九日、市の婦人行政研究会（代表Ⅱ青木恵計・市民生活課長）がまとめた報告書「男女の共同社会参加にむけて」で明らかになった。青木代表は、今回の調査結果について「技術系の会では、女性に専門職が少ないこともあり、女性の参加が遅れている。今後、消費者や生活者としての意見を市政に反映できるように女性委員を増やす必要がある」としている。（岡内須美子）

〈富山〉「社会は男女平等」と思う―女性全体のわずか4・6%（北日本1/28）

富山市はこのほど、「女性に関する意識と生活実態調査」の結果をまとめた。調査は市が昨年八月一日から十二日間、男女合計二千人（満二十歳―七十九歳）を対象に行った。「男女平等意識」で、男女六七・三%が「不平等がある」と答えた。「平等になっている」と答えた人は男性が一五・〇%、女性が四・六%にすぎない。全国調査（二三・〇%）に比べ、富山の女性の方が不平等感を抱いてい

ることが分かった。（河原敏美）

〈新潟〉木のぬくもりで心豊かに―閑屋小「稚松ホール」完成（新潟日報1/31）

鉄筋校舎の中にも潤いを―と新潟市の閑屋小学校（長川正江校長）に、床や壁を木材で覆ったユニークな木の部屋「稚松ホール」が誕生した。ホールは空き教室の活用のため昭和六十二年度に始まった「木の教育研修施設」整備事業の一環。鉄筋校舎の四階集会室など約百二十平方メートルを総工費千二百万円で改修した。市内では三校目で、十二畳の和室も備えたのが同校の特徴。集会や学校行事、地域との交流などに使われる。（山口久子）

〈岐阜〉河口堰のデメリット解説―反対する会「長良川ネットワーク」創刊（朝日1/28）

「長良川河口堰建設に反対する会」（天野礼子事務局長）がこのほど機関紙「長良川ネットワーク」を創刊した。創刊号はタブロイド判、四頁。一面は天野事務局長の「なぜ長良川河口堰に反対するのか」。利水を目的にしていた河口堰に、途中から治水目的が加わったことへの疑問、河口堰建設のデメリットを展開している。今後、年四回発行し、建設反

対理論と流域住民の声をメーンに反対運動の情報全国に郵送で届ける。（高橋和江）

〈奈良〉暴走族―高校生増え再編進む（朝日1/23）

県警交通指導課はこのほど、昨年一年間の暴走族の実態、取り締まり状況をまとめた。グループ数、人数とも増加しており、高校生がほぼ倍増するなど、低年齢化が進み、グループで爆音を鳴らして暴走する例が増えている。（乾庸子）

〈大阪〉タイの児童を人身売買から救おう―「守る会」結成を呼びかけ（神戸2/16）

タイ北部の農村地帯では、貧困のために娘を売春シンジケートに売り渡す家庭が多く、タイ全体で約八十万人の児童が売春宿に監禁され客をとらされているといわれる。首都バンコクの下町に住み、児童売春の追跡調査を行った大阪の女性フリーライターが、そんな少女たちを救うため「人身売買からアジアの子供を守る会」を結成しようとして、協力者を募っている。同会の問い合わせは、ユニセフ関西事務所（06・575・5406）へ。（由良サダコ）

## ★凍結受精卵で赤ちゃん誕生

体外受精卵を凍らせて保存した後、解凍して子宮に戻す「受精卵凍結」の方法で妊娠した37歳の母親が25日、千葉県市川市の東京歯科大市川総合病院で無事、女の双子の赤ちゃんを産んだ。受精卵凍結の技術を伝った赤ちゃん誕生は国内初。

不妊症の治療法として、世界でも'84年以来300人以上の出産があるが、この方法が安全か、凍結された「生命の芽生え」をどう取り扱うかなど、医療技術、倫理、社会上の問題で論議が続くそうだ。(12/26日付朝日)

## ★倫理委まだまだ閉鎖的

全国で相次ぎ申請されている心臓や肝臓など臓器移植の動きの中、その是非の判断で注目されている大学医学部や医科大学の倫理委員会の構成メンバーに、女性や学外の委員が少なく、審議もほとんど非公開という実態が、徳島大医学部の斎藤隆雄教授の実施した全国調査で明らかにされた。同教授は「倫理委は学外からの意見を聴き、男女の考えも反映することが求められており、現状の委員構成や審議の非公開は早急に改善する必要がある」と訴える。(1/31日付朝日)

## ★「夫婦で育児」へ環境整備を

厚相の私的諮問機関「これからの家庭と子育てに関する懇談会」（座長、木村尚三郎・東大教授）の報告書が、31日まとまったがこの中で、共働きの社員については、企業自身が「仕事優先、家庭第二」というこれまでの考えを改め、双方とも両立していけるような形に変えていくことが必要になってくると分析。育児休業を広め、職場内保育所を整えるなどのほか、夫の育児への参加を促すために、出勤、退社時間を調整する、家族が一緒に過ごす機会を確保していくために、子どもの年齢に応じた人事配置を行うなど共働き社員に対するきめ細かな配慮を求める提言をした。厚生省は近く労働省など関係省庁とも協議し、提言を

実現していくための事業を新年度から進めていく。(2/1日付朝日)

## ★夫婦別姓、本格検討へ——法制審

夫婦別姓の論議が高まる中、法相の諮問機関である法制審議会民法部会身分法小委員会(加藤一郎委員長)は11日までに、休会中の委員会を再開し、夫婦別姓問題の検討に着手する方針を固めた。夫婦別姓を行うには、民法、戸籍法の改正が必要で、同委員会で作成することになるが、子どもの姓をどうするかなどの難問も多く、夫婦別姓の実現までにはまだかなりの時間がかかりそうだ。(1/11日付読売)

## ★ODAに女性の役割重視

外務省は、開発途上国に対する援助が途上国の女性の利益にかなない、地位向上にも確実に役立つようにと、途上国側での援助の企画・立案から実施、評価に至るすべての段階に女性が参加する機会を広げ、その声を反映させるためのガイドライン策定に乗り出す。政府開発援助(ODA)の実施機関である国際協力事業団(JICA)や海外経済協力基金(OECF)との共同作業で、手始めに外部の有識者や専門家から成る「開発における女性の役割に関する研究会」をJICAに近く設置し、8月までに報告書をまとめる。(2/5日付朝日)

## ★ソ連、一党独裁に終止符

ソ連共産党は7日、ロシア革命以来70年余にわたる権力独占に終止符を打ち、複数政党制への道を歩むことを決めた。モスクワで3日間にわたり開かれた党中央委員会総会は7日午後、ゴルバチョフ党書記長(最高会議議長)の提案した党基本大綱(プラットフォーム)草案を保守派を含め圧倒的多数でほぼ原案通り採択した。これによりペレストロイカは新段階に突入し、なお一党独裁体制をとっている中国や朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、キューバなどに大きな影響を及ぼすことになる。(2/8日付読売)

## ★自民党、安定多数へ

'90年代の政治潮流を占う第39回衆院選挙が18日、全国一斉に投票が行なわれたが、自民党は、公認だけで275議席を確保、保守系無所属を加えると完全安定多数287議席の勢力となった。社会党も140議席に達したが、中道勢力などが議席を減らす結果となり、参院に続く与野党逆転は実現せず今後、消費者問題や国会運営などにも影響を与えることになった。(2/19日付各紙)

## ★本島長崎市長、撃たれ重傷

「天皇に戦争責任はある」と、昭和天皇の戦争責任について発言していた長崎市の本島等市長が18日、市庁舎前で男に短銃で撃たれ、1ヵ月の重傷を負った(2月21日退院)。県警は同日夜、右翼団体「正気塾」の田尻和美容疑者を逮捕。言論を暴力で封殺しようとする風潮が根強くひそんでいることを、改めて示した。(1/19、2/22日付各紙)

## ★指導要領は「法規的性質」

「学習指導要領から逸脱したり、教科書を使わない授業をした」などの理由で、1970年、福岡県教育委員会から懲戒免職となった福岡県柳川市の県立伝習館高校の元社会科教師3人が、県教委を相手取って処分を取り消しを求めた「伝習館訴訟」の上告審判決が18日、最高裁第一小法廷であった。大堀誠一裁判長は、県教委の処分について、「社会観念上、著しく妥当性を欠くものとはいえない」としていずれも適法と判断。2人の教師の処分を取り消した1、2審判決を破棄し、いずれも請求を棄却する逆転判決を言い渡した。1、2審が「処分は適法」とした残り1人の上告は棄却し、裁判は提訴から20年で、教師側の全面敗訴で確定した。教師が学習指導要領を逸脱したり、教科書の使用義務に違反した場合、懲戒免職処分になり得る、との最高裁としての初判断を示したことで、今後教育現場などに影響が出そうだ。(1/19日付朝日)

## ★「生活科」の評価——努力重視

'92年度から導入される小学校1、2年の「生活科」の評価について、文部省は評価の観点と方法を盛りこんだ初めての「指導資料」をまとめ、全国のすべての小学校に送付した。生活科新設にあたっては社会、理科の「道徳化」との批判もあり、評価についても「他の教科と同様、科学として扱うべきだ」とする論議があったが、「指導資料」では特殊な教科である点を強調して事実上特別扱いを求め、評価の観点として「身近な社会や自然への関心・気付き」「自分自身や自分の生活への関心・思考」「生活上必要な習慣・技能」「実践的態度」の4点をあげ、評価の方法としては、「学習の結果そのものよりも、児童が示す努力や積極性を重視」を基本的な考えにすえ、「チェックリスト、児童との対話、話し合い、発表、作文、作品などを手掛かりにした多様で柔軟な評価方法」を工夫するよう求めている。(2/7日付読売)

## ★家庭科に困惑する男子高

このほど「家庭科の男女共修をすすめる会」が全国の国公立の男子高を対象にしたアンケート調査を行った。(回答229校、回収率42.1%)。それによると、4単位の選択科目については、「生活技術」「生活一般」を選び、「生活一般」の後半2単位を「体育」など他科目で代替しようとする学校が目立った。「生活技術」を選んだ理由については、「現在の施設、教師陣で授業ができる」が最も多く、「生活一般」では「体育、情報基礎など他科目に代替できる」という理由が目立ち、36%が「代替する」としている。この結果について同会の持田ナミさんは、『「家庭一般」が、女子向きと見られるなど、心配していた通りの結果が出た。家庭科は人間が自立して生きていくための基本教科なのに、他科目に代替されて週2時間の授業になったら、十分な学習ができなくなる」と案じる。(1/15日付読売、1/17日付朝日)

## ●編集後記

◆90年代の幕明け、Weも九年目に入ります。毎号のテーマに関わって、投稿、大歓迎です。

購読継続の方で、まだ誌代の入金のお済んでいらっしやらない方は、綴じ込みの払込み用紙で、すぐ手続きをして下さい。新刊、羽生種子さんの詩集「夢運び屋」(定価一五四五円、送料二六〇円)ができました。美しい本です。同じ用紙で注文できます。(青木)

◆今年のWe春のつどいは、We兵庫の会・大阪の会主催で、三月二十五日(日)一時~五時。神戸学生青年センター(阪急六甲口下車 078-851-2760)で開かれます。「好きです! 新男類~90年代は女男共生の時代」のテーマで、関西青時週、結婚改姓を考え

る会、家庭科教師をめざす吉田明弘さんたちからのメッセージをお届けします。誘い合っでご参加ください。(稲邑)

♣この号が初めての仕事です。最初に岡さんからの原稿が届いたとき、それは嬉しかったです。行き帰りの電車の中でバックナンバーを読んで、Weに関われる喜びを日々新たにしています。創る側よりもまだ読者の側にいるような私ですが、この気持をずっと大事にしようと思っております。早く一人前になれるように、どうぞよろしくおねがいいたします。(河村ふみ)

♥中二の我が娘は、中学に入った頃から、だんだん無口になってきて、この頃では、ほとんどしゃべりません。友達

とは電話で一時間も話していると云うのに…。学校について、授業について、何を考えどんな悩みを持っているのかいろいろ聞きたいのに、何を聞いても「関係ないでしょ!」の一言。「学校を知りたい」と言う私の意気込みは空回りしてしまいます。(柳田)

★九年目のWeを、新しい装いでお手もとに届けます。諸般の事情から、定価を据置いために、八ページ減らしましたが、目次と連載が変わりましたが、内容はいつそう濃く充実しています。どうぞ、今年もWeをかわいがって下さいませ。Weへのご意見、ご要望をぜひお寄せ下さいませ。★フォローは三月十日、十一日に現地で合宿をして、細かいことをつめました。★次は「生、そして死に迫る教育」です。難しいテーマに挑戦!(半田)

**Weバックナンバー** (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおさえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- |       |                      |        |                        |
|-------|----------------------|--------|------------------------|
| 83/10 | 今教科書問題を問う (¥500)     | 87/夏   | 女たちの教育改革提言 (¥700)      |
| 83/冬  | 学校はよみがえり得るか (¥700)   | 88/夏   | 教育はどこへ (¥700)          |
| 85/1  | “学び・教える”とは (¥530)    | 88/6   | 学校—今、親にできること (¥550)    |
| 86/6  | いじめ—その根っこには何か (¥530) | 89/4   | 何をねらうか「生活科」 (¥567)     |
| 87/4  | 先生は悩んでいる (¥530)      | 89/5   | 内申書—その功罪を問う (¥567)     |
| 87/6  | 学校給食で論争しよう (¥530)    | 89/12  | コミュニケーション—私をひらく (¥567) |
| 87/7  | 「制服」着る、着せられる (¥530)  | 90/1   | フェミニズムの“いま” (¥567)     |
| 85/5  | 学校—絶望? 希望? (¥550)    | 90/2.3 | 教育の中の性差別 (¥567)        |

## 新しい家庭科—

Vol.9 No.1 1990年3月20日発行  
定価567円(本体550円+税17円)送料共  
年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)  
編集兼発行人/半田たつ子

## 発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎・FAX03(326)1380 郵便振替 東京6-59867  
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292  
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

家庭科男女とも必修!  
共学の授業づくりにWeが贈る

## ● 家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編  
男女共修の家庭科の授業で、  
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編  
2060円 円310円



## ● 男女で学ぶ新しい家庭科

—京都における歩みと実践—

森 幸枝  
1339円 円260円

## ● 消費者教育の創造

宮坂広作  
2060円 円260円

### 最新刊

#### ● 教室のミニ舞台から 児玉澄子

—こぼれ話20—

1350円 円260円

#### ● 若いいのちの像 児玉澄子

—私のカウンセリング入門—

1339円 円260円

#### ● 子どもって不思議 長谷川孝

—学ぶことは生きること—

1339円 円260円

#### ● 人間って不思議 半田たつ子

—一つの視角—

1545円 円310円

#### ● 私塾霞国語教室風景

武田秀夫  
1751円 円260円

#### ● 子ども発、大人へ

—いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」と小沢牧子  
1339円 円260円

#### ● らくだが翔んだ 平井雷太

—教育の常識の非常識—

1236円 円260円

### <羽生楨子詩集>

#### ● 木、鳥、娘たちとわたし

1030円 円260円

#### ● 絵 III

1030円 円260円

### 近刊

#### ● 夢運び屋

1545円 円310円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

# ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14  
電話 326-1380 振替東京 6-59867